更外協力の

ガーナ編

別力 隊員 の記録

昭和55年12月

国際協力事業団 青年海外協力隊事務局

۵



国際協加事	業団
受入 月日 584.5.225	5/12)
全錄No. 065795	3618 JVP

.

•

序にかえて

昭和55年12月 常 7年超外協力隊 野村 忠策

背年海外協力隊が発足して15年を経た。昭和40年末から41年初にかけて1 次隊の隊員約30名がフィリピン、マレイシア、カンボディア、ラオスの4ヵ 国へ派遣されて以来、今日主でに約3,400名の隊員が28の開発途上諸国へ派 造された。協力隊創設にかかわりをもった者のひとりとして、今昔の窓に耐 えない。

同時に、このような協力隊の発展を見るにつけ私は、受入各国で高い評価を培ってきた隊員および、本事業の意義を理解して協力隊を育てることに地道な努力を領注されてきた政界および都道府県の方がた、背少年運動指導者をはじめ広範な関係者各位に対して深甚なる敬意と感謝の意を表したい。

さて、協力隊事務局では昭和54年度から、隊員が事務局へ提出した業務報告事を国別にとりまとめ、『海外協力の現場から』と関して報告事集の刊行を始めた。幸い、各界から「協力隊員の生々しい活動と生活状況に触れて感動をおぼえる」との好評をいただいたので、本年度もネパール、トンガ、西サモア、ホンデュラス、エル・サルヴァドル、コスタ・リカ、ボリヴィア、シリア、ガーナの9ヵ国籍を刊行することとした。

いうまでもなく、協力隊員の活動は、開発途上諸国の国づくり、人づくりに"草の根"で協力しようとする我が国の青年のボランティア活動である。 日本とは全く異なる文化社会で、そこに住む人びとと共に暮らし、共に働くことには種々の"壁"があり、時には挫折感にとらわれる。報告担は、その壁を乗り越えて新しい協力手法を生み出そうと日夜努力している隊員の哀歓に満ちた貴重な体験の記録である。協力隊事業の財産であると同時に、我が国、我が国民全体の財産でもある。

私は本事業は隊員受入国にとってはもちろん。我が国の将来にとっても案時らしい事業であると確信している。今後の本事業の飛躍的発展のためには国民各位の御理解。御支援が不可欠である。一層。御理解を深めていただくうえで、この報告告集が活用されれば幸甚である。末年ながら、報告告集作成に御協力預った関係職種の技術専門委員の方がた、ならびに隊員(OB)諸君に謝意を要する次第である。

ガーナ編

序にかえて……………野村 忠策…(1) O件發記─Voluntary Work Camp 15 参加して……岡田 尚敬…(5) 隊員時代を振り返って………… 岡田 尚美…(17) 岡田隊員の報告費を読んで…………沢田 和佐…(19) ○教師隊員としてのニュー・エドピアセ での2ヵ年……大原 算…(21) 大原隊員の報告費を読んで…………沢田 和佐…(27) 〇土木設計隊員としての2ヵ年の活動……元島 通夫…(29) 隊員時代を振り返って………元島 通夫…(52) 元島隊員の報告事を読んで……… 坂本 健次…(55) ○活動の経過とガーナに対する私の受情……上野 勝美…(57) 日本に帰って考えること…………上野 勝美…(69) ○国立政薬訓練校における教育・指導……・安江 丈二…(73) 「心」を守る阴苑………安江 大二…(85) 七郎…(87)

 〇四酉・工作及び数材づくりを指導して……広瀬 柱子…(93) 教育協力について思うこと……
 柱子…(10) 住子…(10) 位隆…(112)

 広瀬欧貝の報告費を読んで……
 百隆…(112)

 あとがき……
 高橋 成堆…(113)

 [付] ガーナと協力隊……
 (2) ガーナの略図と展要……

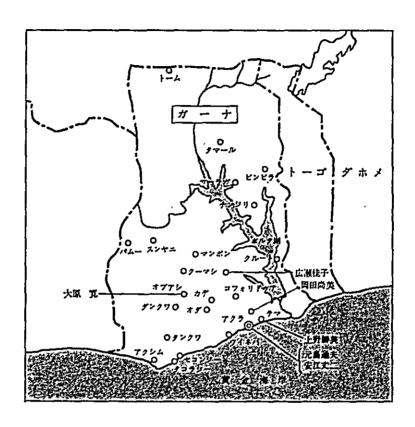
目

次

ガーナと協力隊 (昭和55年12月1日現在)

最初の隊員派遣:昭和52年8月								
高地部門	良林水産	ta	保守操作	土木建築	保健衛生	教育文化	スポー	合
門	産	エ	作	築	生	化	゛ツ	計
报遗中	(0)		3 (0)	7 (0)		18 (4)		30 (4)
実 積 (深 計)	(0)	(0)	6 (0)	14 (0)		37 (13)		62 (13)

(注) カッコ内は女性隊員。



ガーナ共和国概要・

面 積:238,537平方キロメートル

人 口:1,048万人(77年央)

宗 教:キリスト教, 部族宗教, 回教

公 用 語:英語, アカン語, エウェ語

1人当たりの頃民所得:460ドル (75年世紀推計)

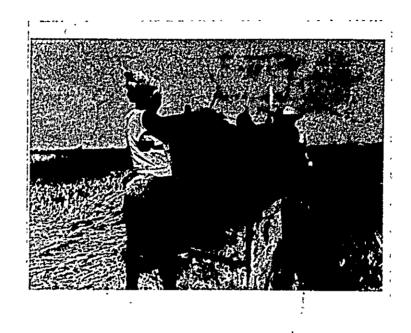
通 貨:セディ,1米ドル=1.30セディ

首 都:アクラ (人口63万6,000人)

政 体: 英連邦加盟の共和制

元 首:ヒラ・リマン大統領

主な生産物: カカオ, コーヒー, 木材, メイズ, ソルガム, キャッサバ, タロイモ, 家畜, ダイヤ, マンガン





体験記—Voluntary Work Camp

に参加して

定期報告告 (昭和53年12月14日)

派 遺 国 ガーナ 52年1次前期組

聯 延 理数科教師

氏 名 岡田尚美

配 点 先 Okuapemman Secondary School, Akropong-Akwapim

enooi, Aktopong-Akwapin

-四田繁星の繁彦

氏 名岡田尚英

生年月日 昭和27年6月13日

出身県東京都

單 種 理致科教師

深達期間 52年8月~54年8月

Work Camp に参加して

長い3ヵ月にわたる休みを前にして、まず思ったのは、いったいどうして 過ごそうかということである。 long holiday が近づき、アメリカに一時 帰国するピースコーの話を聞くにつけ困ってしまって、いつになく会う人 ごとに、どうしよう?と尋ねて回った。隊員仲間の教師たちは、3ヵ月間カ ピのごとく寝て過ごすという勇ましいのから、語学センターへ通うという のまで趣味それぞれ。やっぱりもてあましているようである。日本の夏期 講習のようなもので,この夏期休暇中,デキの悪い生徒に教えられたらと思 って、同僚の生物の教師に尋ねると、細長い身体一杯に面白がったあげく、 「そんなに暇なら、我が家で女中代りに使ってやるよ」と皮肉を言われた。結 局, おおらかに休めというのだ。ガーナの Science Teachers' Association という会に出席した折も、残念ながら、会談の内容はよく判らず、もっ ばらおしゃべりに 花 を 咲 かせていたが、 運よくつかまえたガーナの先生 に "Long holiday is too long!" と持ち掛けた。「どうして過ごしていい のか判らないのよ」、「日本へ帰らないの?」、「帰れないの」と一応会話が 竪がった時、「Voluntary Work Camp があるけれど参加してみない?」。 「エ、なに? Voluntary Campって」(Voluntaryって、なにか私の今の position に似ているような……)。彼が言うには、通称 Volu というこの Work Camp はガーナ人や外国の Volunteer が収食を共にして Camp を はり、学校や病院の建設、ココアの植樹等の肉体労働を奉仕するものだと か。第1にタダでいろいろな人、特にガーナ人と一緒に過ごせること、自 分の労働が公共に利用されることから大いに乗り気になった。Camp に対 する資金扱助はガーナ政府、キリスト教団体、ユニセフからでているらし い。だが,まあ待て,どんな団体で,どんなところに寝泊まり するのや ら、とやや不安に思った。この親切なガーナ人の教師が言うには、彼 も Voluのメンバーで、理科技師の会の終った次の日からアクラで Volu の年会があり、これに出席する予定だとのこと。日頃、何事につけても腰 'の瓜い私も、会談の終了を待ってアクラへ直行した。

Volu の年会はアクラの Secondary School の1つで開かれていた。 私が着いた時は、日程の2日目で、偉そうな肩むきのお歴々が 増上 で演説をぶっていた。500 人近い人でうずまった広い講堂は、学生が多くて楽

しそうな雰囲気であったが、女性が少ないのが気になった。うしろの席に * 座ってしばし話を聞くことにした。と, 肩をたたかれて振り返ってみると。 私と同じ学校の数学教師、フーガ氏がニコニコ して立っていた。「ナオ ミ、君もメンバーなのかい?」、「実は……なの」、「ぼくはもう10年以上 もメンバーで何度も Camp に参加しているから、君が参加したら enjoy できることを保障するよ」、「仕事きつくない?、瓜いもの運べないわ」、「大 丈夫だよ。 君ぐらいの身体があれば」。 彼の案内で、その場でメンバーに なることを決め、引き続いて衣のプログラムにも参加した。衣は協力隊を 思い出すような Camp メンバーの活動のフィルムを見た。仕事は土方だ った。そのフィルムは主に多人数と瓜労働を要する建物の土台作りをして いる Camper 遠を写していた―― その建物はチーフのパレスとアナウン スされた。皆楽しそうだったし、30人ぐらいの中に数人、ヨーロッパ人の Volunteer の顔も見えたので、これは大丈夫そうだと思った。そして最後に 25以上もある仕事、期間、 場所の違う Camp の中から2つを選んだ。選 択や参加するまでの事務的なことはすべてフーガ氏に手伝ってもらった。 まあ、よほど変なところだったら逃げ帰ればいいから、と腹を決め、その 実逃げ帰る様子を思って少しワクワクしながら、Camp 開始を待った。以 上が私が Camp に参加した経緯である。

私が選んだ第1 Camp は Mampong といって Ashanti 族の中心、ガーナ第2の都市 Kumasi 市から北へ40マイルの中都市にある Ameneapon Secondary School であった。町はずれのその学校の教師用住宅の建設が仕事である。期間は7月14日から3週間、8月4日までだった。さて、アクラから6時間車に揺られて着いた時は、もう夜であった。女性の宿舎に案内されると、去年現地訓練の時一緒だったピースコーのトムとシーインがいて、心細く思っていた私を歓迎し勇気づけてくれた。ピースコーは休み中も何か奉仕的な仕事をしなくてはいけないらしく、彼女たちは一時帰国の休暇前に終らせようと、この Camp を選んだということだった。JOCV (協力隊)でもそんなことがあるの?と聞くから、自由意志よと言うと、いやはや気が知れないと大仰に肩をすくめて見せた。誤解がないように先に言ってしまえば、彼女達は働く時も遊ぶ時もどちらも一生懸命で、Camp の人気者であった。女性の宿舎として用意された場所は男性学生寮の2階の大部屋で、階段をはさんで同じ階の反対側が男性用であった。1 階

は教室である。1部屋に20台ぐらい金属製のベッドが並び、マットレスが 1人1つずつ支給された。トイレは宿舎となっている建物の前の広場を 横切って20m先にあった。 風呂場はさらに5m先にあった。そこで、自 分のペッドをしつらえて、早速3人で、暗い中、使用と検分を兼ねて行っ てみた。違い。トイレは男女別で、小さい小屋が女性用。8畳ぐらいの土 間で、うしろ側に一段高く板が渡してある。ちょうど日本の農家の土間と床 の高さを思えばいい。その板に5つほど丸い穴が並んであけられている。 トムが彼中電灯で中を照らすと、穴の下にはパケツが置いてあった。なる ほど。ただ土間ひと間、板1枚、なんのしきりもない。 どうしよう 。こ の学校の教師用住宅は個室のトイレだろう。それを借りようか、さてなん と英語で言ったものか、と思案しているうちに、トムがもう準備にかかっ て穴の上に座った。「イヤー、ザラザラするう」と忠吼をあげた。「バカ ね。まずきれいにしてからよ」とシーインはちり紙で穴の回りをスースー とふいて、同じように座り込んだ。私もぐっと言葉をのみこんで、エイッ という思いで、それでも弱気で、シーインと1つおいた穴の上に座り込ん だ。ところが、なんだか私のだけ音がちがう。なぜかバタバタとすごく大 きいのである。シーインもトムもどうしたの?と問いかけそうだったが、 時が時なので、途中で止めるわけにもいかず、事が終るのを待って、私の 座った穴を照らすと、なんと私のところだけパケツが さか さまになって いたのである。それでなくても明るくて陽気なアメリカ人の 彼 女 違, こ の一事があって、私とは Camp のあいだ中、大の仲良しになった。そ して実に open なトイレも、いつもおかしさが先にたって苦にならなかっ

選末ということもあって、2日間ほど何もしない日が続いた。Camper 達の到着を待って、3日目から、仕事がいよいよ始まった。Camper は30人ほどだった。そのうち外人は私達3人。女性は私達を含めて5人だった。

仕事1日目、山と積まれているセメントと砂でつくられたブロック (10×20×50cm) を 100m 離れた現場に運ぶこと。 現場は学校の農場の は ずれ、体育館の向かい側。 草刈りは なされているものの、 要所々々に杭が打ち込んであるだけであった。その農場の端を通ってブロックを1つ1つ、30人の Camper が思い思いに持って列を作って運ぶ。 2、3人の屈強な

ガーナ人が、糸を張った中で、壁の土台形に沿って穴を掘っていく。中庭 のある。なかなか大きそうな家だ。5部屋はある。ブロックをお腹に軟せた り、肩に載せたりいろいろやってみて結局、他のガーナ人に習って頭の上 に載せて運ぶことにおちついた。持ってきたTシャツをスカーフに巻き込 んでパッドをつくる。言うなれば、ブロック用座布団である。ブロックは 近くて、とても私1人では持ち上がらない。頭に敬せてもらって 100m 歩 き、また降ろしてもらう。手間のかかる労働者だ。ガーナ人のテスはこの 町の音楽教師。私ぐらいの背丈で細い(といっても胸も腰も私よりはある が)。頭に戴せてもらうと、手ばなしで、スイスイと歩くがごとく走るが ごとく運んでいく。私達白人組3人は、左右の手でおさえて、さらに前後 左右にブロックにひきずられ、ヨロヨロと現場まで歩くわけである。5人 ほど Secondary School の生徒達も参加していて、この悪たれ小位達もバ ランスよく運んでいた。私は3つ運んだ時、もう厚いパッドの下の頭皮が ピリピリし始め、身長が確実に3cmは縮んだ。5個運んだ時から痛みを超 越し、1時間ぐらい経ってからだと思う。10個運んだ時、ダルマのような 顔をしている"オビ" (ヒゲも目もそっくりなのだ) が、すれちがう時に 声をかけてくれて、休めと言う。オビはこの Secondary School の美術の教 節で、実に人が良い。「ナオミ、Volu の Camp は仕事時間は決まって いても、各自、自分の力に応じて倒けばいいのだから、疲れたら休んでい い。はじめから張り切ることないよ」と付け加えた。前にも参加したこと のある Camper は誰でも、私がつい日本人的 頑張りをみせると、声をか けてきて「休め休め」。木陰で休んでいるうちに、冷たくなっていた身体か らどっと汗が湧いて気持ちが良くなった。これなら大丈夫かな,と思った。 Camp の運営は1つのパターンがあるものの、なかなか民主的である。 Camp leader という長は、あらかじめ Camp の事務局のようなところで 決められている。1人の Camper は「あそこの Camp は leader が良い からまた行きたい」と言っていたので、leader 次第というところも、いく らかありそうである。我が Camp の leader は、中年の教育大学の学生で ある。 1 度小学校の教師をしてから、 さらに高 校 教 師 の資格を得ようと 勉強中なのである。名前がふるって "Late news" という。 Camp では Camp name という呼び名を使う。私はナオミで通した。まず、2、3日 、メンバーがそろい,互いに名前を覚えてくるまで,Late news がいろいろ

手配していたが、仕事が始まって2日目の晩、集会をもって仕事の分担を 話し合い、長を互選した。係としては、Work leader——仕事のさしず、ス コップなどの管理。Secretary ----記録 (日誌),会計を兼ねる。メイトロン ――食料の管理, 手配。レクリエーション――仕事後の親睦。沿遊――楽の 管理,応急処置などである。Work leader には1人, Ameneapon の学校の 大工が参加していたので彼がなった。ガーナでは各学校が日本の学校の用 務員のような形で電気工、大工、配管工などを雇っている。Secretary に は"007"という、やはり中年の学生がなった。メイトロンには、その時私遠 3人を含めて5人しかいない女性のうち "Baby" がなった。彼女も教育大 の4年生で、雨でも降って仕事が休みの時は、炊事もそこそこに Kumasi 市 の boy friend のところに会いにいっていた,かわいい女である。レクリエ ーション係は4人。トムがその1人になった。薬の管理は leader が兼ね た。食事の用意は Baby の手配で、当番制で、学校の台所を借りて自炊し た。1日2人ずつ交代、3週間のうち2回私に回ってきた。同じ時に、仕 事時間など1日の予定が組まれた。以下のようである。 土曜と日曜は休み。 3週間のうち実働15日であった。

6:00	起床
7:00	仕 事開始
8:30	朝女
9:30	仕 亦再開
10:30~50	おやつ if any (ゆでたトウモロコシ, 時に酒)
13:30	昼食
14:00	自由
19:00	夕食
20:00	自由
23:00	就沒

 に生きようと思ってね。数会にもちゃんと行ってるし、型街も毎日読む。 Camp にも必ずくるんだよ」、「それで神様なんて書ったの?「「クーパーあらためよ」ってね。でもねナオミ、girl friend の数だけは、どうしても被らせないんだよ」、「ヘエー!」。この時は、このモテモテ Kuper も大変だな、と思ったけれど、どうも後で考えると、完全にからかわれたらしい。 週末になると「ナオミ、また彼女が呼ぶんだよ。神様許して下さるかな」と悲しそうな身振りをして口笛をピーとならして、窓気捌々とお出かけになったものだ。

ガーナ料理はいくつか知っていたものの何の役にもたたない。でも脱さ ず何でもやらせてもらう。台所はかまどのある土間で、食堂とは別棟にた っている。木は食堂から大鍋で運ぶ。なぜ水道をひかないか不思議だ。5 mぐらいの配管なのに、と思う。台所は土態に囲まれた20畳ぐらいの広さ でトタン屋根である。土壁と屋根の間は1mぐらいあいていて、座ると隠 れ、立つと八方が見渡せる。木が燃料だから煙が外へ出るように作ってあ る。かまどが一方の壁に沿って1列に4つ並んでいて、テラコックの赤い 土で作られた丸底のひとかかえもある大鍋が、 時々似き なが らのってい る。高さは40cmぐらい。実に簡単だ。この日の朝食は Tom Brawn とい う,こがしトウモロコシを粉にひいて煮たもの。ミルクと砂糖を加えてすす る。それにコッペパン1つ。昼は典型的ガーナ食。ガリとピーンズシチュ ー。なんとなくガリとビーンズが食べ合わせになっている。ガリは生のキ ャッサバを扮のようにひいて、弱火で炒るように乾燥させたもの。そのまま で食べたり、シチューをかけたり、水を加えて火にかけてもよい。 夜は Kenkey と Mackerel のシチュー。 Kenkey はトウモロコシの粉に水を 加えて発酵させたもの。この種のものは部族間でいくらか異なり、蒸すか わりに煮たり、いろいろ変種がある。トウモロコシによって白から淡い黄 色、ピンク、赤とあって、はじめてストロベリー色の Kenkey に出あっ た時は嬉しかった。味はなかなか独特である。Mackerel はサバだが、この 国にとって欠かせないトマト煮の魚のカンプスのことで、日本の漁業会社 が関係している。手軽だが、Campの間、ほとんど毎日の蛋白原であった ので、いささかうんざりした。 さて、この台所のかまどのそばに座って火を 見ていると、小さい頃よく遊びに行った母の里を思い出す。子供の目にも 雑然と広い真家の土間に作られた炊事場は、はじめは不潔に思え たもの

だが、無く媒けた真直ぐな柱や高い天井、かまどで燃える火に慣れてくると、祖母やおばが、どんなによく管理していたか判ってくる。それと同じで、ここの台所も、チマチマとゴキブリの住みかを提供している我が家の台所より、パッパッとクズは土間に拾て、終るときれいに掃き集める方式で、よほどすっきりしている。大釜や鍋も実によくみがいてあって気持ちがよい。このガーナ風の台所も、我が学校の調理場に時々はいりこんでは、おばちゃん遠とおしゃべりしていた私には、べつに新しいことはないが、問題は Kuper の働きぶり。何をやらせても、実にうまいのである。ただ作るだけではない。味付けから火加減、ちょっとした片付けまで、なにげなく自然にやってのける。すぐ日本男性と比べる私にすれば、やっぱり日本男性は100年遅れていると思える。ガーナでも、もちろん料理は母親の役目なのだが、母親は子供を小さい頃から男女の差別なくよく躾けていて、掃除、洗酒、料理と男女とも10歳にもなれば一人前にできる。母親は大きなお兄をすえて、一番下の子に乳でもふくませていればいい。だから男性もなにかと実に器用で、これが少しも特別なことではない。

炊事で少し休めるかと思ったら、30人分3食はなかなか大変だ。みんなが 仕事を終えて昼寝している時も、油っこい食事の後の皿洗いが残っている。 それが済むと夕食の用意にかからなくてはいけない。それでも Kuper と 交代にシャワーを浴びることにした。さて風呂場である。ここはトタンの 囲いがあるだけでドアなしの露天である。広さは7,8 m四方(なにしろ200 人ぐらいの男性学生用なのだから),コンクリートの平らな床に十字に溝が 切ってあり,中央に蛇口が1つ。バケツを持参してカップにすくって使らバ ケッパスである。"只今,女性使用中"の石板をかけ,それでも足りず,真赤な プーゲンビリアを入口近くの柱にさし、なお大声で歌を歌いたがら使う。 午後の日射しがむきだしの背中に心地よい。すずめのような鳥が蛇口の下 にたまった僅かな水を求めて、壁の上で鳴く。「水を浴びたいのだが、こ の深の女と一緒じゃ、ちと困る、困る、困る」。尾を振りふり告げ回ってい る。ガサガサ、ガサガサ、トタンの壁のすき間から、横から、下から、ト カゲが入れ代りのぞきにくる。なんとも愉快なひととき。Camp の間, 2, 3回バケツバスを使用中に夕立にあった。身体はぬれていいのだけれ ど、着替えが困る。そんな時、バケツをひっくりかえして服を入れ、両手 で持って雨の去るのを待った。

4日目、デンマーク人の Volunteer の一行が到着した。 男子1名を含 む8人。学生、家事手伝い、幻護婦と耽もまちまちの彼らは、休暇でガーナ 旅行も兼ねてきていると言う。1年目の私も、瓜労働の後の空服時でさえ 1日3食のガーナ食はいささか気が重い。ガーナに着いて3日目という彼 らは、いったいどうだろうかと思ったが、やはり最初はノドを通らなかった らしい(はは、やっぱり)。彼らは仕事が終ると、30分ほど歩いて町までオ レンジやトウモロコシを買いに行っていた。はじめはその食事を見て、か なりショックを受けていたものの、3日、4日、1週間とたつにつれ、企 亦には、すばらしく早く適応していくのが判った。しかし、クワメという ガーナ名をもらった男の学生は、下痢と軽いマラリヤにかかって、ガーナ 食がまったく食べれなかった。デンマークの Volunteer 一行の後、オラ ンダ人の女の学生2人がやってきたが、トムとシーインに含わせると、男 性が過保護になって、アドベンチャラスな女性が増えているのは世界的な 傾向なのだそうだ。この世界という中に日本も含まれているのかどうかは 聞きそこなった。さて、このオランダ人の学生2人は、観光気分が強く、2週 間もたたずに Camp を出ていった。ドイツ語、フランス語、 もちろん英 語そして自国語を解する彼女らの語学力に、ヨーロッパの語学面での地理 的有利さを改めて感じさせられたのだが、彼女らはいかにも若かった。 27、8歳のデンマーク人看護婦カレンや,医学療養士ダムジィーと比べて、 ガーナの生活に適応できなかったように思われる。若すぎると適応能力に 劣るということは同じデンマーク人の中でも若い学生のラーレがなかなか 適応できなかった例にも見られる。短い期間だったから一概には言えない が、見知らぬ異文化の社会で働くには、少々人生が判りかけている年代が いいのではないだろうかと思った(これを書いている時に受けとった手紙 によると、ダムジューは、ガーナが気に入って、いま大使館や知人を通し て、病院での働き口を捜しているとのことである)。

さて、重労優に関して私の適応がどうであったかというと、前世はヨイトマケのおばさんではなかったかと思うくらいに疑なくこなせた。気が遠くなるような体力的ハンディはいつの間にか消え去った。いぜんブロックは重かったが、3日目から始まったセメント運び、ブロック積みと、なんでもやった。ジャリと混ざったセメントをパンに入れて運ぶのは、ブロックより軽いので、手難しで頭の上に載せて運べるようになった。この頃現

場では穴を掘り終え、底にセメントを流しこんで、その上にブロックを積み上げていく段階に入っていた。仕事の進み具合は、セメントの供給量による。1段積み上げた1週間目も終る頃、セメントが底をついて、みなで陳情に役所に押しかけたりしたが、2、3日おきに4、5袋ずつ運ばれてくるだけだった。みな、セメント、セメントと言いながらも、実はのんびり、楽しく働いた。

カッと照りつける太陽に強のように白かった白人女性達が赤くなって、 やがてブラウンに変わっていったのは、仕事が始まって1週間目ぐらいか らで、その頃から夜の時間にゴーゴーやクイズ大会が催された。電気がこ ない日が何日もあって、そんな日は月明かりの下でお国自慢の歌合唆。これ が一番簡単なのか、幾晩も続いた。校舎の石段が聴衆なしの合唱隊の舞台 で、おせっかいでひょうきんなアジョースが 指揮者。まず Volu のCamp の歌、仕事の歌を覚えさせられ、ガーナの歌、オランダの歌を歌った。私 は『さくらさくら』を教えようとしたが、長すぎると言われて覚えてもら えず, その代り何度も歌わされた。持参したリコーダーを吹いたのは、1 晩きりだったが、日ざとく見つけた音楽教師のテスが週末の休みに、自宅 からガーナの 民 族 楽 器のアテンテベンという笛を持ってきた。正確に言 うとアテンテベンを模したもので、アテンテベンは尺八のように受口が大 きく、口唇で息をわけて音を調節する。彼女の持ってきたのは愉快なこと に灰色のプラスチックの管(日本で水道管に使われている)の口のところ につめものをして小さくし、穴を7つあけてある簡単なものだった。 西洋 のリコーダーより1つ穴が少ない。投業用にやさしいのだと言う。 暇をみ ては教えてくれた。その音色は西洋音階に似ているようで、もっと半音が 強調されているように思えた。やはりメロディーというより、リズムが勝 っていて、少しかん高くピッピッピッというように吹く。主旋律と伴奏と があって、伴奏は2小節くらいの繰り返し。主旋律は複雑に鳴り響く。4 曲ほど伴奏部を教えてもらって、一緒に繰り返し繰り返し吹いても、毎回 違う感じがして、少しも飽きない。灯のない夜には月が充分以上の光を投げ かけてくれた。エネルギーのありあまった連中は、ワイワイ貫いながら町へ 地酒を飲みに行った。そんな静かな晩、おとなしいテスと一緒に寮の手摺 りに腰をかけて、笛を吹いた。曲の間に遠くでドラムの音がする。 leader の Late news が座って聞いている。音で覚えた曲は、譜面で覚えたものよ

りすぐ感覚がつかめるのか。テスが出だしを吹くと、どの曲だったか思い めぐらすより先に指が動いた。陽気で踊りだしたくなるようなガーナの音 楽の中で、アテンテベンのだす音はリズム的なのに妙に静かでさみしい。 聞く人のせいか、環境なのか。

地酒といえば、パームワインは Camp に 欠かせなかった。酒好きのガ ーナ人に混じって私も、仕事中も、よく飲んだ。そして昼食の後、誰もが昼 疫をした。はじめは仕事がきついため、仕事に慣れた後は、日中の名さの ため、そして最後は夜騒ぐための昼寝だった。夕方涼しくなると、トムに ひっぱりだされて町へパームワインを飲みに行った。パームワインの蒸留 洒フクペテシであることもある。シーインはまったく飲まない。 Mampong が故郷のアジョースが案内係だ。それに必ず2,3人の Camper が加わ って出かけた。何軒かはしごして、いい気分になって夕食に宿舎へ帰る 時, 学校の門まできて気がつくと, いつも人数が増えていた。 町の 仲間 が心配して送ってきてくれたのだった。彼らはまたワイワイしゃべりなが ら町の方へ帰って行く。時にはキャンプの食事の費用の一部からでるのだ ろう石油カン一杯のパームワインが、宿舎の横の火炎樹の木陰に持ち出さ れる。「オーイ、パームワインだぞう」と叫ばれると、昼寝の夢もそこそ こに下に降りて行って、椅子を持ち出し、ピアー・ガーデンならぬパーム ワイン・ガーデンがオープンする。ピント・ピーンズという Secondary Schoolの2,3年生の生意気な坊やも飲んでトローンとなってしまった。み なでひやかして踊らせたのはおもしろかったが、後で部屋に担ぎ込まれた のを見て、教師として少々胸が痛んだ。未成年の飲酒は禁じられているのだ ろうが、まったくといっていいほど自由な国である。こんなに陽気で洒好 きの Camper 達が、うまく Camp 生活を送れたことは、1つには酒に飲 まれることがないくらいガーナ人が酒に強いこと、もう1つは Late news をはじめとする leader や何人かの Camp 経験者が、なにかと休むこと ばかり、そして食事や酒のことばかり考えている若い私達のなかで、実に 落ち着いて対処したからだと思う。

そんなふうにして3週間が過ぎてしまったのだが、どうも余暇の思い出ばかりが強く残った。仕事の方はきつい割には進まず、人手ばかりあっても家は作れない。土を運んで、土台を埋め、平らにして、あとは続けてブロックで壁を高くしていくばかりの段階に達したが、それは基礎工事が終

ったにすぎないのである。学校の大工に言わせれば、ここまでが一番大変 で、学校の労働者もこの仕事を一番いやがるとのことだった。オピに、こ の家ができ上がったら、またきてみたい、と言うと、「うん、ちょうど生 物の教師が欲しいところだ。そうなったら俺も一緒に住んでやる」との返 事がかえってきた。

さて、Camp も3週間を無事に終って、あとはこの Secondary School の校長が開くサヨナラパーティーを残すだけとなった。私は最後までいた かったのだが, もう1つの Camp に参加するため, みなより2日早く Mampong の Camp を去ることにした。その前夜 Late news が夕食のあ と、私の出発を告げてくれると、おおげさな彼らは、おおげさに引き止 めてくれて、1人ずつ握手をしにきた。うす暗がりをいいことに、Kuper がシャレて私の類にキスをしたら、バスカルが「俺にもさせる」と騒ぎだ し、Baby が代りにキスしてあげると、「足りない」と言い、アジョースが 「俺も俺も」と言い、本人そっちのけで大騒ぎなのである。次の朝5時に 起きだして支度をしていると、テスが寄ってきて、「あげる」と言って私 の手に何かを押しつけると、そのまま自分のペッドにもぐりこんでしまっ た。予期しないことだったけれど、もらってしまってから、欲しかった笛 であるのに気がついた。昨夜充分サヨナラをしたのに、ダムジューがペッ ドから半探で抜けだしてきて「待ってて、今、私のデンマークの住所書く から」とトーチライトの下で鉛筆を走らせる。彼女の顔より、トーチの下 で白く浮きでた彼女の大きな胸とオヘソが忘れられない。いざ部屋を出よ うとすると、寝ているものと思った女性達から、サヨウナラの声。その 時、やっぱり最後までいようか、と決心がぐらついた。

ローリーステーションに向かいながら見た遠くの山の端が暗紫色から赤 紫色に変わり、黄金色に輝く太陽が出てきた時、心の底から、本当に美し い、と思った。

隊員時代を振り返って

岡 田 尚 美

教師というしんどい仕事を離れて楽しんだワークキャンプでの経験を含め、2年間の任期中、本当に多くのことを学ばせてもらった。ないないづくしのガーナで、食物や日用品を捜して狂奔したあげく知ったことは、あれもこれもなくても、私の生活の本質になんら変わりはない、ということであった。文化の違いは全く越え難いという認識と、どこか人間の生活はみな同じという安堵感。南北間題の断面に肌で触れ、何十人というガーナ人と友だちになり、外国にいて余計に日本人とも親しくなった。2年の任期を、なにはともあれ終えた、という自信と満足も大きな収穫である。空中に咲き聞く火炎掛やブーゲンビリアの懐かしい自然も、今いる長野県伊那谷にあふれるやさしい緑の静かな自然も、どちらも美しいと思う。違うものを違ったまま楽直に受け入れられるようになったということだろうか。

そういう私の大いなる評価(多分に自己満足といわれる)に対して、協力 隊そしてガーナ側からみた私の仕事の評価はどうであろうか。理数科教師の 足りない学校で、まずい英語ながら、何かを教えられたという自負はあった が、自分の仕事が相手国の将来にブラスになったかどうか、というのは、い まひとつあいまいである。初等教育の極度の遅れ、中等教育からのエリート 精鋭化、経済混乱で他国へ流出していく優秀なガーナ人理数科教師たち。こ れら、さまざまな未解決の問題を残しつつ、あるいは無視して、ただ高校で 教えるという小さな枠内で頑張ってきた自分の立場は、ガーナの発展に対す る逆方向的な加担であった気がしてならない。

私たちのやってきた仕事を、誰がいったい評価しうるのか。評価ということは認めてくれるということではない。良し悪し、効果あるなしの判断をし、良いものは増やし、悪いものは改善していくことである。では、その評価ができるのは隊員か、協力隊か、相手国か、と考えれば、当然、相手国である。しかし、協力援助を受けている国々の中で、着実に、長い展望をもって自国の将来を考えうる国は少ないのではないだろうか。政変、経済の不安定、東西の莫大な援助の雨の中、独立後 20 年に満たない弱小な国々が、自国の路線

を貫くことは、不可能に近いと思う。そのような相手国のする隊員の仕事に(もしかすると隊員の要請さえ)対する評価を、私は疑わしいと思う。つまりは、おざなり的な小さな枠内で隊員は評価されざるをえない。道路屋は道路ができたかどうか、数師は年間の数科書を終えきったかどうか、というように。

ガーナを含む24の四アフリカ諸国は、10年前に比べ全体として、なんらかの形で6倍も、外国からの借金が増え、日本を含めた先進国の扱助は総額5倍に増加しているという。南はますます貧しく、南北間の芝は開くばかりである。開発途上国が自力で自国の将来を見極めていくことができるようになった時が、その国の発展の出発点といえよう。本当に残念なことは、隊員の派遣されている多くの国々が、そういった意味での出発点にも並んでいないということである。

それまで、年々増加していく協力隊の活動は、どんな立場にあるべきなのだろうか。隊員はそれぞれに与えられた仕事の枠内で努力していくべきなのだろうか。いままでの協力隊は、成果よりも隊員本人の努力を高く評価していたと思う。道路の建設ひとつとってみても、機材の不足に悩む、社会・組織の違う国で、いかに困難なことかよく理解されるので、道路の完成とは別に、目的に向かって努力する隊員自身に共鳴する。語学のハンディを負いつつ、試行錯誤し、1年間なんとか教科書を終らせた教師隊員を「よくやった」と評価するように。その年の教えた生徒の進級・進学率は最低であるかもしれないが。

2年の任期の中では、小さな枠内の仕事ですら容易なことではない。教えること、自分で生活することに迫われ、相手国の発展という中での位置づけなど、私には考えもつかないことであった。今、時々、ガーナから、かつての教え子たちが、まるでサンタクロースにあてて出すような、なんとも愉快な手紙を送ってくる。私を通して日本を見てくれるなら、それもひとつの協力かもしれない。しかし結局は副次的なものである。

隊員時代を思い返すと、問題ばかりが浮かんでくる。協力活動の成果は、 5年、10年の年月内にさえ現われないものであろう。だからこそ、南北の差 の拡がりを見聞するにつけ、20年、30年後に徴々たる私たちの活動が活かさ れるような、長い展望に沿った仕事をしていかなければ、と思う。

岡田隊員の報告書を読んで

沢 田 和 佐

岡田尚英隊員の報告書を読んで、まず感じたことは、女性の身でありながら、単身、理数科教師としてガーナへ赴き、やってきた長い3ヵ月にわたるlong holiday を前にして、アメリカへ帰国する者、寝て過ごす者、語学センターへ通う者など種々いる中で、できの悪い生徒を夏期講習のような形で教えられないか、という発想であった。真に働き蜂というか、与えられた使命に懸命の努力を尽くす日本女性の姿であった。

ガーナの先生に「Voluntary Camp」への参加を 勧められ、外国人の Volunteer が寝食を共にして Camp をはり、学校、病院の建設、ココアの 植樹等の肉体労働を奉仕する仕事に興味を抱き、アクラでの Volu の年会議にまず参加、同じ学校の数学教師フーガ氏(10年来のメンバー)の案内でメンバーになることを決め、協力隊を思い出す活動のフィルムを見せられ、3ヵ月の長い休暇中、自分の意志で奉仕活動に従事した貴重な体験の記録を、女性らしいキメの細かい文章にまとめあげ、読む者に臨場感をもたせ、淡いユーモアを漂わす楽晴らしい読み物になっている。

町はずれ(Kumasi 市の北40マイルの中都市)の Ameneapon Secondary School の数節用住宅の建設に7月14日から8月4日までの3週間参加した 岡田隊員は、かつての友人ピースコーのトムとシーインに再会する。一時帰国の休暇前に、何か奉仕的仕事をしなければならない彼女たちと違って、自由意志でこの仕事を選んだ岡田隊員の「気がしれない」と大仰に驚くくせに、遊ぶ時も働く時も一生懸命で、Campの人気者である彼女たちの姿に、割り切った、カラッとした陽気な外国人気質が顔をのぞかせて興味深い。

トイレ (暗くて、遠くて、農家の土間を思わす板張りトイレ、穴の中にバケノ) のニピソードが緑で、Camp の間中、このアメリカ娘たちと大の仲良しとなる。Camper は30人、外国人は3人、女性はそのうち5人、が、100m態れた建築現場にプロックをひとつひとつ運ぶ単純労働である。プロック用座ぶとんを作り、頭に載せ、その上にブロックを積んで貰って運び、100m歩いておるして貰う。Secondary School の生徒たちのほうがパランスよく運ぶ

のに,岡田隊員のコロコロ運ぶ姿が目に浮かんで,思わず吹き出してしまう。

日本人的頑張りをみせる岡田隊員に、オビ(この Secondary S. の美術教師)が「ナオミ、 Volu の Camp は、仕事時間は決まっていても、各自自分の能力に応じて働けばいいのだから、疲れたら休んでいい。はじめからはりきることはないよ」と言い、前に参加した経験をもつ Camper は誰でも「休め、休め」と声をかける。ここに、彼らの大陸的な魔様さがあり、女性に対するいたわりが感じられ、仕事にも生活にもゆとりが滲み出ている。

Camp の運営に一定のパターンがあるものの leader 次第であるのは、いずれの社会も、集団生活を営む中では、同じである。Work leader の仕事の紹介、その選出、メイトロンの仕事、Secretary の選出など、Camp の中もひとつの地域社会である。

時間割によると6時起床で7時仕事開始,8時30分朝食となかなか充実していて厳しいようだが,どうも午前中で労働は終り,午後から就寝時間にかけて,まったく自由のようであって,この点まことにおおらかである。

炊事当番の相棒であった Kuper (24, 5歳の美青年) の働きぶり、特に、作るだけでなく、味付け、火加減、ちょっとした片付けまで自然にやってのける様子に、日本人の男性は 100年遅れているとの痛い指摘もある。ガーナ人の母親は、子供を小さい時から男女の差なくよく葉け、掃除、洗濯、料理と男女10歳になれば一人前にできるようにしていることがよく理解できた。「デンマーク人の Volunteer が4日目に8名 (うち男性1名) 到着したが、彼らの初めのうちのショックと、徐々に食事に馴れていく様子に、岡田隊員の初めの様子がダブって見られた。

2週間もせずに、きては去っていったオラング人女学生に、ドイッ語、仏語、英語、自国語を解する語学力に感心すると共に、観光気分が強く、いかにも若すぎるので、Volunteer とか異文化の社会で働くには、青年であって、少々人生がわかりかけている年代がいいのではないかと鋭い観察を加えている。

ガーナの民族楽器、アテンテベンという笛、バームワインという酒のこと、 leader や何人かの Camp 経験者が、休むことや、酒や食事のことばかり 考えている初体験者の中にあって、落ち着いて運営していたこと、3週間の Camp が終っての別れを迎えた時の仲間たちの開けっぴろげな友情の表現な ど、詩を読むような気持ちで、一気に読ませていただいた。ありがとう。 (協力隊技術専門委員)

教師隊員としてのニュー・エドビアセ での2ヵ年

総合報告書(昭和54年12月7日)

派 遺 国 ガーナ 52年1次前期組

職 種 理数科教師

氏 名大原 笕

配属先 New Edubiase Secondary School, New Edubiase

-大原隊員の路歴-

氏 名大原

寬 生年月日 昭和28年8月28日

出身県 福岡県

職 理 理数科教師

派遣期間 52年8月~54年8月

協力隊は4ヵ月の訓練を終えると、いよいよ活動開始である。1977年8月のことであった。その頃は、何をやるにしても活動という言葉を使った。現地料理を食べるのも、現地人と語るのも、旅行するのでさえも、そうであった。誰でもやっている当然なことなのであるが、日本から離れて、まったく違った文化の中へ入ったために、すべてが珍しく、しかも意欲に燃えていたためであるう。

私にとって最も貴重な体験をしたのは、居住先が首都アクラから片田舎のニュー・エドピアセという任地へ移ってからのことである。そこは山の中の小さな村であった。まず驚いたのは、あてがわれた住居である。山小屋風の高床式の木造建築であるが、そこには水道も炊事場もなかった。1部屋だけの小さなスペースが寝室であり、学習室であり、居間であった。ただでさえ薄暗いのに、木製の開閉式窓を閉めると、真暗になる。

次に驚いたのは電気がつかないことである。あとで判ったのだが、普段は 毎晩4時間だけ発電機をまわして供給してくれる。学校が休みに入ると、 電気がつくのは日曜日だけになる。しかも電気の供給が3時間に減らされ るのである。

私が任地に着いたのはちょうど、夏休みの時期であった。毎夜々々ランプの灯だけで、ジッと眠けがさすのを待つのである。暗闇は人間の行動力を奪う。何もせず、ただ夜明けがくるのを待っていた。

夕食をつくるときが大変である。すこし暗くなりかけたかな、と思うころにワッととりかかり、サッとすませ、バッと洗う。午後6時前までにすべてをすませなくてはならない。勉強も、買い物も、近所への挨拶まわり、掃除、日本にいる両親への手紙などの雑用に追われても、その合い間をぬって3度の食事を必ず作った。健康を貫き通すことが唯一の使命の如く考えていたようだ。そして3度の食事を作ることで、規則正しい生活のリズムをつかむのも目的であった。また夜がやってきた。ランプに灯をつけなくては。机の上にランプを置き、それと向かいあうように座って2時間も3時間も考え込むのが常であった。気がつくと11時である。さあ、ベッドに就こう。眠れば今度目が覚める時は朝である。日曜日には、午後6時から9時まで電気がつく。ラジオカセットテーブレコーダーをかけ、部屋の中をうろついたり、もちろん本も読める。手探りせずにちゃんと歩け、実に活動的である。

そうこうして、だんだんと生活にも馴れてきたのだが、朝起きると日に 日に赤い腫れ物が体に増えてきた。食べもののせいだろうか、水のためだ ろうか、と考えているうちに、とうとう全身にまで及んだ。信じられないよ うだが60ヵ所くらいあるのだ。ベッドを調べるとコゲ茶色の5㎜くらいの 虫がうようよいた。bed bug(ナンキン虫) だそうだ。学校に連絡して、ただ ちに退治してもらった。一難去ってまた一難。こんどはネズミである。最 初のうちはペッドの下をうろうろゴソゴソやるだけで気にもとめていなか ったのだが,こちらがおとなしくしていると,ネズミという奴はだんだんつ けあがってくる。 足元を平気で横切るようになり,あげくは枕元までくる。 次中にネズミの街ぎしりが耳元で叫こえてくるので、 ワッと飛び起きラン プに灯をつけた。調べてみると、枕の端がかじられ、中のスポンジがはみ だしている。もうダメだ。このまま放っておけば自分がかみ殺されるか、発 狂するかの, どちらかだと思った。翌朝, 近所の人に頼んでネコをもらって きてもらった。小さな真黒な子ネコである。ミーと名付けた。まだ親ネコの 乳を飲んでいたらしい。めったに手に入らぬ貴重なミルク。自分の栄養のた めと思っていた缶ミルクだが仕方がない。1週間ほど考えることにした。 見ればネズミの方がネコより強そうなのだが、それ以来ネズミはバックリ と寄りつかなくなった。今は屋根裏でゴソゴソやっている。ネズミにとっ て、ネコとはやはり恐ろしい存在なのだろう。仕事に行く前に「ミーちゃ ん行ってくるよ」なんて馬鹿なことを言い、帰ってくると「ミーちゃん、 ミーちゃん」なんて言ってベッドの下とか戸棚のうしろを捜しまわった。 ある時、フと気がついたことは自分の生活に対する態度であった。厳しさ を求めて、この田舎へやってきたのに、このネコを飼い始めて以来、顔の 筋肉がゆるみっぱなしだったのである。しかし育ててみると学ぶことも多 いし、しかも精神衛生上にもよかったので、結果的にはよかったのだろう。

学校はもう始まっており、毎夜4時間の電気供給も始まっていた。電気のありがたさをいまさらながら感ずる。この4時間に勝負をかける。翌日の投業の出来、不出来がこの時間の使い方いかんにかかっている。家のまわりには、グアバの木、ココヤシの木、グレープフルーツの木が植わっていた。少しだけなら勝手に取っても構わなかった。生徒や子供達がよく取って分けてくれた。ペランダに出てみる。見晴らしはよくないが、ジッと腰を落として座っていると、川へ木を汲みに行く女、帰る女が前を通る。「アイコ

一」とあいさつして行く。「ヤーイエ」と返す。実にのどかである。平和 である。ヤギもメーメー鳴きながら通りすぎていく。夕刻になると決って パームワインを頭に蚊せた男が通る。山の中で油ヤシに傷をつけて集めた とりたての酒である。その男を呼び止めて一杯飲むのが、私の1日の楽し みであった。「ああ、これで今日も1日終わった」と思った。食事もべ ランダで作った。切り株を椅子にして床で作るのだ。いつも子 供た ちが 集まってくる。日本人は何を食べているのだろうかという 顔 をして。料 理のカスは床の穴から下へ押しこんで捨てる。下ではニワトリやヤギがそ れを食うのだ。洗った水は床にサッーとこぼす。板と板の間をぬって水が 下へ流れ落ちていく。すべて自然と動物が処理してくれる。実にうまくで きている。飲み水や水浴び水は川から汲んでくる。パケツをブラブラさせ ながら、ノノホンと歩きながら川へいく。水を汲んだら今度は体をくの字 に曲げながら、やっとの思いで辿り着く。そんな姿が哀れに思えたのか、 それとも親切心からか、それからは子供たちが汲んできてくれた。器用に も頭にバケツを軟せる。人間の骨格で一番強い背骨を利用すると、かなり 瓜いものでも運べるというわけだ。川の水は緑色をしていた。1日放って置 くと, 底にはかなりの泥が沈澱する。顔を洗うときは上澄みをとって, しっ かり目をつむって洗う。雨が降ったときが一番うれしかった。雨水は遊ん でいる。そして目を開けて顔も洗える。水浴びは必ずやった。存分にやっ た。私が水浴びにパケツ2杯の水を使うのでガーナ人は驚いていた。ガー ナ人は普通1杯で、しかも石けんもタオルもいきなりつけ込むので、だんだ んと思ずんでくる。石けんも浮いてくる。体はだんだんにきれいになって いくが、パケツの水はだんだんと汚れてくる。そして最後にパケツの水を 頭からパサーとかぶって終わりである。私にはどうしても不可解である。 要求してきた。私の疲労状態など考えに入れない生徒にしばしば閉口させ られたが、彼らの熱意に根負けした。最後の1年間だ、やれるだけやって みようと決心した。毎晩のようにやった。1クラスだけやるわけにはいか ないので、進学をひかえた全クラスをやった。ミーも大きくなり、トカゲ

を捕えたり、木に登ったり、たくましくなった。最近は外で遊び疲れて家 では悪さをしなくなった。ある夜、アブのようなハチのような昆虫が部屋 の中へ入ってきた。明りを求めて入ってきたのだ。殺虫剤で殺しても、次 - から次へと入ってきた。家のつくりからいって、外界を完全にはシャット ・アウトできないのだ。体長にして5~6cm。刷が糸のように細く尻が大 きかった。羽は細く長かった。殺した数だけでも20はくだらなかった。ま だまだきそうであった。。電気を消して収ることにした。実にもったいない 夜を無駄にすごしてしまった。そしてとうとう、 第2学期に入った。この 学期が終われば帰国である。生徒の要求により進学のための投業内容に変 えた。過去の問題を解いて説明するのだ。私もこの方法がより実際的だと 思った。ただ彼らには問題の傾向がわからない。世界的な数学の傾向から して統計、確率、そして流れ図、群論の初歩が増えてきている。ガーナの 数学にもそれが表われている。みんな真剣である。自分も燃えている。生 徒もそうである。 情熱の起爆剤は本人の主体性によるものかも しれ ない が、持続性は案外、それを受け止めてくれる者がいるからかもしれない。ボ ランティア活動もそうかもしれない。 苔んでくれる者がいるからこそ, や る気が持続するのかもしれない。決して形として扱われるものではないか ら、自己満足だけなのかもしれないし、ひとりよがりなのかもしれない。 し かし、隊員はすべて、この容んでくれる顔を明日へのエネルギーにして、 頑張っているのではないだろうか。

食事もずいぶん変わってきた。今では平気で野ネズミやカタツムリを食べている。昆虫の幼虫も食べるようになった。山でパームワインに寄ってくる黄色い幼虫である。実に脂肪分の多い食料である。タンパク源は野ネズミから、カタツムリからはカルシュウムと鉄分の補給というふうに栄養補給には気をつかっている。ヤムイモ、ココヤムイモもしばしば食べるようになった。野菜はトマト、玉ネギ、ココヤムの葉、これらの3種類を毎回炒めて食べるのである。料理法を変えるのではなく、トマトを多めにしたり玉ネギを多めにしたりして、中に入れるものの量を変えることによって食事に変化をもたせていた。そして食べ始めると熱いうちに一気に食べるのだ。当然ながら体頂は減っていた。日本にいた頃は57kgあったのが、最悪の時で4kgまで落ちこんだ。普段でも50kgには及ばなかった。しかし不思誠に元気であった。この村には医者はいない。万が一のことがあっても、間に合わぬ。そういう心の緊張が自分を支えていたのかもしれない。もちろん栄養面だけを考えた献立表をつくっていた。アメリカン・ピースコーからもらったクッキング・ブックを参照しながら、何に何が多く含まれて

いるかを知った。だからこそ、ネズミやカタッムリや幼虫が食えたのだ。 単なるもの珍しさと、後での自慢話のためにやったことではない。

地方では、特にこの村のような山の中では、学校も実に粗末である。小学 校は背空教室と同じである。地べたに机とイスを置いて、それを土の鹽で囲 んでいるだけのものである。屋根はパナナかなんかの葉で覆っている。窓 ガラスも戸もないのである。授業が終わると子供たちは机とイスを頭に載 せて帰って行く。予算がないので必要なものは各自が用意しなくてはなら ないのだ。小学校1年生がそんな格好で通学する姿は痛ましい。私が教鞭 をとった Secondary School でも財政面では悩んでいた。金がなくなった とかで学校を3週間も早く終了した。生徒の姿もひどかった。 大部屋 に 100人単位で結め込まれて住んでいるのだ。まるで養鶏場だ、というのが私 の印象であった。ただ狂るだけで娯楽設備も間仕切りもないのだ。実験設 備もそうである。首都アクラの学校や有名校には政府の扱助でりっぱな設 備とりっぱなスタッフが備っている。しかし、私が赴任した学校のような いわゆる3流校には、そのシワ客せがきている。しかし、彼らが明るく陽気 であるのが、せめてもの私の心の慰めであった。あと、わずかで帰国である。 門番と他2名ほどで衣空を仰ぎながら火を囲んで語りあった。地酒を飲み ながら「俺を忘れるなよ、日本へ帰っても手紙をくれよ」と言ってくれた。 ネコのミーに新しい主人を見つけてやった。1年おくれの後輩隊員である。 「もうすぐお別れだぞ」と言っても、そしらぬふり。「こいつは何も判っ ちゃいない」と思いながら、イリコをたらふく食わせてやった。いよいよ 帰国である。思い残すことは何もない。厳しくも楽しい生活であった。人 にしてやれることは少なかったが、自分に課すことは実に多かった。もう 1度機会があれば、ガーナにきてみたいと思った。

大原隊員の報告書を読んで

沢 田 和 佐

4ヵ月の訓練を終え、1977年8月、意欲に燃えて赴任した片田舎のニュー・エドピアセという山中の小さな村での大原隊員の生活が生々しく、しかも淡々と述べられている。高床式の木造の山小屋は1部屋だけ。それが寝室であり、居間であり、学習室であるのは、学生時代の下宿を想い出させるが、木道も、炊事場もなく、電気も毎晩4時間。しかも学校が休みになると日曜日だけになり、それも3時間に減らされるとは、戦時中の疎開先の田舎での生活よりも、もっと自然に近い状態である。

隊員がまず馴れるべきは、こういった環境の中で、生きるための日々の営みであろう。太陽が沈むまでに、買い物、近所への挨拶、掃除、手紙掛き、3度の食事の仕度など、なすべきことは多く、時間は少ない。生活のリズムはすべて日本とはまるで違うが、それを掴むことが大切である。

次にやってきた試練は、虫害であり、つづいては、ネズミであった。それもだんだん図々しくなり、枕までかじられるという始末。このままでは発狂するか、かみ殺されるかと思った隊員は、近所から貰ってきた。ここという 其黒な子ネコとの共同生活を始める。

この子猫との生活が、大原隊員に人間性を取り戻させ、厳しい環境の中でも笑顔をもたらしている。ペットの必要さ、人間が孤独では生きられないという証明が、ここにある。

学校が始まり、毎日4時間の電気供給のありがたさを感じ、この4時間での数材準備、予習などの時間の有効な使い方に、翌日の授業の出来、不出来がかかっていることを悟り、真剣に勉強している隊員の姿に、日本では、絶対経験できない貴重なものを得た、真の教師の資格をみることができる。

日本での日常生活は恵まれすぎている。そこには甘えがある。甘えのある ところでは、なかなか人を教えられる真の教師は生まれない。厳しい現実に 学び、現地の生活に同化し、自らを鍛え、少ない時間を大切にしてこそ、立 派な指導者として成長していく。「良く学ぶ者のみが、良く人を教えること ができる」という言葉を座右の銘にしてほしい。 生徒や子供たち、川へ水を汲みにゆききする女たちとの心の触れ合い、「アイコー」、「ヤーイエ」と現地での冒葉による挨拶から、平和な暮らし(現実には極めて厳しいが)が感じられる。バームワインを頭に敬せた男を呼び止めて一杯飲むことだけが1日の楽しみであり、切り株を椅子に、料理を床で作り、食べカスを床の穴に落とし、洗い水を床に流し、自然と動物に事後の処理をまかす原始的な自然のままの生活。川から得る飲み水と水浴びの水(風呂などはないのだろう)を得るための労働の辛さ、尊さ、一番嬉しいのは雨だという言葉に日一日と現地の生活に溶け込んでいく、隊員の変化が感じられるが、バケッに貴重な水を2杯も使う日本人的溶解さからは脱し切れない点が微笑ましい。

臨時講義を毎日のように要求され、閉口しながらも、生徒の熱心さに根負けして、全クラスに毎晩実施しながら、子ネコのミーとともに、隊員も幼児 (現地の生活に対して) から大人になっていく。食事も変わり、野ネズミやカタツムリ、昆虫の幼虫までも、タンパク源、カルシュウム源、鉄分源として平気で食べるようになってくる過程で、まさに自然人としての道を着実に歩んでいる。

第2学期に入り、この学期を終えると帰国という最後(隊員にとって)の 学期を迎え、進学のための授業を始めたところ、生徒もさらに燃え、それに 支えられて、教師も燃える。 ひんでくれるものがいるからこそ、やる気が持 続し、生徒の吝んでくれる顔を明日へのエネルギーとして隊員が頑張ってい るんだという結論は正しいと思う。

過去の数学の問題の傾向を世界的な視野でとらえて、統計、確率、流れ図 (電子計算機に関連して)、群論の初歩などがあげられているが、今後隊員 を希望する者は、ぜひ、数学教育の現代化の方向について、勉強し、準備し ておいてほしい。現地で生徒に接して、必要を感じてからでは遅すぎる。

体重が減っても(約10kg減)医者のいない村の現況をよく認識して、栄養面に気をつけて、野ネズミや、カタツムリ、幼虫を食べた大原隊員の意志の強さに、改めて感心するとともに、この報告書は、後続の隊員に大いなる示唆を与える。

椅子と机を頭に載せて、背空教室へ通学してくる小学1年生の姿に、我が 日本の教育条件が如何に恵まれたものであるかを感ずる。本当に長い間御苦 労様でした。(協力隊技術専門委員)

土木設計隊員としての2ヵ年の活動

第5号報告書 (昭和54年8月15日)

派 遺 国 ガーナ 52年1次後期組

联 组 土木設計

氏 名元岛通失

配 瓦 先 State Construction Corporation, Accra

-元島隊員の路歴-

氏 名 元 岛 通 失 生年月日 昭和22年12月28日 出身県 長野県 職 種 土木設計 派達期間 52年10月~55年3月

1. 身のまわりの話

(1) 水と電気

今年の半年間はガーナが大揺れに揺れ動いたので社会情勢の変化が私の 生活や活動にも重大な影響を及ぼした。私の住居は以前レポートしたよう に、アクラとテマの中間にあるテシ (TESHIE) という町にあり、この町 は人口3万人ほどで、アクラやテマのペッドクウンとして知られている小 さな町だ。私の住宅は S. C. C. のシニア・スタッフハウス 群 の 一郭で ARMED FORCE STAFF COLLEGE の隣にある。ここはギニア湾に 面した気持の良いところで、山国育ちの私にとっては気にいっている場所 である。しかし生活に必要な水と電気の供給が安定していないのが頭痛の 種である。確かに私の家には、冷蔵印、ガスクッカー,温水器つきのバス, 水洗トイレ、ボロクソワーゲン(フォルクスワーゲン……15年前の新車) と並べるとカッコよく聞こえるが、停電と断水はしょっちゅう起こるの である。昨年の暮クリスマスの期間(23日~26日)私は平川駐在員につい て、隣国トーゴの首都ロメに滞在していたため、この時ばかりは水と電気 の問題で悩むことはなかった。1昨年は着任して早々でもあり、せっかく クリスマスポリデーを2週間 (12月23日より1月3日) もらったにもかか わらず、休みの間ずっと停電、その後2ヵ月に1度平均で2週間ほどの停 電のローテーションが続いていたが、今年になりやや落ちつき苔んでいた。 しかし6月初め(4日)の革命以後、またまた停電。冷蔵扉はあっても役 立たずで、おかげで中に保存していたカラーフィルム、8四フィルム等は いちおうビニールの袋に入れておいたとはいえ、中までビショビショにな り大半は駄目になってしまった。ガッカリである。3月初めには、現場か ら Head Office にモーターバイクで行く途中、水のあふれている曲り角 で不覚にもスリップダウンして左肘をいやというほど舗装道路にぶっつけ てしまった。一時はどうなるかと思われるくらい腫れあがり、複雑骨折か と危ぶまれた。さっそく1週間隊員宿舎で安静の状態にしていただき、金 坂調整員夫妻やコレブ病院の日本人の先生方に迷惑をかけてしまった。お かげでどうにか腫れもおさまり、レントゲンの結果も異常なくホッとした。 波乱万丈のガーナはその頃からさざ波がたちはじめていたのだった。それ というのもその頃アコソンボダムからの給水管が老朽化し、つまってきた

ためは理するとかで、全アクラ市が10日間の断水に入った。その道筋にあ たる私のところも断水となったが、私はちょうど前述の事故のため隊員宿 舎にいたので、食事等でそんなに苦しむことなく、不幸中の 幸 い と なっ た。しかしこういう時に困るのは水洗トイレである。水は貴重品で、協力 隊事務所でもエアコンをかけっぱなしにして出てくる水をためたりして努 力していた。市内のレストランもこの期間は閉店体業といったところだっ た。市内の少しでも水のでる水道管のあるところは、頭にバケツを載せた 列でいっぱいだった。水は直接生活に結びつくので、一般市民はあわてふ ためき、大変だった。普段あまり必要性のないポリタンクが飛ぶように売 れて (10ℓ入り28セディ50ペソワ……2,300円), ストアでも1人2個まで などと制限をしたり、笑い話として、「これは製造業者と政府が手を組ん でいるのではないか」などという話もでていた。S. C. C. は給水車を持っ ているので、この時はフルにあちこちににかりだされていた。私の家のあ る S. C. C. シニア・スタッフハウスのと こ ろ は 毎朝, S. C. C. の給水車 がきてくれたので助かった。しかし大変だったのは向う隣りに住んでいる S.C.C. の実験室長宅で、家族で約12,000羽ほどのニワトリを飼ってい て、水不足はニワトリの生死にかかわるため、あわてふためいていたよう だ。そんなわけでS.C.C.の給水車は彼が優先的に手引きしたようだ。水 - 不足の問題がやっと一段落した3月10日,コトカ空港が電気関係の補修と いう名目のもとに2週間ほど閉鎖された。

(2) カレンシーチェンジ

ついで追い計ちをかけるようにカレンシーチェンジの発表があり(もちろん国境は閉鎖された)、新セディは旧 5,000 セディ以内は7割で交換、5,000セディ以上は5割で交換、期間は3月12日より3月26日までとするとのことで、それまでは旧セディも使用可能ということだったが、12日より紙幣チェンジがはじまると、店の人々はいっせいにニューセディでなければ売らないと言いはり、生活に必要なパン、ガソリン等はもとより、すべてニューセディの金以外では物が入手できなくなった。しかし、ニューセディは換え始めたばかりで簡単に手に入らず、それに S.C.C. の本社にあるガソリンスタンドまでもニューセディと言い、今までとうって変った冷たい態度で突っぱねる。モーターパイクのガソリンが買えねば S.C.C. 本社より我が家に帰宅することもできず、仕方がないので General Manager

に泣きつき彼に保証人になってもらい、料金あと払いという形式で2ガロ ンわけてもらう始末だった。それまで扱り向きもしなかったコインが頂大 な価値をおびてきて、それまでコインの釣銭を空箱に入れてためてあり、 かさばるので一時は掃除にきてくれるメッセンジャーボーイにくれてやろ うかと思っていたのだが、変な時に役立った。数えてみると3.5セディほ どあり、これでガソリンが買えるなどと単純に喜んだりした。とにかくニ ューセディに換え始めてから最初の3日間というより1週間ほどは、前の 晩から並んでも換えられないというほどの人の列で,全ガーナが大騒動で、 私の現場も仕事にならなかった。特にあわを食ったのは今まで銀行を信用 していなかったマーケットマミー達で、おもしろいことに、こちらでは日 本で俗にいう"クンス預金"ではなく、"冷蔵印預金"というのである。 なかには、12ミリオンセディ(約10億円)という金を持っていたマミーも いたとか。混乱の紙幣交換状況をみて全部交換が不可能と思った者は半狂 乱になって礼(旧セディ)に火をつけて燃やしたり、あるものは皆にただ で配ってやったりしたとか。それ以上にあわてたのは近隣諸国の密輸入者 達だと思う。それまで国外持ち出しを禁止されていたセディが大量に関取 り引きされ流出していたのが、今回の処置で使用不可能になったためであ る。それにこの期間ボーダー(国境)は固く閉ざされているので、彼らは 夜、間に扮れて舟で入りこもうとしたが、警戒していた軍隊に昨日はあ そこで今日はここでというふうに捕まり、パケツの底に何千セディ原して いたとか、何々に何万セディ隠していたとかで新聞紙上をにぎわせた。し かし、一般大衆がこの紙幣交換に苦しんでいるのに、いわゆるビッグマン · といわれる連中は銀行の裏口から堂々と出入りし、トランクに何個もの金 、を換えて行った。そのため交換紙幣がすぐなくなってしまい、ひどい時に は、何百人と並んでいる人間の前の方から30人から50人でストップという こともしばしばあった。やはり、こういう開発途上国ではいつも馬鹿をみ るのは一般大衆のようだ。紙幣のチェンジも予定量を大幅に上まわったた め、当初は間に合わず1人500セディ以内に制限され、そのため大量の旧 セディ札をかかえた連中は何回も何回も並ばなければならない状態であっ た。中にはこのドサクサを利用して手数料をとり、換えてやるという人間 も出てきて旧1,000 セディが新700 セディに換えられるわけだが、その中 から200セディが手数料というのが一番あくどい連中のやり方で、一般的

に旧1,000セディの交換で100セディというのが手数料の相場だった。私も お金の交換を入から類まれ、暇がないので自宅のナイトウオッチマンに類 くれたのには感激した(一時は持ち逃げされたのかと思っていたので)。 驚いた話として,妊婦が並んでいる最中お産というアクシデントもあった とか聞いた。炎天下、列を作って何時間も並ぶガーナ人の時間という観念 ・のない辛抱強さには驚く。しかし紙幣交換が始まってから1週間後、とう とう恐れていた事が起こった。それは紙幣交換にきている連中の1人がさ さいな事からいさかいを起こし、蓄備の兵士ともめ、射殺されたのだ。その 時の状態を我が家の掃除にきてくれているワーカーの1人が見ていたとか で説明してくれた。それによると、ある銀行の最前列に並んでいた若者がた わいないことから整備の兵士とロゲンカし、あげくのはてに突きとばして あざけ笑ったため、兵士が怒って自動小銃で射殺したとのこと。とにかく 私の現場では、労働者がこんな事情で現場から離れられては困るので、労 倒者1人1人に換えたい金額を申請させ、旧セディ札と名簿をS.C.C.本 社に持って行き(原則として1人500セディ以内という枠つき), 経理で まとめて銀行と交渉し換えてくれた。しかしこのカレンシーチェンジの情 報は公表の前日(3月9日),金曜日の朝に国家の事業関係の会社にはす でに流されており、ただちにその日の午前中に秘密裏に集められた金は銀 行に預けられたと後から聞いた。そのせいか S.C.C. 本社の幹部はいち早 く余っている金を全部集めて預金したので、30%の損害を受けなかったよ うだ(今回のチェンジは銀行預金してある金は問題なしとのこと)。当時、 私はモーターバイクの事故で左肘を痛め休んでいたため、この事実を知ら ず、それに Impress money (所長雑費) が300セディほど未使用で残って いた。この金は本社扱いのチェンジでやってくれるのかと本社の経理に持 って行って聞いたところ, S. C. C. には旧セディは残っていないはずだな どといやみを言われ、こちらとしては誰も知らないことだ。それではおか しいではないかと文句をつけて、やっと換えてもらえた。とにかく紙幣チ ェンジが始まって3日目、ニューセディがないとどうにもならず、食うに 困ってとりあえず、Deputy General Manager に保証人になって もらい 200 セディほど借りた。その金も協力隊の他の隊員や現場スタッフに融通 してやると、すぐなくなってしまったのが実状だったが、それでも、とに

かく助かった。もっとも、あとからキャッシャー(経理の現金を扱う人) から「チート(だます)して持っていった金はいつ返すか」と言われた時 は、いささかムッとしたが。

(3) 任期延長

そんなわけで3月は、私の現場は満足のいくほど業務の進捗はなかった。とにかくこの騒動がおさまってやれやれと思ったが、今度は私自身の仕事のスケジュールと任期のことを考えると頭が痛くなり、せっかくガーナにきているのだから、2つある橋のうち1つだけでもかたをつけて帰りたいと思い平川駐在員に相談した(任期延長については、1月に平川駐在員が一時帰国された折、内々に私の休職先に問い合わせていただき、最大限2年半まで任期を認めることができるとの返事を得た)。私の描くスケジュールではあと4ヵ月延長すれば、なんとか片側橋梁だけでもかたがつきそうなので、もし私の休職先が許可すればとの前提条件付きで S. C. C. 本社のGeneral Manager と話し合った。彼としてはインターチェンジがすべて完成するまでいて欲しいと言い、普段スローテンボの彼がすぐ 秘事を呼び、任期延長頭の費類手続きをとったのには、いささか驚いた。また5月14日付で休職先の国鉄本社から連絡がきて内諾を得たのでほっとした。

(4) エアコン設置

3月、カレンシーチェンジの終ったあと、とにかく現場オフィスは名くてたまらないので自己負担(6万円)で現場オフィスにエアコンを備えつけることにした(昨年春の忘年会の時、こちらに野口英世記念研究会館の建設にこられている久米コンサルタントの菊地さんと話したところ、エアコンが1つ余っているとのことだったので、早速わけていただくことにした。同業のよしみ)。現場オフィスはバラックのトタン屋根のせいか午前中の1時間か2時間ほどしか涼しい時がない(11月から3月にかけてのハマターンのシーズン)。午後は暑くてたまちず、ちょうど日本における真夏の大小屋みたいで、暑さでバテてしまって思考力も鈍くなる。こんなことでは厳しい日本社会への復帰ができなくなると思ったわけだ。平川駐在員いわく「協力隊員は民衆と共に歩むのだから、いらないではないか」。しかし「労働者諸君と同様に暑さに耐えかねて指揮官がのびてしまったら私のプロジェクトはすべてがだめになる」と言って、所詮、水と油、混じることのない議論に苦笑した。エアコンはすでに買ってあるものの、まだ電気の

きていない現場オフィスなので、隣のトレーニングスクールの事務所長、 アンドレイ氏と交渉し。とにかく学校から電気をひいてもよいという承諾 ・ を得た。早速、本社とかけあって配線に必要な費用をだしてもらい、本社 の電気量が必要部品を買い揃えて段取りしてくれることに決まったが、そ の後,いつまでたってもやってくれる様子がなく,たびたび本社へ行ったつ いでに係のところへ寄って聞いてみるのだが、トモロー、トモロー、ネク ストウィークと空返事で埒があかない。仕方がないので自分でプラントプ ール (S. C. C. 全体の自動車、重機等の運営管理、修理等を一手にしてい るところ) の電気屋に頼んだところ、すぐきてくれ、配線その他取付け作 - 紫をしてくれたが,『まだ部品が足らないからマスター, 100 セディほど 出してくれ」と言われ、すぐ払ってやったところ、未完成なのに1週間たっ ても2週間たっても姿を見せなくなった。どうなったのかと思い部下にチ ニックにやらせても、誰も知らないというだけであった。5月に入り、私 自身プラントプールに行って、そこの電気部門のチーフに「1ヵ月前、彼 に部品の金を払ってあるが、その後彼はすこしも現場オフィスに配線作業 にこないが、どうしたのか」と尋ねると、彼はすでに1ヵ月前(金を払った すぐあと)2ヵ月の休暇をとってどこかへ行ってしまったと聞き、ガックリ してしまった。日本で言うところの持ち逃げというやつである。チップを 払ってやったり、ビールを飲ませてやったりした自分がみじめに思えてな らなかった。それにすべてがレシート、レシート(どこの国でも同じだが) なのでお金の請求もできず、まごまごしていると泣き収入りになるのでは ないかと思ったが、そうかといってせっかくエアコンを買ってあるのに使 うこともできないのでは宝の持ち腐れになってしまうので再度電、気量を 頼んだところ、新しいエレクトリシャンは早速、現場にきてくれた。あっ ちこっちチェックしたところ、配線がでたらめなので、またやり直さなけれ ばいけないと言って、汗だくで奮闘してくれて助かった。どうにかこうに かエアコンの件はこれでかたがつき、涼しい空気が身を包むようになると 今まで頭の回転がにぶっていたのが急にシャープになり、仕事が次々と出 てきて忙しくなった。もうすぐ現場オフィス動め満1周年を迎える5月半 ばであった(昨年5月24日現場に移動)。

(5) トイレ

当時もう1つの悩みは家のトイレのことであった。4月になって時たま

土砂降りの雨が降るようになってから、水洗トイレの水はけが急に悪くな って満足に使えなくなり、本社の住宅関係を担当しているエステートオフ ィサーに修理の依頼をしたところ。 すぐやるようなことを言っ て く れ た のだが、実際はなかなかやってくれず、私としては毎日使えないので体の 調子主で狂ってきた。不機嫌な日が続き、本社の General Manager や Deputy General Manager に問題事項 (プロブレム) として相談すると、 そのたびに彼 (エステートオフィサー) はやってきて、初めて聞くような 顔で、いつもトランスポート・プロブレムと言って片づけるだけで、何も してくれなかった。また Deputy General Manager の Mr. Omuni (彼 は以前9ヵ月間ほど日本に滞在したことがあった)は何かと努力してくれ。 エステートオフィサーに「耶を借してやるから City Council に行って何 とかしてやってくれ」とまで言ってくれたが、1ヵ月過ぎても彼が動く気 配はなかった。それではと私自身、直接 City Council にかけあったのが 革命 (レポリューション) 直後の6月半ばであった。それも、お金を払え ば、すぐやってくれると期待していたところ、1週間たってもやってくれ ず、再度訪れてたずねると、エンジンオイルがないというので(当時アク ラ市内にはエンジンオイルなし……いまだに購入不可能) 乏しいエンジン オイルの現場ストックの中から1ガロン(4.5 %) 持って行き, やっと処理 してもちった次第である。とにかく私の得た教訓として簡単にできる問題 は仲介を通さないことだ。私がガーナの外国人になって1年と9ヵ月(も うすぐ10ヵ月) だが、こちらでは親しくすればするほど、彼はマイ・ブラ ザーで、彼の物は自分の物、といった道理がまかり通る。だから何をしよ うがかまわないというガーナ人の考え方には、いささか嫌悪感を覚える昨 今である。グチをこぼしてしまったが、本年度のクライマックス、レポリ ューション(革命)について次に述べる。

(6) 革命

6月3日、その前日アメリカ大使館チームと協力隊チームとのソフトボールの試合に出たせいか、すこし体がだるく感じたが、柔道の指導にこちらにきておられる講道館の山本先生宅に显からおじゃまして囲碁の熱戦をしたあと、先生からドライブへの誘いを受けたが、「今日は疲れているから帰って寝ます」といって夜11時ころ帰宅すると、いつになく電圧が低いせいか提歴のようなライトで本も読めず、そのままぐっすり寝こんでしま

った。次の朝(月曜日)は体の調子も良く、それに現場オフィスのエアコ ンを使う楽しみもあるので早朝からやる気になって着替えをし、部下がフ ォルクスワーゲンで迎えにくるのを待っていたところ。いつまでたっても こない。それではとオートバイに乗って現場へ張り切って出かけた。とこ ろが、いつもは道路が混雑する午前8時の時間帯に車が全然走っておら ず、えらく今日はスムーズに行けると思いつつ、いつも通るビルマロード をとばして行ったところ、 軍隊のビルマキャンプの入口の交差点には、 い つもいる交通整理のミリクリーポリスはおらず、代りに自動小銃を持った 兵士が1人立っており、なんだか私に向って叫んだようだったが"アッ、 そう"なんて顔をして通りすぎた。おかしなことに一般の車は道路の左右 に別れて止められており、それに、えらく人が出ているなあ、と感じた。 それと、いつも静かなビルマキャンプからパン、パンとお祭りの花火のよ うな音が聞こえた。とにかく何かあると思ったが、別に気にも しなかっ た。現場近くのアチモーターハイウエイの交差点に行くと、自動小銃を持 った兵士が車をすべて止めて、1台1台、中をチェックしていた。現場オ フィスに着いてウオッチマンに尋ねたところ、ウオッチマンいわく「シピ リアン・ガパーメントがもうじきやってくる(7月1日,民政移管)。Head of State のアカフォ将軍がリタイヤー(引退)して、午後からパレード をするのだ」。聞き伝えのいいかげんなことを言っていた。そうかそうか と思いつつエアコンのきいた所長室で張り切って仕事にかかっていると、 部下の Senior Works Superintendent の Mr. ABEKA が顔色を変えて とんできて、「マスター、何ともなかったか」と心配そうに聞いた。「今 日はクーガがレボリューションを起こしたんだ」と言われても ピンとこ ず、「クーデターだ」と言われてビックリした。朝6時のGBCニュース でアナウンスされたとかで、私の家に行ったそうだが、家を出たあとで私 はおらず、彼は心配して駐在員宅やら、あちこち私を捜してくれたのであ った。今度のクーデターで常日ごろ反感をかっているレバニーズ(レバノ ン人)は射殺される恐れがあるとのことで、私はレバニーズに似ていると ころがあるから気を付けた方がいいと言われた。まだ戦闘中だとのこと で、彼はラジオを持ってきていた。それから30分おきに流されるニュース を2人で聞くことにした。まだその頃のアナウンスは、政府軍は今優勢 で、まもなく反乱軍を鎮圧するだろうという楽観的なものだった。10時半

ころ現場オフィス付近の検問所で S.C.C. の労働者を乗せたティバートラ ・ ラクが兵士に射撃された (3 発当ったとのこと) ようだ。私もその銃声を 聞いた。それはトラックの運転手が軍隊の制止をきかず突っ走ったためと か? そんなわけで現場の労働者は恐がって仕事にならず、昼から現場を ・閉めて引きあげることにした (S.C.C.の現場及び事業所はすべて昼からク ローズ)。こうなると真先に S.C.C. はプラントプールにいっぱい 車関係 の部品を持っているので介印を閉めた方が無效であるからだ。その日どこ の職場でも盗難を恐れて介扉は最初に閉めたようだ。とにかく物騒なので オートバイは現場オフィスに置いて、フォルクスワーゲンで現場スタッフ は引きあげた。戦闘中のビルマ道路を避けてアクラ市内をあちこち迂回し て知った。市内の要所々々にはポリスのタンクやソルジャー・ポリスが警 戒しており、一般市民のまきぞえを防ぐため、戦闘中の付近の道路を閉鎖 していた。確かにその向うではドンパチが激しく聞こえていた。迫力があ ったのは自宅付近のミリクリーアカデミーからスクッフカレッジにかけて の道路沿いであった。3 mおきに兵隊が突っぷして戦闘体勢をとってお り、銃口を道路に向け、それも2瓜3瓜になっていた。迷彩色のヘルメッ ト、黒い顔の中に異様に光る目、にぶく光る銃口を車の中から見たが、わ き腹を冷たい風が吹き抜けるようで気持のよいものではなかった。

その向うのゲート近くでは、幹部がまだ白瓜がつかないので、ラジオに つきっきりで、どっちへつこうかと迷っているふうにも見えた。とにかく 我が家にたどり着いたが、弱ったのは食料の買い置きが充分でないことだった。とりあえず部下に類みパンを5本ほど買ってきてもらった。 普段あまり聞いたことのないラジオをこの時ばかりは真剣に聞いた。放送の合い間にレコードがかかっており、クワイ河マーチが始まるとすぐアナウンスがあり、情況を刻々と知らせてくれたが、4日夕刻よりガーナ・ブロードキャスティング(放送局)が革命軍に押えられ、白瓜がほぼ決定されたようだった。こういう時なので、ドサクサの中、兵隊もクレージーになって銃を持ったギャングと化し、次々と白人宅を襲い(特にレバニーズはひどかった模様)、金品、特にラジオ等は全部略奪した。なかでもブロードキャステング付近のイーストカントンメント地区は戦闘も激しく、それにここ一帯は高級住宅街でもあり、協力隊オフィス、平川駐在員宅、金坂調整員宅、フレブホスピタルの日本人ドクター宅等多くの日本人も 住ん でい

た。特に我々日本人の中にはレバニーズに似た顔つきの人もいるので、兵 隊の追求も厳しかった。もう1つはガーナ人のピッグマンと言われる人々 の住宅もこの地区に含まれており、家宅捜索 (ハウス・クリーニング) と 称して何回も訪れ、そのたびにお金、ウイスキー、煙草、電気製品等手当 り次第に持ち去ったとか……。銃口を突きつけての悪行の数々である。あ る日本人の1人は身の危険を感じて遺費を掛いたとか。私は1日半,停電の 我が家に龍妓したが、さすがに、いてもたってもおれなくて、大勢の決ま った5日午後、道路(テマとアクラを結ぶ海岸沿いの道路)に出てキョロ キョロすると兵士達が引きあげ始めているので、これなら外に出ても大士 夫だと判断し、イーストカントンメントの柔道の山本先生宅に避難した。 先生の話では戒厳令(夜8時以降翌朝6時まで外出禁止)が4日夜しかれ た。それから5日の午前中にかけては先生宅の裏手の方200m ほどにプロ ードキャスティング(放送局)があるので、攻防戦が激しく、車の急ブレ ーキの音や機関銃の音が聞こえ、先生宅の庭も兵士がウロついたとかで先 生自身落ち着かなかったとのことだった。5日、6日と今度は散発的にゲ リラ戦になったため、イーストカントンメント付近ではまだ銃声が聞こえ ていた。2日間ほど先生宅におじゃまして情況を見守ったが、今度の革命 (レボリューション) は空平中尉の J.J. RAWLLINGS (31歳) のひき いる下級将校達が中心になって行なったもので、彼は3週間ほど前、1度 事を起こそうとして失敗し営食の中だったとか。

この革命で S.M.C.(国家最高会議)の幹部はほとんど逮捕され、政府軍は最後までポリスのヘッドクォーターに立てこもって抵抗したとか。いわゆるそれまでガーナのトップクラスであったビッグマンといわれる階層の人間には、この革命の風当りが強く、特に警察において、トップ(Na 1)はいち早く逃げたため問題はなかったようだが、Na 2~Na 5 はソルジャーに捕まった。殴る、蹴るの暴行を受けたあと、両腕を交差して耳たぶをつかまされ、その姿勢でうさぎ飛びをさせられたため、普段いい暮らしをして太ったオッサン連中なので全員膝を痛めて、ただ今入院中とか。とにかくレポリューションの目的は腐敗しきったガーナを崩潰し、狂乱物価をコントロールプライスに安定させ、一般国民の生活の向上を図るというのが主な目的であった。カラブリ(安く手に入れたものを不当に高く売る)の摘発は特に敗しく、マコラといわれるマーケットでは、マミー達が軍隊のコントロール

プライスを拒否したため60人近く射殺されたとのこと(この国は母系社会 なので普段マミー遠に恐いものはない)。確かに、この革命騒動はガーナに とって大変意義深いことだったと思うが、一方幹部と下層階級の兵士の間 の思想統一が完全になされなかったため,前にも述べたように麻薬を使い, 酒を飲み、レポリューションに参加した兵士達は、これまでのうっぷん明ら しにこの時とばかりに略奪して歩いたふうにもとれた。この革命騒ぎはア クラ以外ではそれほど目立った動きも見られず、たいしたこともなかった ようだ。6日、最終通告として A.F.R.C. (ARMED FORCE REVOL-UTIONARV COUNCIL)より24時間以内にカラブリをやめて、コントロ ールプライスで売るようにとアナウンスされ、それ以後悪質なものは銃殺 刑に処するとのことだった。8日以後ハウスクリーニングと称して隠匿物 資の摘発が連日行なわれ、いまだに続いている。特にレバノン人、インド 人の経営する会社関係は最初にやられ,昨日はあそこ,今日はここというふ うに摘発物資を写した写真とともに新聞紙上をにぎわせた。悪どく隠匿し ていた者の家は摘発物資を押収したあと軍隊がダイナマイトで爆破し、つ い最近ではマコラマーケットの第1マーケットが軍隊に爆破された。また 前SMC幹部の1972年以来の私有財産も徹底的に調べあげられ、給与所得 にふつりあいな財産所有はおかしいということが指摘され、家屋何軒、自 動車(ペンツ)何台を押収というふうな記事が連日新聞に掲載された。前 回(昨年)アクフォ将軍によって退陣させられ、刑務所暮らしの長かった アチャンポン将軍は一番最初に摘発され、のち釈放されるのかと思われた が、摘発の取り調べが終った直後、16日朝、突然彼はネービー・コマンダ ーのウトカ氏と一緒に私の家付近のミリタリー・アカデミーの射撃場で6 時10分就殺刑に処せられた。彼らは人知れず5時30分ころ現地に該送され アチャンポン前 将軍 は 紫のポリティカルスーツ, ウトカ前海軍司令官は 淡い水色のポリティカルスーツを着ていた。すでに覚悟を決めたアチャン ポン前将軍は、処刑前に道路わきのまばらな観衆に向って白ハンカチを振 り、最後の別れをしたとか。秘密裏にされたため、多くの人々は、この事実 を、その日の午後にでたガーナグラフィック紙によって知らされた。この 新聞は飛ぶように売れて,なかなか手に入らなかったが,後日友人が見せて くれた。なお、この処刑は、その日の夜のテレビ放送で流された。それから 10日ほどした26日朝、家の前の道路がえらく渋滞していた。何事かと思いモ

ーターパイクで出勤して行ったところ、前SMC幹部6人が今日銃殺され るとのこと、ものものしい兵隊があちこち登戒に当っており、見物に集まっ た群衆はおよそ3、4千人ほどもいた。射撃場横の道路沿いには集まった 人々がギッシリ。私も野次馬根性で群衆の1人に加わった。なかなか始ま りそうもないので30分ほど待ったあと仕事現場に向った。そして、その日 の午後9時半に刑は執行された。それにしても前 Head of State のアカ フェ将軍は5日, 市内のスサラムダムというところの教会の牧師さんに説 得されて自首してきたのに銃殺刑とは、いささか私としては合点がゆかぬ 気がした。彼の助命嘆願はあちこちから出ており、特にナイジェリアのト ップであるオパサンジョーという将軍とは友人関係にあった。もし将軍が 処刑されることになれば、オパサンジョーはガーナ向けの石油輸出(ガー ナの輸入量の80%はナイジェリアから)をストップし、最悪の場合は戦争 状態に入ることもあり得ると警告しているという話もあった。事実アクフ *将軍の処刑は止めるよう何度も勧告されたが、時の勢いというか、そう いうものに押されて、とうとう処刑されてしまった。計8人が処刑執行さ れた。リストアップされた前政権の幹部はあと36人もいて、処刑が予定さ れていたが、世論とくに世界各国からの突き上げが激しく中止された。今 **産の革命でアクラに近い、アプリという町の良家の子女を預るアプリ・ガ** ールズ・セカングリー・スクールで教えている隊員の話によると、あの子 のお父さんは今度の革命でダウン、あの子のお父さんはアップだなどと同 じクラスの中で前SMC幹部を父親に持つ子,新AFRCの幹部を父親に 持つ子等があり、複雑な雰囲気があったと話していた。ただ言えることは、 今度の革命前は、周知の如くガーナは英大な累積赤字をかかえ ているの に、毎年輸出するココア、鉱石、木材等による国家収入の5割を軍人幹部 連中が着服していたのである。ココアなどは国際市場で1トン当り 約100 万円もするが、そのうち生産する農民には18万円しか渡らなかったと言わ れている。そんなわけで一般輸出品目のうちで輸出代金のおおよそ半分し か生産者には渡らないのが結局諸物価の値上がりの原因となったとも言わ れているが、これには若干うなずけるところがある。ハウスクリーニング が激しくなると、それまで町に出回っていたものがピタリとなくなり、特 に革命前は道端に数多く並んでいたものが急にミカンの山にとって代り、 それまで1個50ペソワ (約35円) で売られていたのが、20ペソワ (約14

円)のコントロールプライスが表示され、表面だけはカッコをつけている ような形になった。肝心のパンはいっせいに姿を消し、それまでスーパー マーケットでガーナ人が振り向きもしなかったスードル食品をマミー違が 争って買いあさるので、私でさえ当時は何を食べて過ごそうかと悩んだも のだ。米などは、とっくに姿を消していた。とにかく7月に入って困りだ したのはガソリンだ。ナイジェリアからの石油の輸入がストップされたの で、車の個数ナンバー、奇数ナンバーと日によって区別して、販売された。 7月初めプライベート・カーは1日1台につき6ガロンまでと甘われてい たのが、末からは増々供給事情が悪くなり、1週間に6ガロンまでと厳し くなり、トロトロ(トラックの荷台を改造した乗合自動車)は1日20セデ ィ (6 ガロン…レギュラー), タクシーはガソリン購入にクーポンとイン シュアランスカードがいるなど、いろいろ規制が設けられた。市内各地の ガソリンスタンド前は車の列が数百メートルにも及んだ(最長は約2/2… 500台)。石油は8月に入り一時アルジェリアとかリビアから入ってくると いうニュースがあったが、外貨事情の悪いガーナではお先まっ暗というと ころである。 革命後, 6月18日, 公約通り、 シビリアン・ガパーメントの選 挙がなされ、故エンクルマ大統領系のDNPが圧倒的勝利をおさめた。大統 領選については,選挙で投票数の過半数を占めなければ承認されないので, 再選挙が行なわれ、DNPの LIMAN 氏とPFPの OWUS 氏の間で争 われたが、DNPの LIMAN 氏が勝利をおさめ、10月1日より民政移管が 約束された。最近では少しずつ物が出回っているようだが、市内のあちこ ちのスーパーマーケットでは人の列がすごく、ガソリンスタンドは取の 列,とにかく、どこへ行っても列,列のガーナである。ハウス・クリーニン グの結果7月末、26人のレバノン人、10人のインド人、2人のヨーロッパ 人が国外追放の勧告(24時間以内)を受けて追放された。7月末で外国人の ハウス・クリーニングが一段落したせいか、最近ではガーナ人の財産関係 の摘発が進み、 S.C.C. でも職員の1人々々の財産をAFRCに申告せね ばならず、いろいろと対策会談がなされ、ハチの巣をつついたようだった。 なぜか幹部はあわてふためいている。Deputy Managing Director がビル マキャンプに呼ばれ、ビールびんのかけらで頭を剃られたとかで、とにか く, いまだに S.C.C. の幹部は元気がない。長くなったが、以上が、今期 私の身のまわりに起こったことである。

2. 仕事の話

私の担当する現場、NSAWAM MOTORWAY INTERCHANGE BRIDGE (APENKWA BRIDGE) 、4 径間連続鉄筋コンクリートT桁 橋、延長約60m、幅員約15m(3 車線)上下線の2 橋梁は、昨年1 月23日から施工スタートしたが、セメント、鉄筋、板材、くぎ等々、資材、重機 類不足の中、少しずつだが進歩を示し、今月やっと下部構造の完成までこぎつけた(日本の3 倍から 4 倍以上の日数がかかった)。このレポートでは昨年(1978)8 月以後の1 年間について報告する。

1978年8月 CENTRE PIER, TAKORADI SIDE PIER, 橋脚根掘完了, 捨てコン打完了(セメント:砂:砂利=1:3:6)

9月 アンダーロード及び橋梁部分の根据完了。鉄筋組テマ側ピヤーよりスタート

10月 テマ側ピヤー基礎コン打

11月 コトカ空港沿走路補修工事で2週間作業中止。 労働者, 重機, セメント等いっさい供出。月末, センター・ピヤー (アクラ側) 基礎コン打。リテインニングウォール、捨てコン打, テマ側, タコラデ側……スサクム方

12月 セメント・サイロ10 t (200袋) 収納能力のものを 2 基現場に設 欧, クリスマス・ホリデー前にすべての基礎コン打完了を目標に可設る。
20日夜, 11時半までかかり 最後の基礎コン打 (タコラディ側ピヤーアクラ 方)。 ミキサーが途中で 2 回故障したため手間どる。 6 つある基礎はこれで完了, 1 ヵ所80 C Y (キュービックヤード) 約60㎡で、(セメント:砂:砂利=1:1½:3)の配合で約430袋のセメントを使用、1 台のミキサー (0.25㎡)で1 日約40 C Yが限度で2台のミキサーが必要であり、最後のコンクリート打は途中で止めるわけにもいかず、私のモーターバイクのライトやトラクター、トラックのライトを総動員して行なう。私も労働者もクタクタ。 ただ12月に入って General Manager が今月中に 基礎 コン打ちを終えたちボーナスを払うと約束したので労働者諸氏可要る。

21日, 忘年会、労働者100名を集め飲ませる。私の負担額約 (600セディ)。 初めて多勢の前でスピーチをしたので、いささか興奮を覚える。こちらの 労働者は飲ませるとすぐ空手だ、ボクシングだと騒ぐので、ビールびんを 割られてしまい、少々ガッカリ……空びんは費瓜品。

22日、午前中で現場クローズ。クリスマスポーナスの件でもめる。before christmas が、いとも簡単に after christmas に変わり、労働者が騒ぐ。これは、11月突貫工事で空港の補修を行なったわけだが、政府の支払いが来年にのびたためである。現場担当者として若干気まずい思いをした。混乱を避けるため、労働者連中が帰宅するまで、次席とエスケーブした。12月23日より1月3日までクリスマスホリデー。12月23日より12月26日までトーゴの首都ロメの一番高級なホテル『ドラベ』に平川駐在員と滞在。12月28日誕生日。日本人会忘年会……コンチネンタルホテル。

1979年1月 テマ側ピヤーよりピヤー柱鉄筋組スクート。鉄筋組が複雑ではかどらず、だ円形型枠は昨年4月から8月にかけて完成しているので、型枠組は問題なし。現場スタッフの勤務評定を本社に報告(Anual Confidential Report)。日本にいれば逆に勤務評定される方の立場なのに、いざ勤務評定するとなると戸惑う。次席とも相談して、私の勤務評定は日本人を対象にして考えてしまうので、いささか辛い。したがって彼らの将来も考えて、全員1ランクアップにつける。

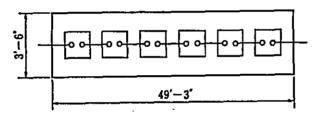
2月 センター・ピヤー柱コンクリート打。鉄筋間隔が狭いので柱のトップ (約5 m上) から打設しなければならず、トレミー管を提案したが、ないと言われ、箱型シュートを作り打設。 骨材の分離を心配。 バイブレーターを入念に使うよう指示。 柱を3回にわけて打設。 アクラ側のピヤーは初回使用のため、だ円形型枠には問題なかった。 続いてスサワム側のピヤーに移ったが、ベニヤ及び板材の型枠は1回水を通すと変形するため据え付けに苦労する。 こちらの人間は少々傾いていても全然気にしないので再三再四やり直しを命ずる。 少し離れて遠くからみれば、傾いているかどうかは容易に判断できるではないか、と注意を与える。

3月 リテインニングウォール捨てコン打。テマ側……アクラ方。テマ側ピヤー柱コンクリート打(アクラ方)。水不足、カレンシーチェンジで全然はかどらない。

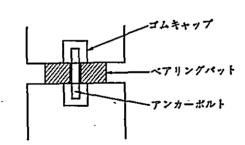
- 4月 テマ側ピヤー柱スサワム方コンクリート打。タコラディ側ピヤー 柱下側半分だけコンクリート打。
- 5月 タコラディ側ピヤー柱コンクリート打完了。今年は雨が多いため 満足に作業できない。

6月 テマ側ピヤービーム鉄筋組、型枠組スタート。レボリューション 及び雨のため作業ははかどらない。

7月 テマ側ビームコンクリート打……テマ側ビヤー完成。センタービヤーコンクリート打……センタービヤー完成。しかし、センターピヤーにおいては、アンカーボルトの問題があり、この橋梁では固定端をセンタービヤーにおくため、アンカーボルトを必要とする。そのデザインを前から早く欲しいとコンサルタントに要求したが、まったく良い返事がないので、「あなたができないなら私が設計しようか」と言ったが、体よく断わられた。行くたびに病気だ、出張だと言いわけづくめで、なかなかよこさなかった。センターピヤーの鉄筋組がすべて終ってから、やっとはしり掛きのスケッチをもらった。そのスケッチではビームの真中にアンカーボルトの絵が掛いてあるが、現場では主鉄筋がその真下にきているためどうにもならず、話しあった末、ジグザグにアンカーホールを設けることにした。



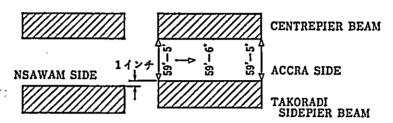
8月 末に タコラディ側 ピヤーピーム のコンクリー ト打を予定。 ただ今,鉄筋



組打設足場組立中。フ と思うことがあって、 すでにでき上がったテ マ側ピヤー、センター ピヤーをチェックする と、センターピヤーの 位置が所定の位置より 少し移動していた。サ

ーベイヤー (潤量士) を呼んでいろいろ質問すると「1インチ(2.54cm)程度は全然問題にならない」と答えた。実にガッカリしてしまった。確かに私が先に立って全部チェックすればよかったかもしれないが、長年S. C. C. で測量をやってきた人間を無視すると、あまりいい結果を生まないので、それもできない。 測量については私が指示を与え、あとで確かめると、彼

らは "Just collect length" というので安心していた。あとで実際に測りな おすと1インチくらいの訳並はすぐ出てしまうので、頭にきて測量チーム を全員集めて説教した。最初彼らは、なぜ怒られているのか判らないよう で、ポカンとしていた。「日本ではスパンの誤差は±5㎜だ。こんな簡単な **極梁で1インチもの訳並とは何ごと。あんた方はテープの読み方を知って** いるのか」と質問すると「コンクリート打前は Just collect length だっ た」と言いはり、お互いに責任のなすりあいを始めた。カーペンター(大 工) スティールペンダー(鉄筋工)は,私のみるところ,仕事は遅いが丁寧に やってくれるので助かっている。この極梁は現場打ちのため、実際には1 インチ程度の調差はたいした影響もないのだが、私は現場スタッフに常日 頃「我々は消しゴムを使うことができないのだ。すなわちコントラクター は仕事のやり直しがきかないのだ」と言っている。「コンサルタントなら ば、まちがっている。ああそう、と言って消しゴムで消して扱き直すことが できるかもしれない。しかし、すでにでき上がっているあのピヤーを、あな た方は動かすことができるか。理由はたくさんあるかもしれない。しかじ測 **量量はいかにしたら特度の上がる測量法ができるかを常に考えるべきだ。** 1インチ程度はノープロブレム(問題なし)だという考えは、やめてもらわ ないと、将来ガーナの S.C.C. の発展は望めない。もし私がこのエラーを見 過ごすと、あなた方はそれで良いと思ってしまうから、それが恐い」と説明 し、判ってもらった。先日、ワークススープリテンデント(仕事師)のMr. ABEKAと最後に残ったクコラディ側ピヤーのビームのセッテングについ て口論をしていた時、私が普段ドライバーに含う調子で stupid idea (馬鹿 な考え)だと言ったら彼が怒って、「私は仕事師 (ワークススーパーインテ ンデント) で何年もこの仕事をやっている。馬鹿ではない。あれはあなた が決めたことではないか。 stupid とは何ごとだ」と怒りだした。それと いうのも、次図のように以前に当初セッテングしてきた位置から1インチ のズレは大きいから1/2インチだけシフトせよと指示を与えたところ,私が 測り直してみると、指示した通りにリセッテングされていない。内側だけ1 インチスライドさせ、もう一方を忘れているために起こった現象で、日本人 の頭ではとても考えられないことである。それで私の立場上しめしがつか なくなったので、彼を所長室へ呼び「私もガマンする。あなたもガマンして くれ。私は、あなたが知っているように Vocabulary (語い) が少ないのでダ



イレクトに含ってしまうが、悪気があって言うのではない。あなたも知って いるように、私の契約期間はあと6ヵ月である。もし私が日本へ帰ったら、誰 が中心になってやるのか。確かに私の下にはアシスタントエンジニアがい る。しかし彼は経験不足で何も知らない。あなたが引っ張っていかなけれ ば、どうするのだ。今、私があなたのミステークを指摘しなければ、あなた はそれでいいと思い込み、あなた自身の発展はあり得ないではないか。そこ をよく考えてくれ」と言って話し合ったところ、判ってくれた。あとで自 宅へ呼んでピールを飲み, 充分和解した。とにかく, こちらでは1を説明す るには、その下の0.1から説明しなくてはいけないので苦労する。また、昨 年10月、タコラディ側ピヤーの基礎型枠をこちらでは Mason (石工)が野 面石というか、根据で発生した片麻岩をモルタルでブロック積みにしてい たが、その時ちょっと気になったので次席を呼んで、「この距離は大丈夫 か」と聞くと、「うちの測量屋が5回も6回も測ったから問題ない」とのこと だった。ところが夕方現場へ行くと、すでにでき上がっているブロック塀を 壊しているので,私がテープを持ってきて測ってみると,設計よりも4イン チ(10cm)も短くびっくりしてしまった。その時測量屋を呼んで厳しく説教 した。私より先に次席の Mr. ABEKA は,自身でチェックしてみて,その ことを知ったので、やり直しを命じていたのだった。以前私は測量屋に「こ のプロックは1週間もかかって、ここまできている。これに使った費用は 200 セディ 以上だ。あなたの給料以上ではないか。こんな簡単な距離測量 で4インチの誤差は許せない」と激しく怒ったことがあったので、今回のよ うなミスはないものだと安心していたわけだ。その時、次席に「土木屋の 仕事で大切なことは誰も信用するなということだ。信用するのはあなた自 身だ」と言っておいた。下部構造最後のコンクリート打が終ったら、お祝 いとして労働者全員に酒をおごろうと考えていた。

9月 上部構造施工スタート予定。しかし革命以来,ガソリン不足と労働

時間が今までの 7:30~16:30が 8:00~15:00までに短縮され、それに 土曜、日曜の作業禁止とセメント不足、鉄筋不足が目立ち、私の工程設通 りの施工が難しくなった。小生の工程表も絵に描いたモチに終りそうな気 がする昨今である。

以上が昨年8月以来1年間の現場のあらましである。昨年12月のS.C.C. の幹部のミーティングで、私のそれまでの菜漬を認めてくれる由、Deptuy Managing Director のスピーチがあり、佐が拍手してくれた。それによ って今年1月より毎月200セディ(約14,000円)ずつの手当をもらえること になった。私は現場の指導強化の一方法として,毎月1回,現場スタッフの ミーティングを開き、お互いに遠慮なく話し合える場を設けている。200 セ ディはミーティングの飲み代に消えてしまうが、彼らは大変楽しみにして いて、「チーフ、今度はいつ聞くか」と催促がある。高所作業の始まった 今年1月、現場用にヘルメットを15個ほど購入し、マークを付けて告に分 けようと所長室にキープしておいたところ、早くも2つほど誰かに持ち去 られた。名前を控えて労働者に渡したが、彼らは家に持っていったままで、 現場では着用せず、デザインしたマークもけずり落としてしまった。「た ぜだ」と聞くと、帰宅する時かぶっていったら、近所の子供達に冷やかさ れたため (APENKWA BRIDGE No.5 ョーョーとか) 頭にきて,けずり とったとか。しかし私はミーティングで「ヘルメットは飾っておくためで はなく、あなた方の身を守るためであり、それにあなた方自身は決してあな た方自身の体ではない。妻子及び家族があるではないか。けがをしたり片輪 になったらどうするのだ」と言って注意しているが、あまり効きめがない。 私は毎月ヘッドオフィスへ進捗月報と施工子算(Construction Budget) 計 画表を提出しているが、オーバータイムス(超過動務)が毎日普通の労働 者で2時間、大工、鉄筋工で3時間、それに土曜日50%、日曜日100% 増しで 賃金支払いをしており、それに1ヵ月27日計算でやっているので、おかしな ことをしているとクレームをつけて、タイムキーパー及び仕事節にかけあ ったが、ガーナ全域でこういうシステムだと言われては、どうしようもなか った。賃金に関しては、もともと最低賃金が安いので、私としては土曜、日曜 の作業中止には賛成だが、彼らの生活も考えると目をつぶらざるを得なか った。ところが革命以後、これらのオーバータイムスや土曜、日曜の作業 が禁止されたので彼らの給料は今までの半分になってしまい、いかにコン

トロールプライスとはいえ、前より生活が苦しくなったのが実情である。ち なみに6月の革命以後、貸金は30%上がった(一般労働者約6セディ=420 円。大工、鉄筋工8セディ=560円)。6月に入って現場事務所に行ってみる と、見知らぬ男がきていて「Who are you?」と質問すると、「私はここへク マシの現場から転勤してきたんだ」と General Manager の紹介状を差し 出した。何の前ぶれもなくやってきたので驚いてしまった。いろいろ聞く と、彼はクマシの工科大学を出ており、年齢は私よりも1つ下(30歳)で、 ここの現場のアシスタントエンジニアとして哲楽現場を勉強したいとのこ とだった。いわゆる現場見習いというわけ。とにかく、それでは彼の机か - ら手配しなくてはと思い、昨年このプロジェクトがスタート するに 当っ て、現場事務所用の私の机と本棚、イスを S.C.C. 本社の家具製作販売部 に往文し、お金も払いこんだが、イスを8個受け取っただけで、あとの机 と本棚は受け取っていなかった。そこで1年半たった今,その机と本棚を 彼用に当てるべく。どうしても必要だからすぐ持ってくるよう General Manager 代行 (General Manager は休暇を 1 ヵ月とっているので……) - に申し入れた。彼は気分の悪い男で我々の話が終らないうちに、なんとも 言わずに逃げて行ってしまい、私はムッとした。それまでたびたび交渉し ていたが、いつも「after two weeks (2週間後)」と言い、いつまでた っても埒があがらず、半ばあきらめていたが、私の部下の Mr. ABEKAも こうした彼の態度に怒ってしまい、その日の午後彼と一緒に再度 General Manager 代行のところに行って「もし今日よこさなければ明日の朝ま でここで座りこみを続ける」と言って頑張ってくれた。そこで私がすでに でき上がっているセールス用の家具(机と本棚)でいいから欲しいと言っ たところ、前回、これはすでに売り渡し先が決まっているからと言って断 わられた机と本棚を、しぶしぶ引き渡した。お金を払いこんで1年半たっ ても受け取れないような取り引きは初めての経験である。とにかく、今度き 、たアシスタントエンジニア(Mr. GUNU) は以前 KONOGO というとこ ろの Project にいたので、協力隊員の高江君や近くのセカンダリースクー ルにいる石見君達をよく知っているとのことだったが、驚いたことに彼は 何も持ってこず、参考書もなければ製図用具、計算機もコンペックスも持っ ていなかった。 それにサンダルばきできているので、 これがニンジニアの 姿かと思うとガッカリした。しかし、せっかく転勤してきてくれたのだか

ら、私の Engineering を彼に教えようと努力している。とりあえず駐在員 の平川さんから計算機をゆずっていただき、私の2つある作業靴を1足や って,働きやすい格好にし,今まで私が受け持っていたいろいろな本社への レポート関係を,なるべく彼にやらせるようにしている。それから合い間を みて測量屋(29歳)とトレーサー(35歳)を教育しているが、なにぶん私の Vocabulary が少ないので、アクラボリテクニックで測量を教えている白 ・井沿から参考書を借用し、それに市内で売っていた参考書を私が援助して 買わせ、勉強させている。ただ彼らはすぐに高度なテクニックにとびつこう とするが、彼の基礎知識に若干疑問があったので、試しにピタゴラスの定理 を質問したところ、全然できずびっくりした。それに分数計算をさせたら、 これもだめでガッカリしてしまったが,そこで,難しい測量技術に入る前に **簡単な数学から教えている。おもしろいことに現場事務所のウオッチマン** の1人 (22歳) はセカンダリースクールを出ているので、彼らより賢いの で,彼を本社へ推せんして測量屋にして使おうとも考えている。ただ,こち らでは仕事を系統立ててやるわけでなく、みんな部門別に分かれていて、 それぞれのコミュニケーションがないため、何かミスが起こると、お互いに 責任のなすりあいで,すぐロゲンカが始まり,ガッカリする。コンクリート 打設時のスランプテストにしても、全部が全部私が手を下してはいけない ので、現場監督チームとラボラトリー(実験室)の人間にまかせておいた。 あとで強度テストの結果が思わしくないところが出てくると、彼らはお互 いに lazy (怠け者) だと責任のなすりあいをする。仕方なく私が途中から 本限を入れてタッチすることにした。セメント:砂:砂利(1:3:6) (1:2:4)(1:1½:3) と、このようなミックスで打つコンクリート のスランプテストは重大な意義をもつ。ラボラトリーの人間を呼んで現場 監督チーム (Senior Works Superintendent, Works Superintendent, Foreman) にやり方を教えてやり、ラボラトリーの人間がいない時は、あな た方がやらなければいけないと言って即かせた。現在、ガソリン不足でト ランスポートの関係がうまくいかないので、先日試しにコングリート打設 - 時に実際に彼らにやらせたが、全然できず、またまた気落ちしてしまい、私 よりはるかに年上の彼らに、厳しく気合いを入れた。「何から何まで私に類 っていては、あなた方はいつまでたっても進歩しない。そんなことでは私 - が帰国したあと、他のエンジニアがあなた方をみた時、私としては非常に恥

しい」と言ってやり、できるだけ彼らを中心としてプロジェクトを進めて いきたい旨伝えた。それから、もうじき下部構造が完成して、いよいよ上部 構造に取りかかるわけだが、困ったことに上部構造と下部構造をつなぐシ ューのペアリングパッドを購入する金(約6,000 \$)が S.C.C. にないといっ てもめている。この問題は私がこのプロジェクトの始まった昨年の4月頃 からずっと言っているのだが、今もって解決せず、9月末に手に入らない と、上部構造の施工に重大な支障をきたすだろう。 最悪の場合、11月末の最 初のコンクリート打に間に合わなければ、私としてはせっかく4ヵ月任期を 延長したのが無意味になるわけで、また幹部のやる気があるのかないのか も判断しづらく、意気消沈している。すでにインポートライセンスは持っ ているものの BANK OF GHANA がいろよい返事をせず、それに、こ の革命騒ぎでまたまた滞り、どうなるか見通しがつかない。もっとも、こ ちらにきて思ったことは、確かに我々は2年間という契約できているわけ であり、期間中にどうしても、というふうに考えがちであるが、宏くて、 資材がなくて,ガソリンがなくて,食物がなくて,外貨がなくて,のない ないづくしの国においては、日本なら1年のプロジェクトでも、こちらで は5年かかっても10年かかっても仕方がないということである。私の考え も、だんだんガーナふうに変わってきたようである。しかしそうは言って も、せっかく4ヵ月延長したのだから、ペアリングパッドが入手できしだ い,片側橋梁をコンクリート打設できるように段取りだけはして,帰国し ようと考えている昨今である。

追記:あと残された私の任期は半年なので、帰国するまでに S.C.C. 本社に英文のレポートを提出し、私の行なってきた活動、エンジニアリングについて S.C.C. の現場監督連中を1回集めて講義し、協力活動のしめくくりにしたいと思っている。体の調子はこの2年近くに2回ほど悪質な下痢をしたが、肝炎、マラリアにかかることなくきたので、なんとか最後まで持ちこたえそうだ。昨年の9月以来始めている週2回(火曜日と木曜日)のソフトポールの練習は協力隊員の安江君との間で、まだ続いているので、運動不足と欲求不満の解消になっていると思っている。

隊員時代を振り返って

元 岛 通 夫

帰国して早、5ヵ月がたってしまった。現在の職場に復帰して、現实の世界に埋没していきつつある自分に、時々協がゆくも感ずる。しかし、だんだん日がたつうちに、ガーナの協力隊員生活は違く夢の世界に押し流されつつあると感じる。語学訓練も含めて足かけ3年の隊員生活、それがはたして私にとって一体何であったのか。同僚と比較すれば技術的な遅れを余儀なくされ、そして今、生活設計等に、いささかとまどいも感じる。

しかし、とにかく微力ではあるが、ガーナの国づくりに、大げさに言えば 人類の平和と発展のために寄与できた、という事実。国が私に与えてくれた チャンス、そして国鉄の同僚並びに上司の方々の暖かい御配恵、御支援は、 感謝に耐えない。考えてみると、私のいい加減な英語で恥しげもなく、 S.C.C. 本社の幹部相手と渡り合い、現場スタッフ、労働者あわせて100人か らなる橋梁現場の作業所長として2年半、頑張れたことが不思議にも思える。 これは、若さゆえ、体力があったからこそできたことか、また私の仕事にか ける情熱というか意気込みを S.C.C. 本社幹部がかってくれたからこそでき たことなのか。

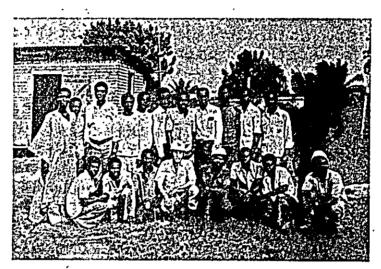
今だからこそ笑って話せるが、3年前の11月1日、S.C.C. にひとりで勤め始めた頃は、右を向いても左を向いても、真黒い人たちばかりで、心細いことかぎりなかった。自己紹介を受けても皆同じ顔に見えた。それに彼らの話す英語は独特のなまりがあり、かつ私の下手な英語は全然通じず、目を白黒させるばかりだった。そんなわけで、半月間は食事もノドを通らず、ひどく悩んだものだった。しかし、ある程度開き直ってかまえると、気分的に楽になった。自分なりに言葉の壁を乗り越えると、仕事も、生活もおもしろく、愉快に過ごせるようになったと思う。元来、私は体があまり丈夫ではないので、健康には気をつけた。おかげで、隊員諸氏がマラリア、肝炎で倒れる中、1、2度、悪性の下痢はしたが、別に何ともなく過ごせたということは、運がよかったとしか言いようがない。

2年半の隊員生活を終えて、首都アクラを発つ前に、 S.C.C. 本社幹部と

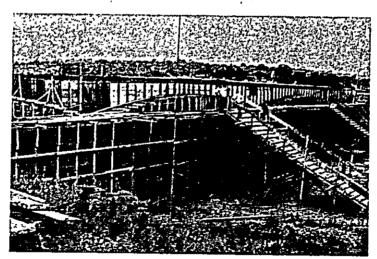
現場スタッフ並びに労働者諸氏が散けてくれた送別会がそれぞれあり、とりわけ婚しかったことは、私がガーナに、そして S.C.C. にきてくれてよかったとスピーチしてくれ、それに業績をたたえて、摘染ができ上がったあかつきには、私の名前をゴールデンプレートに刻んで残そうというスピーチもあったことだ。

2年半の隊員生活では、すさまじいインフレで諸物価も高く、生活も苦しい中で明るさを失わないガーナ人に、技術的に教えることよりも、人間的に教えられるほうが多かったようにも思う。今まで人に仕えていた私が、ガーナでは逆に、人を使う立場にたってマネージメントさせていただいたことは、私の物事に対する見方を大幅に変えさせた。それまで日本の職場で、ごく普通に行なっていた行為が、時としては恥しく反省させられることも多々あった。

英語を使わない生活に入ってしまって、だんだん忘却の彼方になりつつあるガーナ。しかし協力隊員生活の中で、せっかく覚えた英語を、これからも忘れないように、高めるように努力し続けたいと思っている。そして隊員時代の情熱を、理想を、体験を、けっして忘れてはいけない、と感じている昨今である。



1979年12月,現場スタッフと



後任の浦上隊員から送られてきた写真1葉。 その後の橋梁工事の進抄状況

元島隊員の報告書を読んで

坂 本 健 次

元島隊員の場合は、やや特殊なケースに属しているといってよいであろう。State Construction Corporation (S.C.C.) の現場の所長として、かなりはっきりした業務役割と権限を与えられており、やらなければならない役割は、はっきりしているといってよい。したがって自分は何をなすべきか、どのような立場にあるのか、については、あまり悩む必要はない。

担当している工事の内容も、道路のインターチェンジにおける橋梁工事であり、規模も4径間連続鉄筋コンクリートT桁橋(延長60m、幅員15m、上下線2橋)とまずまずのもので、日本国内においても同程度の規模の工事は結構あるといってよいほどである。

したがって、現場の所長としての役割については、日本国内工事の場合と 同種のものであり、国情の違いによる仕事の進め方、能率、工程等が大きく 異なる以外は、業務の内容は似たようなものであろう。

そこで、このような役割をうまくこなしていくには、日本国内における同様な工事の現場経験も必要であるが、国情の違いにより発生するいろいろな問題に対する応用能力が備わっていなければならない。

なお組織の長ということになれば、適当な権威と、それなりの協調性を兼 ね備えていなければならず、適当なパランスのとれた性格の人物が要求され るものである。その点、元島隊員は日本国内における現場経験といい、その 応用力のある性格といい、S.C.C. の業務には適任であるというものの、その 努力には敬意を表したい。元島隊員は業務の区切りをつけたいという理由で、 任期の延長を行なっている。

協力隊員の気持ちとしては、2ヵ年間の任期中に何らかの仕事の上での区 切りをつけたいと思うのは当然のことといえよう。しかし任地における2ヵ年間は、日本国内でいえば半年間ぐらいに相当する程度と考えればちょうど よいようであり、よほどの区切りのよいことがないかぎり、任期を延長して も、結局のところ五十歩百歩になりかねないようである。

そのため、なんとか一区切りを、という考え方にあまりこだわらずに、任

期中にできるだけのことを一生懸命やるという考え方をする方が、よいので はないかと思われる。

なお元島隊員は日常生活においても貴重な体験をしている。すなわちアフリカの国ならではの出来事、クーデター、通貨切り換え等、日本国内ではとても出くわすことのない事件に巻き込まれたわけであるが、これらの貴重な体験も一歩間違えば生命にかかわることにもなりかねない問題であり、協力隊としては重要な問題である。隊員の安全の問題は、いくら考えても十分すぎるということはない問題である。(協力隊技術専門委員)

活動の経過とガーナに対する私の愛情

派 遺 国 ガーナ 52年1次後期組

联 種 土木施工

氏 名上野 勝 美

配风先 Tema Development

Corporation, Tema

-上野隊員の路歴

氏 名上野肠萸

生年月日 昭和27年1月1日

出身県長野県

職 積 土木施工

派遣期間 52年10月~54年10月

1. はじめに

いろいろと書きたいことがあるような気がするが、いざ机に向かってみると語句が出てこない。何か書くと、些細なことを誇張して書いているような気がして、後から読み返すと、白々しくなったりする。しかし、自分の気持ちを整理するためにもレポートは時折、掛かねばなるまいと思う。

派遣前の訓練中だったか、それとも赴任してからだったか、よく覚えて いないが、"若い力"(現在のクロスロード)の中で、ある隊員OBが自分 の経験から「真の協力活倒」について述べている印象的なレポートを読んだ ことがある。「真の協力活動とは、相手のやってもらいたいことを理解し て、彼らの技術、考え方を尊重しながら、それの成就のために共に汗を流す ことである」と、彼は主張していた。私はこの考え方に非常に感じ入って、 これを私の活動の其髄にしようと努めてきた。そして、1年と数ヵ月を経 た。私は今、ある種の挫折を感じている。私なんかの1つの捨て駒の力では、 どうしようもない深い堕落と腐敗が、そこらじゅうにはびこっている。相手 が本当に私にやってもらいたいことが判らず、ジレンマにおちいっている 自分を感ずる。T.D.C. のほとんどのエンジニアは、ハイ・オフィサーであ るばかりでなく, コントラクターでもある。つまり、 T.D.C. のエンジニ アとして自分達で勝手に子算を組んで, 子算の判っている入札を自分達で して、自分の会社の労働者がそれを施工するのである。むろん、彼らは安 立っては入札者として名のり出るわけではなく、各人には得体の知れない 数名の『取り巻き連中』がいて,彼らが頻繁に T.D.C. に出入りしている。 ビッグ・マン面をして。こんな馬鹿な話が、どこの世界にあろうか。

ちょうど去年のクリスマスの直前に、1人のエンジニアが泡をくって私のオフィスに飛びこんできた。「何事か?」と言うと、「Mr. 上野、急ぎの仕事がある」と言う。事情を詳しく聞くと T.D.C. でブルドーザーとグレイダーとをコミュニティ10の道路掘削のためにリースしたが、今になって、その道路がまだ設計されていないことに気付いたと言うのである。マンンはいつくるのかと尋ねると、1週間後だと言う。道路延長は?と言うと、約1マイルだと言う。図面は?と言うと「何もない」。つまり測量からしなければならない。私もその時、新しい割り当ての仕事に取りかかったばかりだったので、中断されるのは不本意だったが、ブルドーザーとグレイダーを1日

無駄にしたら、軽く1万セディのロスになるし、こいつは私の腕の見せどこ ろだと,翌日からその仕事に取りかかることに同意した。さて翌日,徐って も待っても、労働者と私と測量器具を運ぶための車がこない。今度はこっち が泡をくって彼のオフィスに行くと、「トランスポート・マネージャーには 連絡したんだが……」と口ごもる。私もその時までにはすでに、T.D.C. の ほとんどのローリーはいわゆる白タクとして活躍しているのを(それでの 収入は、どこで、どう処理されているのか知らないが)知っていたので、「そ れなら機械をかついで歩いてでも、やってやる」と窓気込み、同低達を必死 で説得して、歩き歩き、なんとかその仕事を終わらせることができた。さて、 ブルドーザーとグレイダーが到着して稼働し始めた。私も私の同僚遠も、 とにかく、1つの仕事を終えた満足感で一杯であった。ところが2、3日 * 後,マシーンがなくなった。仕事も中途半端なままである。エンジニアに △駅を聞くと,リース会社が他の所にマシーンを回したと言うのである。脐 *に落ちないまま同僚に訳を話すと、彼は笑いながら、こう質うのである。 「T.D.C. の仕事で完成したものは1つもないのです。すべてが中途半端で うやむやに終わってしまうのです。それに、あの仕事が急務だったのは、全 部ではなく、ほんの数百フィートだけだったんです。その数百フィートがメ ・イン・ロードから、あるビック・マン(彼はソルジャーだという)の家へのア クセス・ロードとして必要だったのです。それと、もう1つ、あなたに仕事 を押しつけたエンジニアの新築ハウスの予定地が、ブルドーザーとグレイ ダーできれいに均されていたのに気がつきましたか?」。 こんな馬鹿な話 が、どこの世界にあろうか。今でも草ぼうぼうのやりっぱなしの現場を見る と、私は泣きたくなる。そして「これが彼らが本当に私にしてもらいたい "ことなのか」と悶々として考える(蛇足ながら、かのエンジニアは2月末 ; 日で T.D.C. をやめてしまった。 遠か本当か、彼は T.D.C. からの建築用 地割り当てを獲得したので、もう T.D.C. で倒く必要はないという)。

マネージメントがこんな具合だから、ジュニア・オフィサー達がどんなであるか、推して知るべしである。 すべての人間が、そのポジションをうまく利用して、なんとか銭をかせごうと必死になっている。例えばドラフト・メン。 彼らは T.D.C. の道具を使って、T.D.C. のためには働いていない。 そこの技能を活かしてプライベート・ワークに積を出している。私などが自分のごやった設計のスケッチを持っていき、トレースを頼んでも、何ヵ月も埃をか

ぶったままである。彼らにしてみれば、そんな1銭にもならぬ退屈なトレースをするよりも、ブライベート・ワーク捜しに血眼になった方が、はるかに生きがいを感じるようである。プライベート・ワーク1件完了すれば、仕事にもよるが、相場で約500セディ(35,000円)が要求できる。それが収入としてコンスタントに入れば、1本560円にもハネ上がったビールも飲めるし、1箱700円になったタバコもすえるのである。そして恋人にも月々何ほどかの"手当て"を払える(この国の恋人関係というのは変わっていて、男は女に何ほどかの金銭か贈り物かを与えなければならないようである。だから、その人の恋人の数を知れば、その人の経済的地位が判る。そして女も、それを当然の権利として要求する。私にしてみれば、それは金の切れ目が緑の切れ目、女はすべて金で買われる売春婦のような妙な気がする)。例えばパーソナル・オフィサー。彼も決して自分の地位を無駄にはしない。ワーカーから出される路々の背類に本人からの賄賂がない限り、決して背類を次のセクションに回しはしない。ワーカーにしてみれば、それが急ぎの要件であるなら、泣く泣く、幾らかの"袖の下"を出す。

2. プライペート・ワークの問題

私は経済のことはまったく判らない。ただ言えることは、給与水準の低さである。T.D.C. の場合一般ワーカーの平均貸金が月に約200セディ(14,000円)程度である。前述のようにビール1本560円、タバコ1箱700円の状態の下でである。確かに T.D.C. から与えられる給料では、とうてい生活していけない深刻な現実がある。極度のインフレと、200%強の最近の幣価の切り下げで、生活必需品のほとんどが(輸入品であるために)係数通り値上がりしている。そして軍事政権はインフレを抑えるために給与体制の現状維持を強行している。それは正しいかもしれないが、それでは彼らは食べていけない。それが彼らをブライベート・ワーク捜しに血限にならせている。彼らは決して怠惰でもないし無能でもない。事実ドラフト・メンなど、朝は定刻前から、時には昼食時間も、せっせと働いている。そういった現状を知れば知るほど、ブライベート・ワークなどやめて、会社の仕事に精を出したらどうか、などという偽善者ぶったアドバイスは私は口が裂けてもできない。正直なところ、今は幣価切り下げで、我々の手当ては750セディ位になり、かなりぜいたくもできるようになったが、その前は300セディ位で、こ

れは"1人で生活できる最低限の額"であったと思う。彼らは1人ではない。家に帰れば、まず4,5人の子供と斐がいる。200セディの給料では、とうてい生きていけないのである。金はどこかに集まっているはずである。事実、ガーナには、得体の知れないビジネス・マンやビジネス・ウーマンが、うじゃうじゃしている。彼らは車を2台も3台も持ち、豪華な家に住み、まったく何不自由なく暮らしている。一方では、一般労働者が1枚の衣料を買うのに長い長い行列を作っているというのに。ここまで考えると、あとは社会の上部構造に属する一部の連中の無能さとミス・マネージメントを叱責するしか考えようがないと思う。そして、それは根深い問題であり、即座の解決策なぞ見つけようがないと思う。

さて,それではこの現状を踏まえて,協力隊員として、どういったふうに 活動を展開していけばよいのか。私はここに1つの選択があると思う。道は 幾つもある。1 つにはまったく仕事をしないこと。 そうすれば, 切羽詰まっ た仕事を押しつける相手がいなくなるので、彼らは自分達でそれをしなけ ればならなくなり、渋々でもやるだろう。しかし、それでは何のために私が アフリカくんだりまできたのか判らなくなる。またもう1つには T.D.C. の組織をまったく無視して徹底的に自己満足を追求する方法。仕事も自分 で選んで、他の人が何と言おうが耳をかさず、そのプロジェクトのために 働くこと。プロジェクトが大きければ大きいほど、自己満足度も大きなも ・のになると思う。私自身、一時、この考え方に傾いた時がある。しかし段 近、これではいけないと思うようになった。これではあまりにも一方通行 - である。自己満足を得つつも,何か組織の改善に通ずる方法を暗中模索す べきであると思う。例えば T.D.C. の組織自体にも様々な問題がある。マ ネージメントの無能さはさておいて、エリート官僚と一般ワーカーの隔た りの大きさ。大卒のエンジニアなどはジュニア・オフィサーなどを頭から 馬鹿にして、技術の伝達など、まったくない。これはあながちエリート達 だけの責任ではあるまいと思う。ジュニア・オフィサー達にそれを受け入 れる覇気がないのと、また3角形の内角の和なども知らない教育レベルの 低さにも問題があると思う。根気のいることで、即座の効果など期待できな いだろうが、エリートとジュニアのパイプ役になることも1つの組織改善 につながることと思う。私はこれから残された数ヵ月間、できることは自分 の能力内で、何でもしてやろうと思う。つまらぬ日本人的感情を捨てても。

3. 賄賂について

この件は、単に表面のみを考えるだけでなく、ガーナ人の国民性というか、伝統的なメンタリティを知らなければ、論じられないと思う。次頁に、ガーナ人によって書かれた、ガーナ人の伝統的メンタリティについての新聞のスクラップの一部を掲げてみた。

かりに、この新聞に述べられていることが、彼らの賄賂に対する本質的な考え方を反映しているとすれば、私も、ワーカーの私へのサービスの後、何らかの形で物質的に感謝の意を表さればならぬと思う。かりにそれがオフィシャルな仕事であり日本人的感情に逆らうことでも、ましてや最近の幣価切り下げで、私は彼らの3~4倍の高給取り(T.D.C. のマネーシング・ダイレクター並み)にのし上がってしまった現状を考えれば、それをしない方が間違っているような妙な気になる。

私は日本を離れて1年と数ヵ月、言語も文化も異なる西アフリカの一小国に住みついて、今"日本はなんて素晴らしい国だろう"と確信をもって言える。それはロマンティックな感情からでも、ノスタルジアにかられて、そう言うのでもなく、現実に、この国に起こっている堕落と不合理さを見て、そう思うのである。

ほとんどのガーナ人が、とくに社会を担うべき青年達がリベリア、ナイジェリア等の"金のある国々"に移住を希望しているし、また現に多くの人が移住している。そして、ほとんどのガーナ人が現在のガーナを自嘲して言う口癖、「OH! GHANA! GOD BLESS THIS COUNTRY!」。リベリア、ナイジェリアにいるガーナ人達は、「ガーナはなんて楽晴らしい国だろう」と思っているのであろうか。これは私には判らない。が、1つ言えることは、彼らはそこで働く方が、より多くの金を得られるし、豪華に暮らせるということを知っているということ。だから、移住を希望する青年達が後を断たないのである。とにかくガーナは騒然としている。すべてがちぐはぐである。日本の"鹿鳴館時代"に新幹線を走らせ、コンコルドを飛行させているような、ちぐはぐさが存在している。

彼らが彼らの母国のことを"なんと素晴らしい国だろう"と心から叫べるようになるまでには、まだたくさんの無名の捨て駒の努力と年月が必要であると思う。そして何よりも、最終的には彼ら自身が目覚め、母国建設のた

GHAMAIAN MENTALITY

- Extraction from "DAILY GRAPHIC", a popular newspaper in Ghana.

lar newspaper in Ghnna. —

Over the past few years, I have had the magging feeling that the invidious and typically indigenous phychological phenomenon called the "Chanaian Kentality" with its devestating socio-economic effects which appeared to have plateaued for some time is on the ascendancy again. I am not alone in this feeling. Quite a few people who have unknowingly come to accept the Chanaian mentality as a standard behaviour just shungged it off when I voiced out my fears saying: "Well, what do you expect under this circumstances."

About six years ago, one krs. Enud Kordylas, inan excellent analysis published in the "Graphic" on what the Ghanaian mentality is all about gave us a clear insight into this social canker. She wrote——

"Chanaian mentality is a way of going about things in Ghana and it is acquired through a well known but unwritten method. It starts when a few Chanaians start doing something which the majority frown upon, complain about; but do nothing about it. Gradually more and more people join in the act. The framing on the act becomes less while the homplaints begin to die down, kore and more people still join in while fewer and fewer frown on it. The rest stop complaining and start accepting the act as the way it is done in Ghana. The final stage is reached when the most Ghanaians start accepting the act as a Ghanaian way of life and anyone who does it at this stage can be excused because this act has been accepted and has been granted a status under the known as "GHAMAIAN KENTALITY".

"From the way I see it, the whole phenomenon began in our days—the

"What you call bribe has no equivalence in our local language. It used to be actually a "thank you", dash given to comebody after a service had been done, but the modern society has turned the simple customary gesture into an obligatory act."

めに汗を流すことが必要であると思う。そのために我々協力隊員の地味な、 そして些細な手伝いの積み重ねが必要であるし、より多くのこれらの人々 に"日本を見てもらう"といった国際交流の場が必要であると思う。そして、 今、私にも、おぼろげながら真の協力活動というものが判りかけてきた。

日本人の美質が「心恋気に感じ入る」ことだとしたら、ガーナ人のそれは「案朴さと従順さ」だろうと思う。都市を離れて農村に住みつけば、伝統的な彼らの美しさにもっと触れることができたのに、と思う。急激な現代化と都市化に揺れる彼らの心情。彼らのこれからの大きな社会問題となるであろうことの前兆に、テマという都市に住んだがために、触れることができたような気がする。仕事のメドがつき次第、あちこちの農村地帯を旅行したいと思う。

いろいろとむいたが、私にはガーナ人を軽蔑する気もないし、また侮辱する気など毛頭ない。その反対に、彼らの素朴さと知性を知るがゆえに「こんな馬鹿な話が」と嘆くのである。見方を変えれば「こんな馬鹿な話」がまかり通っている現情であるがゆえに、我々の些細な努力も、やりがいのあることであるし、それだからこそ面白いのだとも思う。

"協力隊員らしい解決"であったかどうか、いまだに疑問であるが、なんとか輸送の問題にも片をつけて、今、最後の業務割り当ての完了をめざして努力している。前回のレポートの通り、技術的な問題は多くはないと思うが、面積の広い地域なので、測量に相当の期間を見積らなければなるまいと思う。が、預季を前にして、少々焦っている。このごろである。

4. 『ボランティア』に関わる言語の遊戯無用論

たまに少し良い服を着て、少し豪華なレストランなどに入って、100セディ近くもする食事をすると、何かもやもやして嫌な気持ちがすることがある。「ボランティアである私が、こんなことをしてよいのか」とか「ボランティアらしくないな」とかいう考えで、頭の中が一杯になる。入除以来、私の頭の中に拉えついた"ボランティア"という漠然としたイメージが音を立てて崩れるような気がする。 ぼんやりとした頭で再び"ボランティア"のイメージをつくろうと試みる。 そして言葉の遊戯にすぎないことを感ずる。

ある所に大富豪のせがれがいる。彼は冒険好きである。アフリカにきて 2,3年住みつき,自己の能力の限界に挑戦しようとして,その国の人々のた 、めに働いている。もちろん、すべて費用は自分で負担する。 彼は金があるか ら車を買うかもしれない。毎晩、カジノやディスコに出向くし、豪悲なレ ストランで食事をするかもしれない。そんな彼を、人は「ポランティアらし くない」と言えるであろうか? 否,彼は立派なボランティアである。自 発的に渡航を決意し、その国の人々の役に立っているのである。協力隊とか ピース・コーとか組織を利用しない一匹狼のボランティアである。"ボラ ンティア"も原点に立って考えると、"自発的に、誰にも強制されずに"だ けでよいのではないかと思う。1つだけ肝心なことは、彼はボランティア ではあるが、"協力隊員らしくないな"とは言えると思う。彼が民衆志向を 忘れ、己れの欲望のままに豪勢な暮らし方をするのであれば、協力隊員ら しくないと言える。協力隊員は民衆志向をその精神とする。しかし、この "民衆志向"もゆき過ぎると気負いが生じ、独善的にならぬでもない。よ く考えてみると、上は大臣から下は乞食まで、1人々々社会を形成する民衆 の一員なのである。要は極端を排し、独善を排することであると思う。上 は大臣から下は乞食まで、高級レストランから1個40ペソワのケンケンま ′で,ナイトクラブから居酒屋まで,より多くの人と,より多くの物と接し,今 この国に何が起ころうとしているのか、あるいは起こったのかを見極める こと、これが民衆志向であり、協力隊の指針とするところではなかろうか。 そういう幅広い人,物との接触を通じて,それでは,自分なりに,どんな活動 ができるかと模索する、それが協力隊精神であると思う。訓練中の"ポラ ンティア"に関する講義で、ある講師がボランティアを ordinary. good. better. best などと分類されていたが、あまりにも結果論的な言語遊戯で はあるまいかと思う。

5. 協力隊民衆志向の障害

より多くの人、物と、より深い接触を試みるためには、隊員個人の持つ 性格、人柄、価値観が大きく影響するであろうが、それ以前に、根本的な 問題としてあげられるのは意志の伝達が容易に行なわれること、すなわち 語学能力が高いということが必要であると思う。同じことを聞いて、その 場で理解できる人に比べて、ひと月たって、ようやくわかるようでは、苦 しみのみ多くて、実りの少ないことになりはしないだろうか。我々が協力 隊員であろうとなかろうと、他国で、ある期間活動する場合、相手が日本 語を理解しない以上、その国の首語もしくはフランス語、英語を話すこと を強いられる。そして、それは日本人の最も苦手とするところである。

カタコトの英語で、流暢な語学能力を持つ生徒遠の前に出て、何かを教えようと涙ぐましい努力をする教師隊員。それは日本人の側からみれば、ロマンもあり、やりがいもあるかもしれないが、その国の人々にとってみれば"侮辱"されていると、とれはしないだろうか。 想像してみよう。かりに日本の高校に、ある外国人教師がきたとする。彼はカタコトの日本語で何かを教えようとする。 生徒が質問するたびに「エート、エート」と考え込む。こういう状況では P.T.A. あるいは教員組合が結束して抗議し、彼を追放しはしまいか。

誰でも1年目の後半ぐらいから英語の生活に慣れてくる。しかし、前半の1年間は、ガーナが日本人ボランティアにトレーニング期間を与えてくれるからと、その厚意に甘んじて現状を持続していいものだろうか。これは何も協力隊や隊員の責任ではなく、日本の英語(外国語)教育の根本的な欠陥であると思う。国際舞台に登場した場合、ガーナの人の方がよほど "国際人"らしいふるまいを見せるのではあるまいかと思う。協力隊も生後十余年、"ボランティアとは"などの言語遊戯を卒業して、真に実りのある活動の根本的な要素である外国語教育の改善案等を提出すべき、国内でも前進的な組織になり得るだけの実績をあげてきているような気がする。思えば協力隊事業は、途上国の自立を促し、開発、発展の意図を達成できれば、即廃業という皮肉(?)な目的をもった組織である。隊員の言語障害を克服できたら、失礼ながら、ピース・コーや他国白人ボランティアの偽善めいた活動に比べて、日本人の動勉さと心意気を活かした"一味違った"ボランティア組織として、その活動は開発途上国のため真に貢献するところ大であると思う。

6. ガーナに対する我が愛情の限界を感する時

赴任以来、いろいろなことが、たて続けに起こりすぎた。アチャンボン政権とアクフォ政権の崩壊、ほぼ2週間にわたったテマ、アクラの断水、通貨の切り換え、ローリングスのクーデターなどなど。かりに肉や砂糖なんかなくても、生活にそれほど不自由は感じないが、タバコがないと、本当に困る。燃料の残り少ない単車を乗り回して、1箱のタバコを捜しに出かける。

運よく捜し当てると, 涙の出るほど嬉しくなる。 タバコはあっても, マッチ のまったくない時さえもある。「日本に帰ればセプンスターがいつでもすえ るなあ」、「日本に帰れば、ビールをたらふく飲んで、ちゃんこ鍋が食えるな あ」などと思う。思いながら、そう思っている自分が付けなくなる。前向き のように扱ってはいても、顔は日本を向いている自分を感じる。タバコがな くても何がなくても断水でシャワーもあびず,臭い服を着ていても, 「どう せ730日だ。俺には日本がある」と聞き直れるから、どんなことが起ころう と、つまるところは彷観者の域の内にいる。ガーナの生活は厳しいと何回も レポートに出いた。しかし、実際私がもしガーナ人であったら、口に出せ ないほどの厳しさを経験するだろうと思う。タバコも駐在員の平川さんや 大洋漁業の人々に分けて貰える。私には逃げるところが残されている。ガ ーナ人には、ここしかない。ここしかないが、彼らは決して悲観的でもな いし、深刻でもない。今日家族全員が腹一杯ケンケンを食えて、ぐっすり 眠れれば、それでよい。明日のことは、明日考えよう。明日が駄目なら、 きっと叨後日には,という思いで過ごしている。そして「イエ・ダ・ナミ ・アシ(神に感謝しよう)」である。生きる違人のような気がする。私は逃 げるところがあるくせに、彼らよりも多く不満を言うし、数多く腹も立て る。「お前はガーナ人よりもガーナ人らしい」などと人々に言われるたびに、 730日という枠の内で、日本という基盤に立った、ガーナとガーナ人への 受情を感じるのである。

7. アンフォエガにて

世界第2の人造湖ボルタのほとりにアンフォエガという町がある。家の造りが、材料こそ違うが、日本の地方独特の何とか造りというのに、どことなく似ている。コの字型になった造りである。母屋から数メートル離れてボッンと便所があるところなども、日本の田舎の家の造りを思わせる。コの字の内では、今、内儀さん連中が、私をもてなすためにフーフーをついている。材料こそ異なれ、日本の併つきを思わせる。ケロシン・ランプの明りの下で、カラバシに一杯の新鮮なパーム・ワインを飲むと、私の田舎に帰ってきたような錯覚を起こす、土間に目をやると、地蔵のような形をしたものが2つボッンと置かれている。ここいらの守護神であるという。ガーナに古くからある宗教というものは、日本の神道と非常によく似ていると思う。地域的な

遊いこそあれ、根本的なものは、いわゆる Admiration of the Nature と Ancestral Admiration だと聞く。こんなにも遠く離れたガーナで、日本の 文化との類似点を見い出したことは非常な驚きであった。パーム・ワインを 飲みながら、中国の古い諺を思い出す。「西洋は西洋、東洋は東洋、二者は絶 対に合う事はない (West is west, East is east, and Twain shall never meet)」。しかし、アフリカと東洋はどうかな、とフと思った。かつて暗黒大陸と呼ばれたアフリカ諸国と日本との本格的な交流は、つい20年ほど前に 始まったばかりである。日本人にとってもアフリカ人にとっても、まだまだお互いが得体の知れない奇妙な人種に違いない。私が2年の間にガーナの実体の何パーセントかを知り得たように、ガーナ人の若者にも日本の実体を知り得るチャンスを与えて欲しいと思う。

8. T. D. C. にて

やりたいことはすべてやった、という充実感がある。私がやったことなどは、ガーナ人でも誰でもできる些細なことで、彼らがやらないから私がしたという感じであるが、それもよかろう。いろいろな面でガーナ人から 学ぶことが多かった。今後の私の活動に生かせたらよいと思う。

政後に協力隊事務局の皆様、駐在員の平川氏と御夫人、調整員の金坂氏と御夫人、白木俊先輩はじめ隊員諸氏の激励と御指導、そして何よりもガーナ人達の思いやりと歓待で、2年間を大過なく過ごすことができた。深く感謝します。本当に、ありがとうございました。

日本に帰って考えること

上 野 勝 美

早いもので、光り輝くばかりの物資に取り囲まれた日本へ帰って、10ヵ月余りの月日が過ぎてしまった。協力隊参加以前に勤めていた会社へ復職することができ、「もう少し自分の専門分野の勉強もしたい」という希望も受け入れられて、現在、勤労学生の一員として、ややもすると、分刻みになるような生活を送っている。

事務局から、追記を書いてほしい、と依頼されて、久しぶりに隊員時代のレポートを読み直してみた。ガーナの国造りの手伝いをする。などという建て前とはうらはらに、実際には私の行なったことなどは非常に些細なものであり、滞在中に私のまわりに集まってきたガーナ人とその社会にかけた迷惑のほうが、大きいかもしれない。しかし私は、当時確かに張り切っていたという実感はある。なぜ、そんなに張り切ることができたのだろうか? やはり、自分のやっていることが、少なくとも「誰か」の、あるいは「何か」の役に立っている、という満足感があったのと、今、自分は生まれてかつて経験したこともない異文化の内にあって、自分自身のもつ能力の限界に挑唆しているのだ、という緊張感があったからだと思う。

協力隊活動というものは、その隊員のもつ能力次第で、とてつもなく「大きな仕事」――大きなお手伝いと言い直してもよいが――ができる可能性がある。そして、このことが協力隊の真の魅力であり、青年の心をかきたてるひとつの要素になっていると思う。ここで、私の言う「能力」とは、学問的知識だけを指すのではなく、経験、人柄、その他もろもろのことを包合した、いわゆる「人となり」の大小を意味する。協力隊員は、当然のことながら、自分の活動に対して報酬は求めない。が、しかし、人間として「大いなる満足感」だけは得たいと願う。

文章が非常に抽象的なもので恐縮であるが、「大いなる満足感」を得るためには、その人に「大いなる能力」が備わっている必要があると思う。そして、個々の「満足感」が、結果として開発途上の国の人々に理解され、客観的にみて、何らかの「お手伝い」をしている。と受け取られたならば、これ

ほど幸福なことはあるまいと思う。

そういったもろもろのことを考え、ともすれば無りがちになる自分の心を 叱我しつつ、自己能力の開発に努め、これからの自分の人生に、何らかの形 で協力隊での経験を活かしたい、と願っている昨今である。

上野隊員の報告書を読んで

坂 本 健 次

上野隊員は、協力隊員として現地協力活動をするにあたって、ある隊員OBの言葉――「真の協力活動とは、相手のやってもらいたいことを理解して、彼らの技術、考え方を尊重しながら、それの成就のために共に汗を流すことである」――に感じ入って、この言葉を活動の真髄にしようと努めてきたと報告している。

この考え方は、ごく常識的であり、一般的にみても、我々に対して説得力 のあるものといってもよいであろう。しかし上野隊員は1年あまりたった時 点で、ある種の挫折感を味わっているとも報告している。

これはどういうことなのだろうか。上野隊員が当初考えていたことが間違っていたのだろうか? いや彼の考え方に間違いがあったとは思えない。どこか現実との間に多少のずれがあったということであろう。

このずれについて考えてみたいと思う。それは、まず相手の問題である。 相手とは誰のことをいっているのか、これが、どうもはっきりしないようで ある。

上野隊員の場合、日常接触している相手は T.D.C.の連中であり、これらの連中が協力隊に対しての本当の意味での相手であるかということになれば、これは問題のあるところであろう。それは上野隊員のレポートの内容をみても、はっきり報告されているように、 T.D.C. の連中の考え方は、大筋においては国の方針にのっとっているであろうが、日常業務においては必ずしも国の方針が直接反映されているとは思えず、まして一般民衆の考え方とは何ら関係がないといってもよいのではないだろうか。したがって、これらの連中を相手だと思ってしまえば、結果は明らかで、挫折感しか残らないことになるであろう。

つぎは相手のやってもらいたいことについての問題である。これは相手が 誰であるかとも大いに関係するわけであるが、そのやってもらいたいことが 国のためなのか、一部分の組織のためなのか、あるいは単なる個人のためだ けなのか、そこらへんの見きわめは簡単ではないが、それだけに肝心なこと

以上のことがらだけでもはっきりしていないかぎり、上野隊員が悠銘した ある隊員OBの言葉も、意味のない言葉になってしまう場合もありうるわけ である。

上野隊員の、より多くの人とより多くの物と接して真の相手を見きわめよ う、という態度には賛成である。彼は協力隊員としての資質にも恵まれてい たようで、現地の生活にもよくとけ込んでおり、それだけにガーナ人と日本 人の本質的な相違点も理解しているのであろう。

語学能力の問題が提起されている。これは単なる技術上の接触の場におい ては、それほど重要な問題にはならないと思われるが、協力隊の業務は単な る技術上の問題だけではすまされず、その他もろもろのことが案外重要なこ とであるだけに、説得力のある言葉である。しかし語学の能力は必要である が十分条件ではなく、要はその人物の心の問題であろう。

結局のところ、協力隊員として任地で2ヵ年間過ごした結果、この2ヵ年 間が本人にとってどれだけ有意義なものであったかということが問題であ り、協力隊員にとって本当に有意義な年月であれば、それは相手にとっても **有意義であったということができるのではないだろうか。(協力隊技術専門** 委員)

国立職業訓練校における教育・指導

第6・7号報告番 (昭和54年10月31日) 昭和55年2月10日)

派 遺 国 ガーナ 52年2次後期租

氏名安江文二

配属先 National Vocational

Trainning Institute, Accra

安江隊員の略歴—

氏 名安江大二

生年月日 昭和26年5月26日

出身 県 岐阜県

職 種 板金加工

派遣期間 53年4月~55年4月

1. 中間技術を探る

11月初旬に催される。我が訓練所のセミナーと並行して、訓練成果を披露する展示会があるが、私の指導している板金・製造科から3点出品する予定である。これらの製作過程で、ずっと念頭に置いてきた中間技術との関わりを報告したい。出品作は次の3点である。

- 1) trunk box——日本では最近プラスチックなどにとって代わられているが、以前はプリキ製が主体であった衣装缶と呼ばれるものにあたる。
- 2) filing cabinet—— 事務用品、ファイル等を収納する引き出し式の 戸棚。 通常 3 段か 4 段の引き出しのものが多い。
 - 3) coal pot----木炭コンロ, 七厘の類い。

(1) trunk box

寄宿制の学校が多いので、学生のほとんどは日用品の迎換と保管に、このトランクを使い、住宅が租末な一般家庭でも貴重品などの保管に用いるため需要は極めて多い。したがって、供給のほうも小さな町工場(というより小屋に近い感じ)を中心にかなり作られているのだが、その形、構造が晒一的で、古くからある形を、古くからある作り方で作っているのを見て、改良の余地が多分にあると思ったのである。すなわち、より何単な構造、より使い易い形、より確実な加工法などである。もちろん、こうした条件を満たすことによって、耐久性が低下したり、材料が余計に必要になるようであってはならない。

さて、いざ取り組み始めると改良は至難の技であった。歴史の瓜みというか、現実の厳しさが、私の考えの甘さを知らしめた。まず構造だが、もともと単なる箱にフタが付いているようなものだから、さらに単純にしようとするには強度との兼ね合いを考慮しなくてはならない。また構造が変われば、当然、加工法も変わることになるが、それが現在より難しくなってはいけない。このようにいろいろ考えていると、とても改良などおぼつかなくなってしまうのである。結局、私が作ったものは、一面、かなり新しいアイディアを盛り込んだもの、すなわち使い易さだけは若干目立つが、構造とか加工法に関しては改良と呼べるほどの進歩は得られなかった。

今まで1種類の trunk しか見たことのない人々は,私の作品を見て最初 は驚き、興味を示したものの、今までと違う形になったことで、その機能 が低下しているのではないかと、疑問を抱いている者もいることが判った。 もちろん、機能的に劣るようなものは作っていないが、旧来のもののよう に長い間、多くの人間によって使用され保証されていないだけに、今はな んともいえないのだ。このことは、かりに私があらゆる意味で現在に勝る ものを作ったとしても、それが信頼を得るためには相当の時間が必要であ るということになろう。

この trunk 製作によって、私は人々が改良、改善の意識をもってくれることを主張することになったが、既存のものに対する執着が強く、没近の度合いは薄いようだ。今後、いくつもの違う種類の trunk を作って見せれば、よいのかもしれない。

(2) filing cabinet

上司の事務室で使用中だったもので、"引き出しに欠陥があるから直してくれ"と実習場に持ちこまれた cabinet は、MADE IN GHANAではあるが、外観はかなり良いものであった。が、4つの引き出し全部をいっぱいに開けた時、本来は、水平状態を保ち続けねばならないのに、ガクンとレールから外れてしまうのである。原因はレールの形状と材料の強度(厚さ不足)にあった。そこで、同じ事務室で使われていた外国製のもののレール部と比べてみた。外国製のものはさすがに海を渡ってきただけあって、合理的な構造と専用機械で作られた確かさがあり、引き出しをいっぱいに開けても、その水平姿勢を崩さず、招動部を少なくした構造によって操作力も実に軽くてすむのである。どうして同じものをガーナは作れないのだろうか。たぶん需要が少ないためだろう。大きな工場で機械製作するには経済性が悪い。したがって当然、ここでは手作業となるが、構造も作業上の都合に見合ったものに変えなければいけない。というわけで製作上変更になった部分が、この cabinet で最も重要な部分である引き出しのレールとなり、冒頭の欠陥となったのである。

さて、レールの形状に問題があるのだから、まず新しい形状を考えなくてはならない。そこで、新しくレール部を改良した cabinet を製作することになった。レール部に焦点が絞られているだけに作り易いといえるが、最も重要な部分であることを考えれば、全部新しいものを作るより厄介だともいえる。この仕事に取りかかる時、私にはひとつの意地があった。断固として、外国製のものに似たものは作らないということである。外国製

のものを一部変えれば、かなり良いものができそうだが、ガーナ製がそれ をしなかったのは、特許や意匠の問題もあろうし、機械がなくて充分な精 度が得られなかったためなのかもしれない。一流の技術者とか高価な機械 でしかできないような物なら、作るより買ったほうが安いともいえる。と いうことで,妙なというより、然るべき意地を張ったために,アイディアが 浮かぶまでに時間がかかった。やっとアイディアが閃めいた時は,我ながら 良いアイディアだと思ったが、具体化してゆくにつれて、様々な障害が現わ れ、色褪せていった。最も大きな障害は、私が図面を描いたあと、加工を任 せた生徒達の技能レベルの低いことであった。彼らはこの訓練所へ学びに きているのだから当然一人前とはいえないが、大半の生徒はすでに所属先 があって,ある程度の技能を持っているはずだったのである。また,あくま でも実習の一環であるから、無理な注文はしなかったつもりなのに、与えた 作業がことごとく期待外れとなってしまった。例えば、最小限、機能に差し 支えなければ、加工の程度はどうでもよいようなのだ。曲げるところは曲げ るだけ。曲げ方、曲がり方という過程はどうでもよいのである。平らな面 にデコポコがあっても、そのデコポコが機能の妨げにならない限り手を加 えることもない。確かに機能さえ果たせば、加工の程度とか仕上がりの良さ などは関係のないものだともいえる。それに、ここでは機能以外のものは ほとんど求められてもいないのである。こうした状況下で,曲げ方が悪い, やれデコボコが多いといっても、どうしてそれでいけないのかということ になる。逆に、ていねいに曲げたり、デコポコを直したりすれば、余計な 時間が要るといわれかねない。実際、生徒の加工したものに手を加えよう と思えば、ほとんど全部やらなければならなかったので、機能さえ果たせ ば、とおおかたは目をつぶってしまった。

「機能美」という言葉がある。良いものは構造が単純で、しかも形が美しいともいわれる。はたして機能第一で作った cabinet は機能美を備えているかと眺めて見ると、いささか頼りない。 表面のデコポコといい、不揃いな曲げ方といい、必ずしも良いものを連想させないのである。 そして、その通りに引き出しの開閉が思ったほど軽くなく、ガタがあって、弱そうな感じなのである。 この原因をつきつめていくと、結局、最初の曲げ方、平らな面のデコポコにゆき当る。単純で美しい曲げ方、曲がり方、デコポコを作らないですむ加工法があるはずである。 それが製造技術であり、機能

美に照らして私は「加工美」とでも呼べると思うのだが。この加工美を教えるのが私の務めだったと、このレポートを書き始めて、フと気がついた。 あまりに機能だけを重視しすぎていた。加工がおろそかであれば、機能も 最低限しか発揮できないだろうし、耐久性にも大きく影響してくるに違い ない。つまるところ、加工美あっての機能美なのである。

機能美も加工美もない cabinet となったが、レールの構造改善にみせた 私の窓欲だけは評価されたようだ。それにしても、私の期待と生徒の実力 の差が大きすぎる。縮める努力が足りなかったのか。

(3) coal pot

町の中心を離れると電気がなかったり、プロパンガスの入手も非常に難 しいこの国では、木炭が重要な熱源であることは以前にも報告したが、そ れだけに、鋼板で作られた木炭コンロは、ほとんどの人々の生活必需品とな っている。形状は4角柱の上に4角錐台を逆さに載せたようなもので、す べて銅板を切断したのを四隅で溶接してあるだけのものだ。最初,鍋,カ ・マが丸いのに,どうして四角いコンロなのか判らなかったが,答えは熱効 串とか歴史とかによるものではなく、その製造過程にあった。まず加工の 問題として、鋼板を円筒または円錐形に曲げようとする場合、手作業でで - きる範囲は板厚2㎜位までだが。コンロに用いられている厚さは3㎜で。 絶対加工不可能ではないが、極めて骨の折れる厚さなのだ。加えて材料の経 済性があげられる。角型コンロはすべての部分が直線であるため、大きな 鋼板から何枚も切断する場合,ほとんどムグがないのだが,丸型コンロの上 部は曲げる前は扇形をしているので、どううまく組み合わせても相当な「余 白 1が生まれるのである。ところが経済性を云々する時、見逃せないことが ある。それは溶接部分の長さ(溶接降の量)である。角型は四隅を溶接せ ねばならないが、丸型は曲げたあと1ヵ所裕接すればよい(円筒を想像さ れれば判り易いと思う)。

こうなると、丸型は曲げることさえ容易なら有望に思える。もっとも経 済性の問題として「余白」部分の大きさ、溶接部の長さが角型とどの程度 の差があるのか、また、それ以前の問題として钢板や溶接棒の価格、供給 事情なども加味されねばならない。いろいろ考えていても結論が出ず、上 同から、ひとつ丸型を作ってみろといわれて、とにかく作ってみた。やはり、 やってみなければ判らない。曲げるのは思ったほど楽ではないし、曲線の 切断はあまりにも手間のかかることであった。考えてみれば、鍋、カマが 丸いから、コンロも丸いほうが熱効率の面からも良いのだろうと思ったも のの、どれほどの木炭を節約できるか調べたわけではなく、一時期、木炭 不足ということもあったが、丸と角の違いで木炭の量が気になるような事 態はあり得ないだろう。そんな時は木炭の時代が終わる時である。結局、 丸いコンロは単なる見せ物となることになったが、角型コンロも経済性と 加工法を改善する余地がないでもない。それに取り組むことを次のステップとしたい。

2. 中間技術の課題

私が中間技術に求めたものは、あらゆる観点からベストなものを作り出すことであった。現実にはベストどころか、ベターにも及ばないことがほとんどであったけれども、それは私の力不足であると共に、ベストという価値の高さ(ここでは私個人で設定したものである)が、ひとりで取り組むには、あまりにも高すぎたからである。なぜ、高すぎる目標を設定したかであるが、ベストというのは人間がものを考え、造り(創り)、変えていく限り追い続ける最上級であり、現在は、現在のベストを追求しなければならないと思ったからである。そして、この現在のベストでも、ガーナのベストと日本のベストとは、それぞれの国情によって同一ではあり得ないから、あくまでもガーナのベストを目標とせねばならない。

などと考えながら私が仕事に当っている一方で、訓練生や指導員をはじめ周囲の人間の多くは、およそ中間技術など知る由もなく、新しさとか見てくれの良さに心を動かし、高価格だとか、耐久性などを二の次にしているような傾向が目についた。これは日本人が、あまり使いもしないものを衝動的に買ったりするのに似ているが、こうした意識が存在するのは、つきつめていくと、それぞれの国のベストというのは何か、が知られていないことになると思う。同時にベストを造り出すための中間技術も知られていないのである。中間技術というのはどんなもので、何のためのものであるかを、単に途上国の開発技術としてではなく、すべての国に共通する基礎技術として普及、充実させることが、今後国家の重要な課題となるべきである。

個々の技能は充分なものを持っているガーナでは、少しでも多くの中間 技術について伝えることが私の課題であると思うし、板金加工以外の分野 にも拡げることを、今まで通り続けたい。

3. 国内情势

昨年6月の革命のあと9月に民政移管が行なわれ、それ以後政治的には 穏やかな状態にあるが、経済の沈滞はまったく回復の兆しがなく、生活必 福品の極端な不足で,昨年のクリスマスは,独立以来最も貧しいものであっ た,と新聞が掛くほどだった。すなわち,ナイジェリアから4億円あまりの 生活必需品の援助があり、セネガルから肉牛500頭が贈られるなど,跨り高 いガーナ人にはみじめな思いを抱かせる出来事もあった。このような状況 では当然、充分な外貨準備もなく、相次ぐ原油の値上げは少ない外貨をほ とんど吸い上げてしまっており、産業用機械・設備の更新、修理用品の勝 入を遅らせ、生産性を低下させている。深刻なのは輸送機関で、絶対的な 自動車不足から通勤,旅行などは非常に困難となり,最近改善されつつある ものの、ところどころパニック状態をひき起こすこともたびたびである。 人間を輸送するのがやっとであるだけに物資の運搬も大変で,都市部から 地方への工業製品(石油製品、日用品など)、地方から都市部への食料品 の供給がよく問題となった。また、これらの問題が問題となる過程が、小態 の重大さを現わしている。というのは、ある困難に直面した場合。その地 域の住民が一丸となって自治体あるいは直接責任者に請願し、それが新聞 などマスコミに取り上げられてはじめて,担当者が膜を上げたり,弁明した りするのである。公的機関が進んで管轄下の状況改善に乗り出すことは、 資金不足,モノ不足のため(おおかたの弁明に使われている理由)とはい え、非常に少ない。であるから、新聞は特に重要な訴えの場となり、連日 のように、どこの地域が水不足だとか、某病院で薬不足と停電のため患者 が死亡したとか、道路が損壊して必需品が届かないとかといった記事が、 時には、土地の族長からの嘆願として、時には一住民からの投書として世 論に訴えられるのである。このようにして公けにされた訴えが、すぐ取り 上げられ、対策が抱されるのは、どこかに担当者の怠慢があったというこ とになるが、多くの場合、対処しようにも資材がないというのが現状で、よ ほど深刻(数名の生命に関わるくらいでは、"深刻"ではないことがある) でないと、住民は忍耐を求められることで終わってしまう。また、同じ新 **四記事となったことがらでも、その新聞の扱い方によって対策の早さや程**

度が異なるようである。例えば写真入りだとか、新聞社の論問に左右され 易いということだ。私の住んでいるアクラは、首都ということもあって比 較的対策が速やかであるが、地方の場合、対策がかなり遅れることは、こ の国の事情からして充分想像できる。それにしても、訴えの多くは事態の 発生から1ヵ月近くたって出されるようだが、これが彼らの忍耐力の限界 なのか、それとも国情を随っての期間なのだろうか。いずれにしても日本 人には長すぎること間違いないだろう。先週、新聞に載ったことに対する 管理者の処置が、わずか1日で行なわれたのを、あたかも奇跡のように、 同じ新聞が賞婪していたことを付け加えておく。

以上のように、日本なら非常事態宜置でも出すところなのだが、もともとの生活水準、習慣が違うから、この国ではまだ余裕を残している。しかし、新政権発足後、4ヵ月経過して、そろそろ具体的な政策、しかも効果的なものが打ち出されないと、現在の状態が慢性化する恐れがある。最近の大統領の冒動にみられるように、現時点では相当厳しいが、思い切った政策を実行しなければ復興は遅れるばかりであろう。昨年6月に倒された平事政権が、7年間に作った私利私欲のための負債約13億ドル(昨年6月現在)は、80年度予算14億ドルとほぼ同じで、国民には辛いことだが、国家として避けられるものではない。カカオ、木材、金などの主要産業を有効に活かして返済していくべきだろう。そのために政府は密輸出のやまないカカオ、木材の管理を強化し、ストライキが長引いている金鉱の再開(1月の金相場の暴騰中もストが続いていた)を促すなど、的確かつ迅速な対処を要求されるだろう。

6月の革命で散しく糾弾された不正,汚験が、いぜんとして幅をきかせ、 国民の政治不信も根強いが、また、革命ですべてをゼロに戻すようなこと はせず(国民の間には革命待望論のようなものがあって,新闻には時折,それを非難する声が現われる)、着実に建て直しを進めることができるか、 注目の1980年である。

4. 業務報告

活動期間も余すところ3ヵ月,なんとなく落ち着かなくなっているが, 過去1年半余の間,これといった成果をあげられなかっただけに,せめて最 後はしっかり締めくくるべく疑を入れているところである。新年度が1月

から始まる訓練所に,今年も1年生が入所してきた。今度が2度目の1年生 の指導になるわけだが、過去の反省もあるし、測練所の方針、あり方などが つかめてきた。まだ始まって1ヵ月も経過していないのだが,以前とは比 較にならないほど、良い投業が行なえるようになったと自負している。残念 ながらというか、仕方ないというか、この生徒達の最も大切な6ヵ月(1 年生の訓練期間は1月~6月) のうち、半分のところで帰国することにな る。後任隊員が見つからなかったようだが、仮金加工部門への応募者の数 からみても頷けるし、板金、即自動車板金と判断されがちな日本では、か りに多数の応募者を集めたとしても、実際の要請内容に応じられるか疑問 がある。というのは私の働く訓練所の板金・製造科では自動車板金は一切 扱わないし、その名が示すように金属製品の製造技術が大きな指導要項と なっているのである。もちろん、自動車板金も板金の一分野であって共通 部分も多いが、各種の金属材料ならびにその加工法(この中にはほとんど の溶接も含まれる), さらに機械製図の知識となると, 単純に同じ板金だ からよいとはいえないのである。幸い、私が日本で勤めていたところは自 動車板金が主体ではあったが、試験用としてさまざまな金属の加工・溶接 (金属によって密接法もさまざまである) もあり、加えて製図の特別教育 まであったのである。英語で仕事をしていたわけではないので、言葉には苦 労しているが、技術的にはこの訓練所の要請に応えられたと思う。どの国 も同様な板金技術を求めているとは限らないが、日本のような自動車板金 は例外的なものであって、途上国(フランスも含めてよいという隊員あり) には必要とされないだろうし、もし求められたとしても、それは欲に入り - 細にわたり元通りにするというようなものではないと思う。見方を変えれ ば、日本の自動車板金が意識変革をしなければならないともいえる。

さて、ここ1年余、私がもっとも力を入れてきたのは製図の授業である。 板金と製図は切っても切れない関係があり、それでいながら、私の着任前 は板金の指導員がいなかったこともあって、製図は教えられていなかった のである。かなり不充分な英語で教え始めたことと、あまりに多くを望み すぎたこともあって、最初はほとんど効果がなかった。慣れるに従って、 それまでの指導速度が極度に速すぎたことを悟った。生徒の多くは3角形 の描き方、垂線の引き方など初歩的な図形の知識をもっていなかったので ある。そんな彼らに投影図とか展開法を教えようとしたのだから無理な話

である。少ない製図用紙をだいぶ無駄に使ったこともあって、現在はひた すら、黒板を利用して基礎的な内容の繰り返しである。このように、図形 の基礎に限らず,四則計算、公式など,当然できると思っている事柄ができ なくて驚くとともに、一応は中学校程度の教育を受けているものに、再び 同じようなことを教えるのは面倒でもあるし、時間がもったいないような 気もするのである。勢い、初等教育の責任を追求したく なる の だが、今 さら、彼らを小学校に戻すわけにもいかない。理解できるところから始め るよりほかないだろう。ひとつ言わせてもらえば、「Development」を合 **| 1 葉に、いろいろ立派な計画が唱えられているのだが、それがなかなかう** まくいかないのは、結局、教育制度にムラがあるためではないだろうか (就 学率,就学年数,教育基準等)。「Development」を急ぐ必要は少しもないと 思うし、すべての「Development」の前に、まず、「教育の Development」 が行なわれるべきではなかろうかと思う。思うように進まない授業が多く て,つい,こんなことを考えてしまいがちだ。しかし見方を変えると、生徒 が優秀で、難しいことを要求されて困ることがないのは、私にとり大きな教 いでもある。そして、その分、余裕ができ、いろいろなことができたのだ が、もっとも多かったのは金属製品の修理、再製作であった。

一番はじめの報告書でも触れたが、この国では消費は美徳とか、節約は美徳などという言葉は生まれる余地がなく、使えるものはいつまでも使い、使えなくなったら直してまた使うというのが普通である。耐用年数をとっくに過ぎた品物が修理に運ばれてくると、よくここまで働いてくれたという感謝の気持ちと、もうしばらく役にたって欲しいという願いを込めて修理に当る自分に気づく。そして、品物の多くが生活に密着したものだけに、やり甲斐もあって、生徒に対してはあまりまともな授業もできず、これといった成果もないが、直接物を修理してあげた人には重宝がられたと自認している。だから任期延長を依頼されたのも、多分に指導員としてよりも修理屋(便利屋)として残したかったからに違いない。私もそれで構わなかったのだが、街中で廃品を利用した金属製品や再生品の必要にして充分なつくりや強度をみるにつけ、あえて延長する意味はないと思うのである。もし、延長することになったなら、訓練所ではなく、小さな町工場のようなところに入り、修理できるものは片っ端から直してみたいと思う。これはあくまで夢だが、楽しい仕事になるはずである。

5. 国内旅行

昨年11月末から1ヵ月間、国内旅行をした。旅行というと叫こえはいいが、軽い探険のようなもので、いろいろな困難は覚悟のうえでのことである。石油不足、慢性的モノ不足のため、出発前から乗り気のしない旅であったし、事実、予想を裏切らない苦しい旅であった。北部、中部、西部の3万面に分けて、それぞれを1週間程度で回り、疲労を避ける工夫をした。

もっとも大きな疲労の原因となったのは交通機関の悪さである。もとも と少ない自動車数にガソリンの供給不足が重なって、地方によっては走る 車を探すのが難しいくらいであった。平均して2時間の待ち時間(最高4 時間)で、時には、くるアテのない車を待つ必要もあった。運よく車を見 つけると、それがトラックの荷台だからといって拒否できるほど余裕はも ち得なかった。以上のような理由で、1ヵ所をゆっくり見ているわけにも いかず、ひたすら点と点を結ぶだけのものになってしまった。

幸いなことに、この国はとりたてて観光対象となるような名所が少なく、ただ、あちこち飛び回っているだけのことでも、この国のナマの姿を見ること、経験することになり、協力隊員にはうってつけである。そして、このようにして見て回った限りでは、ガーナ人はほとんどどこでも親しみ易く、親切であるということがいえる。このことは旅行中訪ねた他の隊員たちが、モノ不足(水不足、電気不足を含む)の生活でありながら、その土地によく馴染んでいるように見受けられたことからも推察できる。

それにしても、それほど広くもない国土で、南と北、あるいは地方と都市の生活水準の差の大きさには考えさせられる。地方は地方で、あえて開発などする必要はないと私は思うのだが、都市部の急激な開発によって、地方までが無理にその波に吞み込まれてしまい、犠牲が大きい割に得るものが少なくて苦しんでいるのである。

昨年行なわれた選挙(大統領、国会議員)の沿板が、おそらく票集めの ためとしか思えないような、すなわち政治の力が届きそうもないところに 派手に立っているのが異様な感じであった。南北問題が南北の不公平・格 差をなくそうとするものであるなら、当然、一国の国内でも、それがなさ れるべきだし、そのためには、やはり、もっとも低いところの生活水準を 上げるのが最善ではないのだろうか。つまり、協力隊はもっと生活水準の

国立職業訓練校における教育・指導

低い (語弊があるなら、もっとも不公平の書を被っている) ところへ入る べきだと思う。それが実際の効果を期待できないにしても、現在のように、 時として首の回らない政府の要請に応じているのと、さほど変わらないの ではないか。日本よりはるかに「地方による、地方のための、地方の時代」を拓く必要は強いと思う。

「心」を守る開発

安 江 丈 二

私は2年間、協力隊活動の一端である技術移転という面では、たいしたことはできなかった。もっと努力すれば自分なりに納得できるところまでいったかもしれない。が、心の底にいつも技術援助、経済援助などによる開発、発展というものに猜疑心をもっていたせいか、努力を惜しんでいたような気がする。しかしまた、それでよかったとも思っている。開発に対する猜疑心、これは何もガーナに、アフリカに行ったがために生まれたものではなくて、派遣前からもっていたものだ。自国の開発、発展のために努力を惜しまなかった日本は、人々の心が荒んできていると思ったからだ。

20年前の日本、それは現在のガーナとさほど違わない状況だったと思うのだが、私は今の日本よりも、その頃の方がもっと心に豊かさ、暖かさ(月並みな言葉だが)があり、人間同士のつながりが深かったと記憶している。おそらく、ひとり私の記憶にとどまらず、衆目の一致するところだろう。それが開発、発展によって次々と新しいものが生まれ、何でも手に入れることができるようになるにつれ、心が疎かにされてきている。発展そのものに異論はないが、現実として、それと反比例するように心の荒廃が進んでいるとすれば、それは享受する気になれないのである。

この現象は日本だけではなかった。ガーナの新聞でも凶悪犯罪、非人間的、反社会的事件がたびたびみられたのである。一方、知人と訪ねた地方の小さな村、そこは小さな谷川から水を汲み、電燈はなく、灯油ランプを使用している、かなりの田舎であったが、ほとんど言葉の通じない村人に私はとても暖かく迎えられた。モノはないが、心がタップリ残っているという印象だった。残念なことに、必然的に、相対的に、この村も過疎の波のなかにあった。過疎過密の問題は、まったく日本に似ている。急激なというより、心を疎かにした開発、発展の道をガーナも歩んでいるようなのだ。このまま日本と同じ状態を迎えるのなら、私は彼らの素朴な心を守るために、発展、開発を控える、いや止めたほうがいいとさえ思う。

身勝手な論陣を張ったが,当のガーナ人は,こんなことは考えもしないかも

しれない。もっと新しい技術を、もっと豊富な物資を、と願うかもしれない。 しかし、日本人という人間が思うことと、ガーナの人間が思うこととの間に 大きな違いなどない、と私は彼らとの交友のなかから感じている。そうであ るから心配しているのである。今、中間技術(適正技術)というものが重視 されている。開発教育というものも生まれてきた。これらは心を守る開発の ために考えられ、発生したものだ。そして途上国とか先進国とかという区別 なく、すべての国に必要なものである。国際協力といい、南北問題といい、 結局のところ心の問題だと思う。

安江隊員の報告書を読んで

菊 地 七 郎

ガーナ国で昭和52年度2次派遣隊員として活躍した安江丈二君の報告掛を 説ませていただいた説後の所感を述べてみることにする。

私がここで所感を述べようとする報告書の内容は、大きくわけて、「中間 技術を探る」、「紫粉報告」の2つについてである。

「中間技術を探る」について

「中間技術を探る」ということは、どんなことをいうのか、以下安江君の 報告書の一文を紹介する。

「11月初旬に催される, 我が訓練所のセミナーと並行して, 訓練成果を披露する展示会があるが, 私の指導している板金・製造科から3点出品する予定である。これらの製作過程で, ずっと念頭に置いてきた中間技術との関わりを報告したい。出品作は次の3点である。

- 1) trunk box----日本では最近プラスチックなどにとって代わられているが、以前はプリキ製が主体であった衣装箱と呼ばれるものにあたる。
- 2) filing cabinet——事務用品、ファイル等を収納する引き出し式の 戸棚、通常3段か4段の引き出しのものが多い。
 - 3) coal pot——木炭コンロ, 七風の類い」

以上のような観点にたって報告された内容を私なりに考えてみると、「中間技術」とは、指導具――訓練生――製品の使用者の3者の中の訓練生の技術ということをいっているようである。しかし、それは単に訓練生の技術だけではなく、指導員として訓練生に訓練すべき指導員自身の技術も含めているようでもある。そこで、ここで述べるのは指導員の指導技術としての「中間技術」ということを前提にしたものである。

trunk box について安江君は次のようなことを報告している。

「さて、いざ取り組み始めると改良は至難の技であった。歴史の<u>瓜</u>みとい うか、現実の厳しさが、私の考えの甘さを知らしめた。 (中略)

この trunk 製作によって、私は人々が改良、改善の意識をもってくれることを主張することになったが、既存のものに対する執着が強く、浸透

の度合いは薄いようだ。今後、いくつもの違う種類の trunk を作って見せれば、よいのかもしれない」と結んでいる。

前者の考え方について述べてみると、ひとつは、訓練生がその時点で対応できる技能の内容はどんなものであるかをしっかりつかむことが大切な要素となろう。すなわち、指導員の考えたものをどれだけ消化でき得る訓練生なのかを判断しなければなるまい。その判断にたって製作すべき工程、工作法などを計画し、それによって製品化すべきであろう。この判断のあり方を安工君は甘さということばで表わしている。私はむしろ、従来のものと同じ形状のものであっても、訓練生の製作したものは、他の場所で製作したものより、少しでも優れたものとしての評価を受けられるようなものとして考えたほうがよかったのではないかと思っている。

また、後者の考えも前者と同様に考えるべき要素があるといえる。すなわ ち、既存のものと同じような形状のものを製作し、それが既存のものより訓 練所で作ったもののほうが少しでも優れたものになっているとの評価を得る ことによって、改良、改善を見つけ出す必要があるのではなかろうか。

全般的に含えることは、訓練を受けている訓練生の習熟度に対応して、その時点に必要な基礎技能を訓練すべきであり、その結果によって出てきた製品がそのときの製品であったと考えるべきであり、指導員はそのとき、良い製品となるにはどのようなアドバイスをし、工程順序を立てるべきかが大きな仕事、すなわち、それが指導員の「中間技術」のひとつであるとも含える。したがって、指導員は訓練生の立場にたって訓練技法を考えていくことを大切なことのひとつとしなければなるまい。

cabinet の場合も前と同じようなことが言えるのかもしれない。報告書の中に次のような一文がある。

「単純で美しい曲げ方、曲がり方、デコポコを作らないですむ加工法があるはずである。それが製造技術であり、機能美に照らして私は『加工美』とでも呼べると思うのだが。この加工美を教えるのが私の務めだったと、このレポートを書き始めて気がついた!

私も全く同じ考え方である。いわゆる 訓練技法で報告書に言う「中間技術」とは、いかにして、単純で美しい曲げ方、曲がり方、デコポコを作らないですむ加工法を訓練生に教えるかということであり、それは、全部の訓練

生に同一なものとして教えるのでは不十分なことである。すなわち、個々の 訓練生に対して、個々の訓練生のもっている能力に応じた教え方をしなけれ ばならないことがあるということである。たとえば、cabinet 全体の中で工 作上の難度を上・中・下と区分したとすれば、上・中・下に相当する加工部 分の受け持ちを訓練生の能力的なものによって区分して訓練をし、全体を通 して良い製品としての評価を得られるような訓練技法もまた大切なもののひ とつであるう。

この報告の最後に「それにしても、私の期待と生徒の実力の差が大きすぎる。 縮める努力が足りなかったのか」とある。

このことについてあえて苦含を量するならば、縮める努力が足りなかったことより、訓練生の技能習然程度の把握の不足にあったともみることができる。指導員と訓練生のもつ技術・技能は始めから差があるのが当然であり、訓練生より高度なものをもつから指導員となり得ているのである。指導員が訓練生より高度な技術・技能をもつに至るまでの経過は、経験年数等も含めて訓練生よりも多くのものを身につけてきたものであろう。その意味で指導員と訓練生との実力差を縮めようとするならば、指導員と同じ年数の訓練を積み重ねればよいことになるのか。そうではあるまい。

一定の訓練期間中に訓練生個々の能力によって身につける加工技能を送り 出した先において活用できるように考えた訓練をすることのほうが大切なの ではなかろうか。そのためには、訓練生個々が訓練を受けた結果何ができる ようになったかを自覚できるような技能をもたせて送り出す必要があろう。

このように考えてみると、指導員と訓練生の実力の差というのは、訓練生ひとりひとりとの差として考えることよりも、10人の訓練生が10分の1ずつ指導員との差を縮めたことによって、訓練生全体像として差を縮めたとみることのほうがよいのではないだろうか。

coal pot については現地の生々しい実情がよく現わされている。このよう な場合展示会に直面して考えることより、日常の訓練の中で、角と円の接合 というような展開による作品的なことは、あらかじめ考えておくことが大切 なような気がする。すなわち、日常の訓練によって積み重ねられたものの集 約されたものが展示会の作品となるように考えた訓練をすることが必要では ないのだろうか。

最後の中間技術の課題という報告をみてみると、「私が中間技術に求めた

ものは、あらゆる観点からベストなものを造り出すことであった」とある。 これは安江君自身が中間技術者としての考え方を述べたものとみるわけであ るが、このこと自体は良い考え方であろう。しかし、現地の訓練生や指導員 にこれを求めることは非常に困難なものであり、それはまた、個人の技術と して発揚するにも困難が伴うものであろう。現在日本でも中間技術者の訓練 機関として、職業訓練短期大学技が設置され、その必要性に応じた訓練(テ クニシャン訓練)を開始したばかりである。中間技術者とは、私流に含わせ てもらえば、ものを創り出すことの可能性をもった技術者となる。

「業務報告」について

報告書の中に後任隊員向けの智葉として次のようなものがある。

「板金、即自動車板金と判断されがちな日本では(中略)私の働く割棟所の板金・製造科では自動車板金は一切扱わないし、その名が示すように金属製品の製造技術が大きな指導要項となっているのである」。さらに、「どの国も同様な板金技術を求めているとは限らないが、日本のような自動車板金は倒外的なものであって(中略)見方を変えれば、日本の自動車板金が意識変革をしなければならないともいえる」。

以上のことから考えられるのは、安江君が日本において自動車板金を主とした仕事をやっていて、現地では金属製品の加工の指導にあたった経験から言っていると言えるだろう。確かに日本で自動車板金修理の経験のみしかもたない人の場合、金属製品の加工の指導をするということは大変なことになるだろう。本来板金加工は塑性加工と言われるように、金属板を用いて成形加工をすることである。したがって、成形加工の基礎を十分会得していて自動車板金を行なう場合と、そうでない場合では、同じ自動車板金をやったと言っても、金属製品の加工に適応するにはかなりの差を生じるのは事実だろう。

安江君の言うように板金の派遣隊員には、板金としての経験をもち、さら にその上にたった自動車板金であったり、建築板金であってほしいという要 望がこめられている。

この点は今後の派遣隊員の選考において大いに考えなければならない点と 言える。

「業務報告」の最後に次のような一文がある。

「もし,延長することになったら,訓練所ではなく、小さな町工場のような

ところに入り、**住**型できるものは片っ端から直してみたいと思う。これはあくまで夢だが、楽しい仕事になるはずである」。

この内容は先に述べた「中間技術を探る」ということからみれば、少し異 質のものと甘えるようだが、それはそれとして安江君のひとつの希望的観点 としてとらえてみることにしよう。

小さな町工場で修理の仕事に専念してみたいということは非常に結構なことであろうが、現地の人々に訓練を通して寄与することを考えれば、私としては中間技術論を進めたいような気がする。ただ修理の仕事に専念したいということのみを考えてみると、次のようなことを知ってもらいたい。

ひとつは、修理をするということは、その製品の製作の過程を熱知しておくことが必要である。すなわち、修理の工程は製作工程の1工程の中にあったものであることを知らなければ、良い修理はなかなかでき難いものであると言える。

第2は、修理の仕事は修理を依頼した人と、された人との相対的な関係において仕事の評価がなされるものであるということである。 すなわち、修理を依頼した人の満足感が先にあって、修理した技術者自身の技術的評価はそれほど近くはみられないということである。

第3は、修理に専念することは安江君のいう日本の自動車板金的なものに近づいていくことにはならないのだろうか。やはりものを作るという一環としての修理の仕事という考え方をもつべきであろう。修理の中にも部分的なものを作るということがあるはずである。すなわち、修理とはものを作ることの中のひとつの仕事であるという考えをもつ必要があるのではないだろうか。(協力隊技術専門委員)



図画・工作及び教材づくりを指導して (第1~3講習会, そして学芸会)

第4号・5号報告書 (昭和54年12月17日) 昭和55年7月15日)

派 遺 国 ガーナ 53年1次前期組

联 租 理数科教師

氏 名広瀬桂子

配 风 先 Ghana Education Service
District Office, Mpraeso

-広瀬隊員の路歴—

氏 名広瀬桂子

生年月日 昭和27年5月12日

出身県 節岡県

斑 種 理数科教師

派遣期間 53年8月~55年8月

1. はじめに

Primary & Middle school での図画・工作及び教材づくり指導の経過と反公

1年間という短い期間でもあるし、受け持つ学校数も多いので、系統的な進步を望む指導より、子供達が楽しめる内容にしぼった。そして、その内容が他教科に及ぶもの、材料が現地で容易に得られるものであるよう配成した。また、私の現地語が直接子供達を教えるのに充分でないためと、各学校側が受け身にならないようにするため、2~3週間に1度購習会を開き、先生方に次に指導する内容を理解してもらい、教室では、各先生方が主に生徒を指導することにした。講習会時に、巡回の日時を決め、講習会に参加した学校のみ必要な道具、材料(各学校に配るだけの数、量に余裕がないため)を持ち、1日に2校程度を回った。以下は、その具体的な指導内容と指導後の感想、反省である。

第 1 回講習会 10月18日 参加校 23校 第 2 回 " 11月1日 " 20校 第 3 回 " 11月22日 " 22校 作品展 12月7日 作品搬入校 25校

11. 各 論

1. 第1回講習会

指導のねらい:年度の始まりなので教室を整え、生徒が新年度に対する 新しい心構えをもつための学級指導を兼ねる。

指導後の感想・反省:

A. 指導項目Aについて

画材 (クレヨン, 更紙) が学校に揃っていたためと, 作業が簡単だった ため, 約15校がこの項目を選び指導した。小学生には新しい学年について 考えていることを書かせたが, 考えもあまりもっていないし, たとえもっ ていたとしても書き表わすことができず, 先生が黒板にいくつかの文章を 書いてあげなければならなかった。上級生には将来の自分の仕事に対する 希望を書かせたが, 次のようにあまりバラエティーに富んでいなかった。

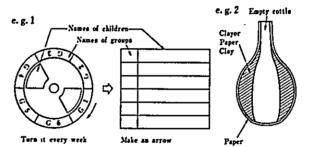
18th October, 1979.

DISPLAY OF CLASSROOM

It's the beginning of the academic year and it is very important the classroom is made decent as a place of study. This should be done by both children and teachers. Some examples are here but good ideas and suggestions are expected from teachers and pupils.

- A: "Let's know ourselves and classmatos"

 - a) Draw themselves in colour
 b) Write their hope for this year or what they are thinking now.
 c) Children's works to be collected and pasted on a large paper as display board.
- . B: The Time Table. Children can understand the time table more when mide by them-selves. It should be large enough and use many colours. For example Different colours for the same subject rake children understand well.
 - C: Class Duties. To make this, children have to discuss their groups and duties.



D: Vase
The classroom should have a wase containing flowers to brighten

- the room.

 a) Put paper clay outside an oupty bottle and rake a beautiful figure.
- b) Dry it for 2 or 3 days. c) Colour it with paint.

Teacher should select one or two of his own choice.

PLANS FOR THE FOLLOWING HEET DICS:

2nd Keeting - (Early Movember)

* CLAY WORK (Upper CLASS)

* Mathematics playing cards(LOWER CLASS)

3rd Heeting- (Hoverber)
* CHRISTH'S CAPD(For all)

4th Heeting (January)

* CALEEDAR

5th Meeting (February) * 70 Ys.

Today's ORIGANI House -> Boat -> Yatch -> Wird mill 男子=教師10%, サッカーブレーヤー30%, ハンター15%, 軍人20%, こその他5%。 (それぞれ, 約)

女子=教師15%, 沿護婦35%, 仕立屋35%, マコラマミー10%, ベイカリー5%。 (それぞれ, 約)

セロテーブ、のりが揃っていないためか、作品を教室に展示することが今まであまりなされていなかったため、製作後、展示された方達の作品を見て生徒達ははしゃいでいた。この作業の目的は作品を作ることより、他の作品を見て、互いに知り合うことにあったので、そういう意味では、かなり効果があったと思う。人物の描写、色の使い方は訓練がなされていないため、かなり幼稚であるが、どういう描き方、色の使い方が人物の描写により適しているかを判断する力はもっているので、こちらが、直接、指導しなくても、友達の良い作品を見ることにより学んでくれたと思う。B. 時間割づくり

3校が扱っただけであった。時間割が複雑で、子供達には枠組みがむずかしく、また、ここでは時間割があってもあまり使われていないため、必要性にも欠け、好評ではなかった。普通教室には小さなものが貼られているが、すべて先生の手によるものである。多くの先生達は自分達の気の向いた教科を、気の向いた時に教えているし、教科書は、常時、教室に収められていて、時間毎に配られるようになっているから、実際、時間割など必要がないのだ。

C. 学級の役割づくり

作る前の役割を決める話し合いや製作後の生徒の作品の使われ方が大切なのであったが、扱った先生達(3 校)には、それを理解してもらえなかったようで、終始、作業に重点が置かれ、その後、作品が活用されなかった。これも時間割と同様、必要性に欠けるのである。学級の仕事(そうじ、教科書の貸し出しなど)は、居合わせた子が進んでやってしまうので、わざわざ役割を決めたり交代制にしたりする必要がないのである。私達日本人はルールを作り、しかも、それを明文化しないと気がすまないようになっているが、何もない中で、社会なり、学級経営が成り立っているのなら、それにこしたことはない、すばらしいことだと思う。

D. 学級用花ピンづくり一あきピン, 紙粘土を使って 12校が扱った。ここガーナでは, あきピンは非常に貴重なので, 各学校

CLAY WORK - PENDANT AND BADGE:

Clay Work --- Drawings ---- Use

- a) With clay make pendant or badge To make a pendant, make a small hole -Dry it for theme or four days:
- b) Draw a design in colour on a paper.
- c) Hake the curface smooth with a sand paper; but if the clay is not good, Wrep it with paper while either glor, while or starch. Then dry it for two or three hours. For a badge, put behind it, a safety pin.
- d) Vse liquited colour for drawing.

EATHERATICS GAIR CARDA

Brawing _____ Learning (Natheratics and English)

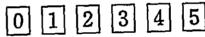
al links number cards from zero to ten. Kake word cards from zero to ten. Make picture cards from zero to ten. (We thick paper or card board, large enough to be seen from a distance).

From class 5 up to Middle Form 4, make two Division and multiplication sign cards each.

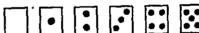
How to Play the Camp.

GAME: 1. For Day Nursery Children.

The Number cards from zero to Pive (0 - 5)



The Picture cards from zero to Five (0



:In: To help children to understand numbers and their corresponding

To help children to understand numbers and their corresponding quantity.

PLYFES: A group of five players can play the game.

Pirst, the cards are put does on a table face does. Choice of first player should be decided upon by the players before the game starts. A player picks two cards separately and if the figures agree, the player takes them but if they don't, he puts then does again. This is done in turns till the cards are all picked up in the same way. The player with the largest number of cards is declared the winner.

CARS II: For class one. The Game cords are:-Elumber cards from zero to ten (0 - 10)



Picture cards from zero to ten $(\theta - 10)$



The game in played in the same way as game I above.

図画・工作及び数材づくりを指導して

GAR HII: For class 2 and above.

1. Number Cards = 0 = 10 Picture cards = 0 = 10 Word Cards = 0 = 10

ii. The game is the same except that three cards are picked instead, of two.

CAIZ IV: For class 3 and above.

The game cards are the same as game III.

To help children to take quick calculation in addition and to help them improve their spelling in English.

BOT TO TLITE The cards are mixed up. They are then put together face downwards. Players then pick up the cards, adding together the numbers they pick till the player with the largest score of cards wins.

CAR V: For classes 5 and 6.

Add multiplication and Division sign cards. There is however no change in the game cards. Players pick up the numbers in the Eural way.

With the multiplication sign card in addition, the player multiplies his choice by 2 but if he chooses the Division sign card, he divides his pick by 2 and so on.

CUE VI: For Middle classes only.

The picture card should be in the negative.

300 HETD'S - 2210 HOLZBER, 1970.

YETUE: Ghana Educa tion Service Staff Contecn.

9.003.24

PIMICIPUTE: Interested irt and Craft teachers only.

Tolard ORIGINI

Japanese Sanurat's hat

で、あきビンが集められるかが心配だったが、どの先生も授業前の指導を 做底させていてくれて、かなりの数のあきビンと、充分な紙粘土が用意さ れていたのには感激した。仕上げはリキテックス・カラーを使ったが、使い 慣れない年や色にワイワイガヤガヤととても楽しんでいた。どの学校でも 用具を大小に扱ってくれる。作品のデザイン、色等は決して優れてはいな いが、作り終えた後、豊富な花を生けて楽しんでいたから充分である。

2. 第2回購習会

1) 粘土で作るパッチ、ペンダント

指導のねらい:この土地で豊富に得られるもの(良質の粘土)を使い。 自分達の作った作品で楽しむ。

指導後の感想・反省:全校が扱い、とても好評であった。柔らかい木片とか石を粘土のかわりに使った学校があったが、とても良いアイディアだと思う。日本の子供達なら刃物で怪我をしないよう粘土が選ばれるのだろうが、ここの子供達はとてもじょうずにナイフを使えるので、木や石を自分達の好きな形に削ることができた。"焼く"作業は省いたため、大きいものは壊れる心配があるが、デザインは良いものが多かった。この地方では何易焼物(低温度で焼く)を生産している所が多いので、"焼く"作業を加え、もう1度計画してやってみたい。色つけには日本から取り寄せたリキテックス・カラーを使ったが、水溶性として使え、乾くと水に溶けないこと、そして速乾性のため子供達の作業にはもってこいの材料だった。製作後、自分達の作品を身につけた生徒達は、とても嬉しそうだった。

2) 算数ゲーム・カード

指導のねらい: 生徒遠自ら作った教材を使って、楽しみながら算数の学 習をする。

指導後の感想・反名:15校が扱った。材料不足(両面無地の厚紙)のため、1校でカード2組程度しか作れなかったが、ゲームは生徒にも先生にもとても好評で、よく使われている。このカードの製作は今後も続け、1校に5組程度(1クラス 40 人程度のため6~7人1グループでゲームができる)揃えたいと思う。

3. 第3回購習会

"クリスマスカード作り"

指導のねらい:ここではカード類は買うことが当り前のようになってい

DIE TAZA CAE

2210 HOTEBER 1979 .

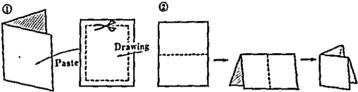
HUD-MIDE THUS - CHO

It's the Christmes time.

And many X'mas Cards are selling in stores.

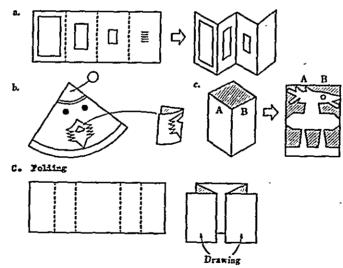
But it's true that we are always extra pleased with hard-rade Cards-Some ideas for raking I'mas Cards are here; but students could change colours and design according to the parson for when they like to send the card. Give then enough time to make their can design.

A. Siple folding (** Draw diagrame yourself)



- a. Drawing . Crayon and Vater Colour.
 - . Barboo pon with black ink etc.
- b. Prints . Potato prints
 - . Leaf Prints sic.
- c. Collage . Seets
 - . Foothers
 - . Leaves or flowers.
 - . Clothes etc.

B. Cutting



るので、自分達でも作れ、かつ、より相手に喜んでもらえるという手作り の良さを認識させる。クレコン、水彩、サインペン、色エンピツを組み合 わせて使ったり、切り絵、張り絵等も使い、自由で楽しい作品を作るよう 指導する。物質的に致しいクリスマスのムードを盛り上げる。

指導後の感想と反名: クリスマス・シーズンなので、もちろんのこと、先生方や生徒の関心は強かった。 授業 1 週間前に日本の X'mas カード、自作のもの等、アイディアの凝らされたものを持って巡回した。 それら見本は生徒遠を非常に楽しませたが、いざ製作となると、形に関しては奇抜なアイディアは出てこなかった。 これは工夫工作の学習不足と知識不足によるものと思われる。 時間の都合もあり絵に重点をおいたが、 レタリングの 簡単な指導ができれば、よかった。

4. 作品展

1) ねらい:1学期の総まとめとして各学校からの生徒の作品を一堂に展示して、お互いに他校の作品を鑑賞する。指導地域以外の学校(セカンダリースクールも含む)の先生や生徒にも作品を見てもらう。材料が十分ではなかったり、講習会では紹介できなかったものをデモンストレーションとして紹介する。デモンストレーション用に各学校から先生1名、生徒2名に出品参加してもらい、普段はあまり交流のない学校間の交流の場も並ねるようにする。

見学者=先生約100名, 生徒約3,000名, 一般約50名 (G.E.S. の人達)

G.E.S. Mpraeso の多大な協力が得られたことや物珍しさも手伝って、子型外の見学者と好評が得られた。会場内は身動きがとれないほど混雑し、生徒遠に思うように見学してもらえなかったのではないかとの危惧が残った。次回は場所、日程、見学順番等考えたい。各デモンストレーション・コーナーにリーダーとして付いてもらった先生方が、自分違が製作作業に興味をもってしまい、コーナーの先徒遠の指導、見学者への説明等をおるそかにしたのには閉口した。結局、私がコーナーからコーナーへと忙しく、どなりながら走り回るはめとなったが、次回はなんとか楽に構えたいものだ。見学時間にもっと余裕があればクリスマスカード作り、ベンダント作り、折り紙コーナー等、より多くの見学者に参加してもらえたのだが、残念だった。一般の見学者が少なかったため、バザーの売上はわずかで、

必要経費 (手伝いに呼んだ生徒の交通費など) がまかなえなかった。次回は村にポスターを張るなどして、一般の人々にも見学してもらうようにしたいと思う。

Ⅲ. 学芸会

7月4日、6時30分、2時間の眠りから覚める。今日は私にとってガーナでの最後の仕事である。幼稚園、小・中学校で地区特別美術指導員として、図画・工作及び教材づくりを指導してきたが、3学期は、そのまとめとして学芸会のようなもの、名付けて"パラエティー・エンターテインメント"を計画した。衣装作り、小道具作りは図工の応用であるし、何よりも、たびたび感心させられてきた子供達のダンスや歌等を、私の仕事に取り入れてみたかったからである。

学期初めに参加希望校を募ったところ、13校の申し込みがあった。1校 1校回って出し物を相談した。できるだけバラエティーに富むよう心がけ た。また指導する先生の好み、勤勉ぶりも考慮して、ダンス、劇,影絵,紙 芝居, 人形劇など,それぞれ決めたまではよかったが, さて練習というとこ ろで先生達がストに入った。うなぎ昇りの物価高に、まるで無視された先 生達の給料には、かねてから私も同情はしていたが、なにも今やってくれな くても……というのが私の宰直な気持ちだった。それでなくても準備、練 習にかなり時間が必要な上、学期初めは地区スポーン大会や音楽コンクー ル等で3週間もスタートが遅れている。予定する学芸会までは,あと1ヵ月 しかなかった。日本の先生のストのように登校時間を遅らせるのとわけが 違い, 最低1週間は続けるという。また"この時期を選んだのは, このまま学 年末休暇に入れるからだ"と言う人もいた。冗談ではない。そんなことをさ れたら、私はこのまま何もしないで帰国ということになる。焦った。所属先 の教育委員会に毎日通って事の成り行きを見守る以外、私にできることは なかった。1週間がむなしく過ぎる。町には子供があふれ、先生達はふだん 着に着替えて農場へ通う。教育委員会の人達も先生の給料が上がれば自分 達のも当然上がるとかで,のんびり構えている。私以外他の誰もがこの機会 を充分満喫しているようだ。長かった2週間が明け、ようやく先生達が学 校に戻ることになった。それでも政府の回答は先生達を十分満足させるも のではなかったから、彼らはだるそうにクラスを再開した。例によって草 刈りから始まる。強烈な太陽の下で悠々と伸びた草を生徒遠がペチャクチャレャペりながら刈るには、ゆうに2日や3日はかかる。

こんな状態を経て私の仕事が再スタートした。あと予定日までは10日間だった。私の仕事のやり方は各校を回って先生方にアドバイスし、一方で時間の許す限り授業に出るというものだった。事のない私が13校を回っている余裕などなかった。各校を回り、双方の時間のリミットを考え、半分の学校には辞退してもらうことにした。それからの10日間の忙しさといったら、日本の先生も顔負けのものだった。

そして、どうにか今日にこぎつけた。会場は隣村の、ある中学校だが、昨 夜, 夜なべ仕事でようやく終えた,ある出し物用の衣裳を持ち,その打ち合 わせのため、会場に行く前にA幼稚園に行かなければならなかった。遅れを 予想して早めにたのんでおいた教育委員会のジーブが、どういうわけか20 分も早くきた。今日は幸先がよさそうだ。A幼稚園へ向う。「どうして昨 日、おととい、ときてくれなかったのか。きてくれなかったから練習が進 ・められなかった」という不満を聞き流しつつ、夜なべで作った衣裳を子供 につけてみる。この幼稚園では"動物の行進"というのをやるのだが、各動 物の衣裳が必要だ。ここではダンスとか劇用に特別衣裳を作るという習慣 がなかった。もちろん、今のこの国の状態ではそんな余裕などあるはずも ないが……。図工に使う道具については生徒が個人で持つ余裕などなく、 学校からの貸し出しでやっているのだが、6色入りのクレヨン数箱が小学 校に、4、5本の筆と4色の粉絵具が中学校にあるだけ。紙は新昭用の更 紙が主で、白いものなどは値段が高いし手に入りにくい。そこで私達は廃 品利用を試みた。余り布、空箱、空缶等を首都アクラ在住の日本人家庭に お願いして集めてもらっておいた。どうにか、その余り布や古着、空箱(マ スク用) を組み合わせてカラス、ヤギ、ネコ、ソウの衣裳を作った。 眠気 をこらえてやったにしては、なかなかのでき……と思いきや、ヘビ用の衣 袋がないという。すっかり忘れていた。この国の先生達は一般的に生徒の 指導に積極的ではない。図工、教材づくりにしても、材料がなければ、それ を理由にやらない。工夫してまでもやってみようという先生は稀である。 給料の安さのせいもあるのだろうが、教師達の間にまったく活気がない。 その多くが転職や国外で働くことを希望しているありさま。この幼稚園の - 場合, 張り切り屋さんの地区の幼稚園指導主事が, この機会に私から何か新

しい物を学ばせようと後押しして参加させてきたのである。衣裳が必要だ と知りつつも、私がこなかったのを理由に、衣裳作りは保留になっていた。 そこで慌ててミシンと布(ここの民族衣裳で腰に巻きつけたり、スカーフ にしたりする2ヤードのもの)を用意させ、間に合わせの細長い袋を縫っ た。学芸会開始予定時刻まであと1時間弱。この村からは4校、約100人 が隣村の会場まで移動する。交通費を出す余裕は学校にも個人にもないの で、ジープで何度もピストン輸送してもらう。30分前、会場に到着。広い 緑の校庭の高台を舞台に、下から見上げられるように客席を設けた。舞台 は両側に街立を立て、ヤシの薬で覆っただけの何単なものだが、下から見 上げると真っ背な空が背景になるのが見せ物である。また例によってヤシ の葉を使って客席に日よけを立ててもらった。しかし、その会場は30分前 というのにガランとしている。出場予定の数校には1時間前にきて、練習 をしておくように言っておいたのだが……。 開始予定時刻、 9時半。 審査 をお願いしておいた現地語の堪能なアメリカ人の神父さんと、早日にジー プで迎えに行かせた2枚の先生と生徒が、たいくつそうに閉鎖を待つ。10 時。ようやく、地元の学校の連中がやってきた。私達が言うガーナ・タイ ムからすれば30分遅れなどまだましな方であるが……。それにしてもプロ グラム一番のB幼稚園がまだきていない。ジープはとっくに迎えに出てい るはずだが。10時半、B幼稚園の先生の1人が息を切らせてやってきて、 ジープがまだ迎えにこないという。他からの情報ではジープはガソリン切 れで今ガソリンを捜し回っているとのことだ。交通費は後で支払うことに して、ローリー (小型トラックの荷台を客席に改造したもの) でくるよう 指示し、プログラムを変更してスタートすることにした。固苦しいイギリ ス式の開会式は一切抜きにして、すべて生徒でまかなう。司会者が簡単な 開会のあいさつをして、いよいよスタート。見物の先生、生徒が集まって きて会場が急に騒がしくなってきた。

スタートは、かわいらしくA幼稚園の動物の行進だ。大人もののシャッキセーターをかぶり、手首、足首をひもでしばり、マスク、シッポを付ければヤギやネコのでき上がりだ。ゾウは2人1組、大きな布を覆せ、A用に綿を詰めたストッキングをそのまま頭にすっぽり覆せ、目と耳をつける。これでも大そう受けている。舞台裏からどなる先生に怯えつつ、必死で丸覚えのセリフを2度も3度も繰り返す園児。次は、いよいよ苦心の作、カラスであ

る。昨晚眠い目をこすりつつ仕上げた衣裳。 黒い大きなブラウスに前後に小さな白いエブロン (ここのカラスはエブロンカラスと呼ばれるように,首の前後に白い部分がある), 国子折りにした黒い紙を背中にしっぽ用として、両手に羽用としてしばりつけた。彼が登場した時の声援で、昨晚の苦労も報われた。 なまじっか受けたばっかりに、かわいそうに彼は何度も舞台を走り回り、同じセリフを繰り返すはめとなった。 朝、あわてて疑った長いへビ用の袋に 2 人を入れたが、彼ら自身では動くことができず、先生が舞台中央までへビ遠 (?) を運んだ。それでも動けず、その動けずにムズムズしているのが非常に受けた。

次はC小学校3年生の"みんなでABC……を習おう!"という出し物。ABCの歌に始まり、1人~3人1組でAからZまで1つずつ体文字を作り、"A for ……" "B for ……" とやっていくもの。色も形も不揃いな上,破けていたりする制服よりは、1色の布でくるんだ方が、作る体文字もはっきりするだろうと思い、苦心の末、真っ赤なつなぎの衣袋を作った。古若,古布ではうまくまかなえないので、布を買うことにしたが、物不足のこの国で、指定の色の布を、ある程度の量買うのはむずかしかった。結局、首都のアクラに出て、2軒の店から高い布を買い集めなければならなかった。子算の都合で4着しか作れなかったので、一文字が終るや否や衝立の裏に引っ張り込んで、引きはがすようにしてぬがせ、次の子に着せる。客席は次の子供達の出番をまだかまだかと待ちかまえている。これを27回繰り返した末、お客はほっとし、楽屋の裏方はくたくただった。しかし、教室での学習内容を舞台化するという点では、ここの人違には新しいものであったし、少なくとも、今、アルファベットを勉強中だったこのクラスの子供達は、1人残らず、しっかり学習できたに違いない。

次は、ようやく到着したB幼稚園のダンスである。当初の予定では"各国のダンス"ということになっていたが、時間不足のため、ガーナのダンス2つだけにして、衣裳に力を入れることにした。夜、ランプの下で、どこからともなく聞こえてくる音楽にのって踊る子供達をよく見かけるが、特に小さい子の踊りの、なんとかわいらしいことか。私はいつか、それを舞台で披露させたかったのだ。衣裳はカラフルな細長い端布を集めて腰に巻き付け、金、銀の色紙でネックレスを作り、エペダンス(エペ族のダンス)用とした。また、余り布の中に白い光沢のある布がたくさんあったので、それをつない

で簡単なワンピースを作り、鮮やかなペーパー・フラワーをポイントにして胸につけ、もう1つのおとなしいダンス用とした。練習不足で戸惑いながらやっているが、十分かわいい。恥ずかしげに体を動かしているだけでも拍手喝采だ。繰り返しているうちにいつしか客を忘れ、音楽にのってくる。頭のてっぺんから足の先までがリズムにのっている。実にうまい。

D中学校は、次が出番だというのに準備が整っていない。それもそのはず、昨日ようやく紙芝居用の絵が描き終わったばかりで、練習もほとんどしていないのだから。西アフリカの民話"アナンシー(くも)物語"を大きい紙芝居でやろうというのが案だった。ここの先生は絵を描くのが得意だったため、そうしたのだが、欲張ってアナンシー(主役)を人形にしたためか、日曜日まで私の家にきてもらって仕事をしたにもかかわらず、仕事が遅れ、その上十分練習もできなかったのだ。案の定、人形を動かす者、絵を持つ者、ナレーターの息が合わず、飲々な結果だった。この負けん気の先生は、練習して、もう1度機会を見つけてやってみる。と言っていた。準備期間が十分ではなかったので、私はこの学芸会が普通の意味で「大成功」というところまで望んではいなかった。やっている者、見ている者が、その中から何か新しいアイディアを汲み取ってくれ、工夫すれば何かできるのだということに気づいてくれればいいと思っていた。

楽屋裏は、次のE小学校6年生の劇の準備で騒がしい。この頃になると舞台も客席もない。舞台になっている高台にも、見物の生徒が出演者を後ろから見、楽屋裏までまる見えになる位置に陣取っている。劇は桃太郎のガーナ判。名付けて"ボボコフィー"。桃の代りにボボ(パパイヤ)、太郎の代りにガーナによくある男の子の名前コフィーである。ここの先生は、私の知る先生の中では一番よく動き、責任感のある人なので特に時間のかかる劇を任せた。話を現地語に訳すことに始まり、歌の指導、衣裳作りなど大変だったが、よくこなしてくれた。子供達も楽しんで、クラスの仲間が協力して練習にあたってくれた。白い上下に赤い蝶ネクタイのナレーター役は5年生からの借りものだ。家庭の事情で遅れて入学する子が多いから、年齢は様々である。この子は6年生の子より賢い。長い文もすぐに覚え、堂々とナレーターの役をこなしている。スト中に、いいかげんな公立学校に見切りをつけた親が、主役だった子を私立校へ転校させる、などの出来事もあった。とにかく役者選びは大変だった。自信があろうが、あるまい

が、誰もが役を欲しがる。これは日本の子供と大きく違うところだ。授業中も同じで、わからなくても手を上げ、指名されてから考える。指名されると大喜びで、答えられなくても恥ずかしがったりなどしない。みんな舞台度時はいい。会場は大いにわいた。この主題歌(様太郎の英訳)は、この後、この辺の村で大変ヒットし、通りすがりに耳にした。

最後は、F中学校のダンスだ。この学校は前からダンスグループがあっ て、かなり練習を積んでいる。何かの機会に彼らのダンスを見て、その巧み さに感激した。楽隊(タイコ)5人,ダンスグループ男子5人,女子5人でペ アを組んだ踊りが多い。しかし、何かパッとしなかった。踊りは洗練されて いるが、身にまとっているものが地味な色、柄で、しかも不揃いな布のせい だろうか。そこで、その学校でダンサー達の衣裳作りを美術の時間で扱う ことにした。10人もの衣裳となると、端布を使うわけにもいかず、かといっ て買う予算もないし……。そこで考えたのがペッド用の古い白シーツ。3, 4枚で、なんとかまかなえた。スタイルは男子は腰だけ、女子は胸と腰に長 い布を巻き付けるだけのシンブルなものにして、色を工夫することにした。 - 結局, 日本から送ってもらったリキテックスという特殊な絵具で, ペアには 同じ色の布, そして5組の並ぶ順序に従い, 色のグラジュエーションを使 った華やかなデザインにした。描き終わった布を見ると、うす汚れたシーツ が地デザインの間からのぞき,不揃いな途り方のため,あまりパッとしなか ったが、今日、こうして10人並べて見ると、とても手作りとは思えない美 しい衣裳である。ダンサー達も初めてのお揃いの衣裳に大喜びた。時刻は、 すでに1時を回り、太陽が真上から照らしている。空は真っ青。それをバッ クに黄系、赤系、紫系、背系、緑系の衣裳をつけたダンサー造がピチピチ と踊る。ダンスの巧みさと色の華やかさに拍手喝采である。踊る生徒遠も 汗ダクダクだが、表情も変えず、相変わらずスキのない踊りを見せてくれ る。 Beautiful! Beautiful! という声が聞こえる。今までの踊りを見て の評価は "Done well" だった。私はそれまで舞台裏で動き回っていた が、初めて客席に降りて踊りを見上げた。あの空の青さと、それをバック に放しく揺れ動く美しい色とが織りなす、すばらしい光景は一生忘れるこ とがないだろう。

教育協力について思うこと

広. 瀬 桂 子

ガーナから帰国して、まだ3週間足らず、あわただしい毎日を送っている。 ガーナは物質的には貧しく、多くの問題を抱えた国だが、陽気で親切な人た ちのお陰で、楽しい2年間を過ごすことができた。

今,この物の豊富な日本にいて、ガーナ時代を振り返ると、しみじみ『ガーナは貧しかったなあ』と思う。そして今さらながら、あの貧しさの中で、あれだけ明るく、私たち外人に対しても寛容であったガーナ人に感心する。それはガーナ人の天性にもよるのだろうが、ガーナの誇る教育の成果が大きいと思う。いくら国が貧しくても、ガーナ政府は教育の手抜きだけはしないように努めている。教育水準はブラック・アフリカ随一と聞いた。奨学金制度が進んでいて、特に大学生は生活に不自由なく勉強ができるよう、国が面倒をみている。希望者全員を収容できる設備のよい景があり、学費は無料で、お小遺いまでもらえる。

教師を3年以上やった者が大学に入ろうとすれば、勉強をしていても家族を変えるように、それまでと同額の給料が国から支払われ続ける。力さえあれば、好きな時に、高等教育が受けられる。このように高等教育がかなり進んでいるのに驚く。あんなに厳しい状況の中で、あれだけの秩序を保っていられるのは、この進んだ高等教育によるものであることは確かだろう。

しかし、初等教育までは、なかなか手が回らないようである。 政府もいろい ろ政策を立てるのだが、 今の経済状態の中では実行できない の が現状であ る。 以下は、 私がのぞいた初等学校の様子と、 教育協力について考えたこと である。

先日、塾で教えている子供たちに、ガーナの子供たちの様子を8ミリフィルムで見せる機会があった。子供たちの感想は様々だった。「ワー、みんな本当に真っ黒だ。あんな中にいて恐くなかった?」と正直に反応する小学生。「自分たちのもっていたアフリカのイメージとは大分違っていた」と驚く高学年の子供たち。中でも「みんな楽しそう」と羨ましそうに見ていたのは中学生、高校生。

確かに、受験勉強に明け暮れる毎日を送っている彼らにしてみれば、背空の下で自由に踊ったり歌ったりしているガーナの子供たちが袋ましく見えるかもしれない。私もガーナに行く前は、のんびり過ごしているアフリカの子供たちが、とても幸せそうに思えた。ところが、実際ガーナの子供たちの生活を見ていて、実は、私たちが思うほど自由な時間を楽しんでいるどころか、時間をもて余し、なすべきことを求めていることが判った。

セカンダリースクール (日本の高校程度) や私立学校は別として、公立の 小・中学校は形式的につくられた時間割はほとんど無視され、先生方の気分 で運営されている。区の体育大会、合唱コンクールがあると、区の全校が1 週間から10日間休みになったり、先生方のストも1週間単位で行なう。草刈 りも学期の初めと終わりに1週間ずつ、などと、授業日数はどんどん削られ る。また、平日でも先生が平気で町の市場へ買い物に行ったり、お葬式などと いうと、1週間も2週間も学校をあける。午前中、授業をやると、午後は自由 時間などというのも多い。その自由な時間に子供たちは何をしているかとい うと, 低学年の男の子たちは元気に外でボール遊びなどをしているが, それ以 外の子供たちは教室内や木陰でボケッとしているのを、よく見かける。本や 遊び,運動の道具があるわけでもないので,毎日のこと,遊びも尽きる。する ことが無いからと学校を休んだり、家に帰ったりすると罰は厳しい。拘束さ れた時間は、何をしなくても学校にいなくてはいけないのである。空白な時 間は、時間に迫われた者が初めて求めるものであって、そうでない者にとって は退屈なものでしかない。結局、上の学校に入るための試験科目(英・数) 以外が削られることになる。

音楽や体育は、大会の前に集中的に練習するくらいで、普段は特別教えられていないし、図工は道具、材料不足にかこつけて、ほとんど教えられていない。日本では今、情操教育が見直されてきているが、受験戦争に邪魔をされ、思うように行なわれていないのが現状だ。途上国側には、情操教育に力を入れる余裕など、まだないだろうが、ガーナの初等教育がこのまま進んだら、情操教育を置き去りにしてしまい、日本のように受験重視主義の問題を多く抱えたものになってしまうだろう。とにかく国の発展に直結するエリートの教育が先決なのは、ごく当然のことで、先進国の教育の援助は、高校以上の場へ集中してくる。

私は理数科教師としてセカンダリースクールに派遣されたが、前述のよう

な初等学校の状況を見ていて、子供たちが、あんなふうにして大切な時期を 過ごすのは気の罪に思えた。あれだけの時間があったら、子供たちが楽しめ る、いろいろなことができるのに……と思った。日本の中学校で教えていた 時に、種々の拘束で子供たちと取り組めなかったことが、ここでは、できそ うだと思うと、そちらに手を出さずにはいられなかった。

私のカリキュラムのために時間は充分用意された。たとえば紙粘土で村の 模型地図をつくった時は、紙もぎりにまる1日、水に没しておいた紙を現地 食のフーフー(もちのようなもの)をつく時に使う日と杵なる物を数租庭に 並べ、女子のつくるノリと、ついて混ぜ合わせるのにも1日を費やした。学 芸会の練習も、何よりも優先して時間をとってくれた。図工を主体とした数 材づくり、遊びの道具づくり、学芸会等、空白だった時間と、材料は廃品を 使い、子供たちと楽しむことができた。先生方も、物が無くても、工夫すれ ば、いろいろなことができることが判った、と暮んでくれた。

教育についての技術援助の現状は、少し消極的なように思う。相手国の要 請に応じるばかりでなく、相手側がその重要さ、必要さに気がつかない点、つ まり先進国の教育界で問題になっている点、また、先進国が発展してきた段 階で改革の余地があったと思われる点を充分考慮して、協力の方法を考える べきではないだろうか。語学の問題があるので、教師はいつも問題がそちら に集中され、教育について考える余裕のないのが現状だが、やはり、教育分 野に携わるかぎり、考えなくてはならない問題である。高校に教師を入れる か入れないかという、高校教育へだけの局所的なメスの入れ方ではなく、教 育のタテの関係、時間の流れも考慮していくべきだろうと、帰国した今、反 省しながら考えている。



「学芸会。middle school の生徒のダンス。古い シーツに自分達で描いて作った女装に注目!



学芸会。ガーナ版株太郎 (Paw Paw Kofi) 鬼ケ島の場面

広瀬隊員の報告書を読んで

伊 藤 信 隆

まず、広瀬桂子隊員に対して「ご苦労様でした」とその労をねぎらいたい。 この隊員の派遣国はガーナで、そこで小学校・中学校において図画・工作及 び教材づくりの指導を1年間にわたって行なってきた。ここで、この隊員の 指導内容の具体例を示して、感想を述べてみよう。

第1回講習会は画材としてのクレョン, 更紙が学校に揃っていたため指導が比較的スムーズに行なわれた。隊員の指導で興味深いのは図画の作品を製作後に展示したことであろう。我が国では全く常識的なことであっても, 他国においては新しい学習指導法であったりする。隊員の報告によれば, 展示作品を見て子供たちが非常に狂んだという。このことは, 同時に教育に対する指導法としても大いに役立ったのではないだろうか。

隊員は、また「時間割」づくり、「学級の役割」、「学級用の花瓶」づくり、などを指導項目に取り上げたことは適切であったと思う。

第2回講習会では「算数ゲーム・カード」、「粘土で作るパッチ」づくりを取り上げ、また第3回講習会では「クリスマスカード」づくりを取り上げている。現地の子供たちの関心や生活の実態に応じた課題を取り上げたのは賢明であったと思う。隊員の感想文によれば、子供たちは大変楽しく学習し、成果をあげたことを述べている。

隊員はまた、1学期の総まとめとして、講習会に参加した先生方の各校から、図画作品を集め、作品展を開き、鑑賞会を開いた。また、鑑賞会には各校から先生1名、生徒2名を参加させ、学校間の交流を図ったことは大変有意義であったと思う。

隊員の報告書には、隊員自身の実践結果に対する自己評価がくわしく書かれており、今後の隊員には1度は読んでもらいたいものである。

わずか2年間の海外協力であったが、文化環境の異なる国において大切な 仕事をしていただいた。何よりも元気で帰国されたことをお喜び申し上げ、 隊員の努力に深く敬意を表したい。(協力隊技術専門委員)

あとがき

育年海外協力隊員の報告担集を発刊するに際し、数多い報告書を、どう分類し、いかに活用するか、いろいろ意見がありましたが、隊員の活動を広く紹介する観点から、まず国別編とし、昭和54年度から作成を始めました。55年度もこの方針を継続して9ヵ国編を作成いたしました。国別編が一巡した後は、順次、違った角度で報告書集の作成を続けていきたいと考えています。

末筆ながら、この報告書集のために、御多忙中にもかかわらず、積極的に 御協力いただき、報告書に対するコメントを御執筆下さった技術専門委員の 方がた、ならびに報告書の収録を快諾され、「追記」の原稿を寄せられた隊 員(OB)の皆様に厚くお礼申しあげます。

なお,本報告習集の御活用にあたり,他への転載等を企画される場合は背 年海外協力隊事務局(啓発課)に必ず御相談下さるようお願い申しあげます。

昭和55年12月

啓発課長 高 橋 成 堆

海外協力の現場から――青年海外協力隊員の記録<ガーナ編>

昭和55年12月発行

福 者 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

発行所 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

〒150 東京都渋谷区広尾 4 - 2 - 24

電 話 (03) 400-7261 (代)

印刷所 邦 美 印 刷 株 式 会 社

- 〔非禿品〕-

